

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第103集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市 - I

2006

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
中日本高速道路株式会社横浜支社

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第163集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市-1

2006

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
中日本高速道路株式会社横浜支社

序

第二東名高速道路は約170kmにわたって静岡県内を東西につらぬく形で建設が予定されている。本書は、その建設に伴い実施された、島田市志戸呂に所在する上ノ山遺跡の発掘調査報告書である。

島田市金谷地区では、周知の遺跡である駿河山遺跡、上志戸呂古窯も第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われ、別に報告がなされる予定であるが、本書で報告されている上ノ山遺跡は今回の調査で新たに発見された弥生時代の集落遺跡である。金谷地区での弥生時代の遺跡は、そのほとんどが土器片の出土が報じられているにすぎず、本格的な発掘調査により遺跡の内容が明確となったのは、この上ノ山遺跡と駿河山遺跡が初めてである。

弥生時代を特徴づけるものといえば水田稲作である。大井川流域に水田稲作技術が伝わってきたのは弥生時代中期～後葉と考えることができる。金谷地区でそのころ水田稲作が行われた可能性の高い候補地は大代川流域と考えられており、上ノ山遺跡はその大代川左岸の丘陵上という立地に存在する。今回の調査では水田稲作を示す直接的な発見はなかったが、今後の調査・研究の進展につながる資料を提供したことになろう。金谷町域のみならず、周辺地域との関わりのなかで今回の調査の成果が活かされることを期待するものである。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社横浜支社、島田市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げる。最後に、現地調査、資料整理に関わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第である。

平成18年3月

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齋藤 忠

例　言

- 1 本書は、島田市金谷地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県島田市志戸呂971-6外に所在する上ノ山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区(市町村)単位で実施している。島田市域では本書が第1冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　島田市-1」とした。
- 3 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社(旧日本道路公団静岡建設局)の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、島田市(旧金谷町)の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 4 現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第1章に明記した。
　　確認調査：平成11年1月 川上 努
　　本調査：平成11年4月～9月 石田 勉、川上 努
　　資料整理・報告書作成：平成16年4月～平成17年3月 川上 努
　　　　　　　　　　平成17年4月～平成18年3月 河合 修、鈴木綾子
- 5 本書の執筆は第1章第1節を及川 司が、第1章第2節を河合が、他の部分を川上が行い、河合が一部加筆した。
- 6 調査における協力者等は、文末に記載した。
- 7 現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は玉野聰治コンサルタント株式会社に委託した。
- 8 整理作業における石器の実測は株式会社アルカ及び株式会社フジヤマに委託した。
- 9 本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。
- 10 驚異遺物の取り上げ及び保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
- 11 調査の標題は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 12 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
- 13 分類調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

- 1 座標は平面直角座標笛VY系を用いた国土地標、日本測地系(改正前)を使用している。
- 2 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。
　　例 S P 16 (S F : 遺構の種別 16 : 遺跡内の遺構種類別番号)
　　S B : 窪穴住居跡　　S H : 振立柱壙物跡　　S D : 潟状遺構　　S F : 土坑
　　S P : S B 外の小穴　　P : S B 内の小穴
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。
- 4 遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別に関わらず、通し番号を付している。
- 5 観察表にある石器等の石材は、株式会社アルカ及び株式会社フジヤマの鑑定による。
- 6 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技師会議事務局監修 1992)を使用した。
- 7 本書の図中に用いたスクリートーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。

目 次

序／例言／凡例／目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第1章 総 論 | 1 |
| 第1節 調査に至る経過 | 3 |
| 1 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯 | 3 |
| 2 現地調査の体制 | 4 |
| 第2節 島田市西部の位置と環境 | 6 |
| 1 地理的環境 | 6 |
| 2 歴史的環境 | 7 |
| 第3節 確認調査 | 11 |
| 1 確認調査の対象地点 | 11 |
| 2 確認調査の方法と経過 | 12 |
| 第4節 本調査 | 13 |
| 1 本調査の方法と経過 | 13 |
| 2 本調査の概要 | 13 |
| 第5節 資料整理 | 15 |
| 1 資料整理の体制 | 15 |
| 2 資料整理の方法と経過 | 16 |
| 第2章 上ノ山遺跡 | 17 |
| 第1節 位置と環境 | 19 |
| 1 位置と地理的環境 | 19 |
| 2 歴史的環境と調査歴 | 20 |
| 第2節 調査の方法と経過 | 21 |
| 1 発掘調査の方法 | 21 |
| 2 発掘調査の経過 | 21 |
| 3 資料整理の方法と経過 | 23 |
| 第3節 調査の成果 | 24 |
| 1 概要 | 24 |
| 2 遺構と遺物 | 27 |
| 第4節 まとめ | 93 |
| 写真図版 | |
| 抄録 | |

挿図目次

- 総論
- 第1図 金谷地区の地質
第2図 金谷地区の地形と地名
第3図 周辺の遺跡分布図
第4図 第二東名の路線と対象地点
上ノ山遺跡
第5図 本遺跡の位置と周辺の遺跡
第6図 本調査範囲と周辺の地形
第7図 グリッド配置図
第8図 調査区土層断面図
第9図 遺構全体図
第10図 坪穴住居跡S B14
第11図 土坑S P 9遺物出土状況及び出土遺物
第12図 土坑S P 6・10・11・12
第13図 坪穴住居跡S B 1・2
第14図 坪穴住居跡S B 1・2出土遺物
第15図 坪穴住居跡S B 3
第16図 坪穴住居跡S B 4 及び出土遺物
第17図 坪穴住居跡S B 5 及び出土遺物
第18図 坪穴住居跡S B 6 及び出土遺物
第19図 坪穴住居跡S B 7 及び出土遺物
第20図 坪穴住居跡S B 7 内P 3遺物出土状況
第21図 坪穴住居跡S B 9 及び出土遺物
第22図 坪穴住居跡S B 10
第23図 坪穴住居跡S B 10出土遺物
第24図 坪穴住居跡S B 11
第25図 坪穴住居跡S B 11出土遺物
第26図 坪穴住居跡S B 12・13・18
第27図 坪穴住居跡S B 12・13・溝S D 5出土遺物
第28図 坪穴住居跡S B 15・17
- 第29図 坪穴住居跡S B 15出土遺物
第30図 坪穴住居跡S B 16及び出土遺物
第31図 坪穴住居跡S B 19
第32図 遺構出土の石器・石製品
第33図 遺構出土の石器・石製品2
第34図 掘立柱建物S H 1
第35図 掘立柱建物S H 2・3
第36図 掘立柱建物S H 4
第37図 掘立柱建物S H 5
第38図 掘立柱建物S H 6
第39図 掘立柱建物S H 7
第40図 掘立柱建物S H 8
第41図 坪穴住居跡S B 8 及び出土遺物
第42図 土坑S P 181及び出土遺物
第43図 溝S D 8出土遺物
第44図 主要遺物の分布状況
第45図 遺構外出土遺物1
第46図 遺構外出土遺物2
第47図 遺構外出土遺物3
第48図 遺構外出土遺物4
第49図 遺構外出土遺物5
第50図 遺構外出土遺物6
第51図 遺構外出土遺物7
第52図 遺構外出土遺物8
第53図 遺構外出土遺物9
第54図 遺構外出土遺物10
第55図 遺構外出土遺物11
第56図 遺構外出土遺物12
第57図 遺構外出土遺物13
第58図 遺構外出土遺物14

挿表目次

- 総論
- 第1表 金谷地区現地調査の体制
第2表 周辺の遺跡一覧表
第3表 調査実施期間
- 第4表 資料整理の体制
上ノ山遺跡
第5表 坪穴住居跡小穴計測表
第6表 掘立柱建物柱穴計測表

| | |
|------|------------------|
| 第7表 | 出土遺物観察表（土器・陶器1） |
| 第8表 | 出土遺物観察表（土器・陶器2） |
| 第9表 | 出土遺物観察表（土器・陶器3） |
| 第10表 | 出土遺物観察表（石器・石製品1） |

| | |
|------|------------------|
| 第11表 | 出土遺物観察表（石器・石製品2） |
| 第12表 | 出土遺物観察表（石器・石製品3） |
| 第13表 | 出土遺物観察表（石器・石製品4） |

写真目次

総論

- 写真1 上志戸呂塗跡の調査
写真2 琴河山遺跡の調査

上ノ山遺跡

- 写真3 遺物接合・復元作業
写真4 遺物実測作業
写真5 版下作成作業
写真6 原稿執筆作業

図版目次

| | |
|------|-----------------------------|
| 図版1 | 南からの遺跡遠景 |
| | 東からの遺跡遠景 |
| 図版2 | 西からの遺跡遠景 |
| | 南からの遺跡遠景 |
| 図版3 | 調査区全景（俯瞰） |
| 図版4 | S B 1～3 |
| | S B 4・5 |
| 図版5 | S B 5～8・19 |
| | S B 10～13・18 |
| 図版6 | S B 12・13・18・15～17、SH 8 |
| | S B 11～18 |
| 図版7 | S B 14（北より） |
| | S F 9 遺物出土状況 |
| 図版8 | S F 11 半截状況（北より） |
| | S F 11（東より） |
| 図版9 | S B 1・2（東より） |
| | S B 2 西側炉跡 |
| | S B 2 東側炉跡 |
| | S B 2 遺物出土状況（壺 南東より） |
| | S B 2 遺物出土状況 (乳棒状石斧 北より) |
| 図版10 | S B 3（北より） |
| | S B 4（南より） |

| | |
|------|--------------------------------|
| 図版11 | S B 4 遺物出土状況（土壙） |
| | S B 5 遺物出土状況（壺） |
| | S B 7 内小穴 P 3 遺物出土状況 |
| | S B 5（南より） |
| 図版12 | S B 6（南より） |
| | S B 7 炭化物検出状況 |
| 図版13 | S B 7（北より） |
| | S B 8（南より） |
| 図版14 | S B 9 遺物出土状況 |
| | S B 9（南より） |
| 図版15 | S B 9 遺物出土状況（壺） |
| | S B 10 遺物出土状況（扁平片刃石斧） |
| | S B 11 焼物検出状況 |
| | S B 11 潢物出土状況 |
| | S B 10（南より） |
| 図版16 | S B 11（南より） |
| | S B 12・13・18（北より） |
| 図版17 | S B 12 遺物出土状況 (柱状片刃石斧 東より) |
| | S B 12 遺物出土状況 (用途不明石製品 東より) |
| | S B 12 遺物出土状況 |
| | S B 12・13 遺物出土状況 |
| | S B 15・17（東より） |

- | | | | |
|------|---------------------|------|-------------------------------------|
| 図版18 | S B15焼土検出状況（北より） | 図版28 | S B12・13・15、S D 5出土土器 |
| | S B15遺物出土状況1（東・西より） | 図版29 | S B出土上土器・石製品 |
| | S B15遺物出土状況2 | 図版30 | S B出土石製品 |
| | S B15遺物出土状況3 | 図版31 | S B出土石製品、S P18I出土灰陶陶器、 S D 8出土土器 |
| | S B16（北より） | 図版32 | 遺構外出土土器1 遺構外出土土器2 |
| 図版19 | S B16遺物出土状況 | 図版33 | 遺構外出土土器3 遺構外出土土器4 |
| | S B19（西より） | 図版34 | 遺構外出土土器5 打製石鏃・石錐 |
| 図版20 | S F10 | 図版35 | 石匙 スクレイパー |
| | S D 8 遺物出土状況（打製石斧） | 図版36 | 打製石鏃・磨製石斧 |
| | 遺物出土状況（磨製石鏃） | 図版37 | 打製石斧1 |
| 図版21 | S P14I遺物出土状況（南より） | 図版38 | 打製石斧2 |
| | S H1・2・3（西より） | 図版39 | 打製石斧3 |
| 図版22 | S H4（南東より） | 図版40 | 打製石斧4 打欠石鍬1 |
| | S H6（北東より） | | 打欠石鍬2 |
| 図版23 | S P18I遺物出土状況1 | | 敲石 |
| | S P18I遺物出土状況2 | | |
| 図版24 | 溝 S D 8（北側） | | |
| | 溝 S D 8（南側） | | |
| | 埋没谷と調査状況 | | |
| 図版25 | S F 9、S B 1・2・4出土土器 | | |
| 図版26 | S B 5～8出土土器 | | |
| 図版27 | S B 9～11出土土器 | | |



第1章 総論

第1節 調査に至る経緯

1 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

混縦化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和52年の道路審議会において第二東名・第三名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村へ神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進府内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共交通や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財発掘地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。照会結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あて回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象面積が1,453,518m²となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高規道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となつた。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行っても、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象面積は1,286,759m²となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では軒杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名開

連埋蔵文化財述略調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以後、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設局は平成8年7月1日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo94地点、浜北市大平のNo136地点、同市四大地のNo137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町・御殿場市間にについても日本道路公団に対し、平成9年1月31日付けで建設に係る調査開始指示がなされ、さらに平成9年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に調査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付けで日本道路公団静岡建設局より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財泡蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付けで再請求の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区间で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象面積は108,734m²であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付けて協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的に本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排水処理場について静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に随伴して静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、島田市金谷地区における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する3地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、静岡県埋蔵文化財調査研究所があたったが、用地買収が進んで、一部調査実施が可能となった平成10年度より、No91地点（駿河山遺跡）、No92地点（上志戸呂麻跡）、No93地点（上志戸呂）の確認調査から開始した。

2 現地調査の体制

金谷地区の確認調査及び本調査は、平成10~13年度に実施した。その体制は第1表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、「本事業」という。）においては、平成11年度以降に本事業担当課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、上ノ山遺跡の所在する金谷地区は掛川工区内の一地区である。

金谷地区的担当は、確認調査段階では島田市旭に所在する島田事務所を、本調査段階では各現地事務

所を拠点として各現地調査を実施した。なお、調査担当者については、例言にあげることとする。

また、現地調査を優先するという方針から、整理作業は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、現地事務所及び島田事務所にて、現地と並行して実施した（以下、「基礎整理」という）。

各現地調査・基礎整理には第1表以外にも多くの者が参加した。

第1表 金谷地区現地調査の体制

| | 平成10年度 | 平成11年度 | 平成12年度 | 平成13年度 |
|----------|--------|--------|--------|---------------|
| 所長 | 齋藤 忠 | 齋藤 忠 | 齋藤 忠 | 齋藤 忠 |
| 副所長 | | 山下 晃 | 山下 晃 | 山下 晃 |
| 常務理事報達部長 | 伊藤 友雄 | 伊藤 友雄 | 伊藤 友雄 | 余田 徳幸 |
| 次長 | | | | |
| 認可課長 | 杉木 敏雄 | 杉木 敏雄 | 杉木 敏雄 | 木杉 昭一 |
| 総理担当員 | 福葉 保幸 | 福葉 保幸 | 福葉 保幸 | 福葉 保幸 |
| 總務課長 | 田中 雅代 | | | |
| 会計係長 | 杉田 誠 | | | |
| 調主任 | | | 鈴木 秀幸 | 鈴木 秀幸 |
| 主事 | | 鈴木 秀幸 | | |
| 調査課長 | 石垣 美夫 | 佐藤 達雄 | 佐藤 達雄 | 佐藤 達雄 |
| 次長 | | 佐野 五十三 | 及川 司 | 黒野 克口 及川 司 |
| 次長心得 | 佐野 五十三 | | | |
| 担当課長 | 遠藤 喜和 | 及川 司 | 及川 司 | 及川 司 |
| 工区主任 | | 飯塚 靖夫 | 飯塚 靖夫 | 加藤 利文 |
| 主任調査研究員 | 飯塚 靖夫 | | | |
| 調査研究部 | 石田 勉 | 石田 勉 | 大畠 裕 | 中田 出 |
| | 諸星 雅一 | 諸星 雅一 | 諸星 雅一 | 河合 修 |
| | 河合 修 | 木崎 道昭 | 川上 労 | |
| | 川上 労 | 河合 修 | 中田 出 | |
| | 大林 元 | | 河合 修 | |
| 保存処理室長 | | | | 西尾 太加二 |

第2節 島田市西部の位置と環境

1 地理的環境

島田市西部（以下、「金谷地区」という。）は、北緯34度50分、東經138度7分30秒付近の静岡県中部に位置し、北側は猿投郡川根町や周智郡森町、東は大井川をはさみ島田市東部（島田地区）や藤枝市、西は掛川市や菊川市、南は牧ノ原市に接している。金谷地区は島田市のうちでも、大井川の西岸地域北側に当たり、平成17年5月の島田市との合併以前は、金谷町であった。金谷地区的面積は64.35km²を測り、島田市の面積である195.39km²のおよそ3割3分を占める。

金谷地区は、南アルプスの南端に当たる丘陵と、大井川が主体となって形成した沖積平野から構成されている。丘陵は市域の北側～西側に広く分布し、平野部は横浜・相模付近から急激に幅を広げ、市域の南東側を占める。この丘陵は、地区的北部では中生界白亜系の四万十層群、半ばでは古第三系の瀬戸川層群、南部では新第三系の倉間層群などに属する。これらのうち四万十層群、瀬戸川層群には頁岩や砂岩を含む層が発達している。大井川の河床にも流出した軽石が多く含まれており、流域の第四紀時代遺跡から頁岩や砂岩製の石器が多く出土することにも反映している。これら丘陵部は白亜期以降の造山運動によって隆起したものといわれるが、現在では大井川や白光川、大代川等丘陵部一帯の雨水を集めれる河川によって開拓された急峻な谷地形により、大きく3つの山塊に分けられる。

最も北側が八嵩山（標高832.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊は、北は川根町家山から切山にかけての大きな谷によって、南は島田市福用から西に入る谷に区切られる。西側は掛川市域の大尾山（標高661m）との間にある掛川市黒俣付近から北に入る谷が境となる。中ほどが経塚山（標高669.9m）と裾部に広がる尾根である。北は金谷町相用から西に入る谷に区切られ、南と西は大代川とその源流部が開拓した谷部で区切られる。この丘陵の、特に南東部の尾根上は台地状の平坦面が発達する。もつとも



第1図 金谷地区的地質

も南側が栗ヶ岳（標高532.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊の南側は漸移的に牧ノ原台地の北縁につながる。これらの丘陵の東縁となるのは、大井川である。特に島田市高熊・鍋島・神尾付近では丘陵の張り出しにさえぎられてS字状の蛇行を繰り返す。また、同地域と島田市横浜付近の丘陵端部には、大井川の影響による河岸段丘が発達する。これらの丘陵のほかに、島田市牛尾には頂上が台地状になる牛尾山がある。この山は現在では独立丘となっているが、かつては島田市相賀の丘陵部と牛尾山の先端部（山鼻という）が低い尾根によってつながっていたといわれる。

これらの丘陵部には、高位におい

ては杉や檜の人工林や広葉樹の自然林がモザイク状に入り組んでいる。低位においては、等高線に沿って茶の栽培が盛んに行われ、静岡県中西部における特徴的な景観をかもし出している。

主に大井川の堆積物による冲積平野は、島田市横岡付近から金谷河原付近にかけて発達する。この平野部は、中村一氏が天正18年(1590)に牛尾山と横岡の間に堤を築き、相賀・牛尾山間を掘削して大井川の本流を西側に導いたため、耕作域として安定したといわれる。つまりそれ以前は、「島」地名に見えるような中州が点在する大井川の氾濫原であった。

この平野部の堆積作用には、大井川のみならず經塚山から流出する大代川も大きく影響している。大代川はいみなお人里の土砂を運びながら平野部を南下し、牧ノ原台地の北縁で東へ流れを変えて大井川に合流する。なお、旧来の金谷の集落は、栗ヶ岳南東麓と牧ノ原台地の裾に挟まれた大井川の影響を比較的受けにくい高地に営まれているのである。



第2図 金谷地区の地形と地名

2 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代 現在までに金谷地域では、明らかな旧石器時代の遺跡は把握されていない。ただし、平成11~13年度に現地調査を実施した岐河山遺跡(牛尾)からは、洪積層と思われる黄褐色粘土層上位から若干量の石器が出土している。これが旧石器時代の遺物である可能性が高いという見解(金谷町2003)もある。

縄文時代の遺跡は、牧ノ原台地以北の丘陵の、丘陵頂部に広がる台地状平坦部や大井川による河岸段丘上に点在する。このほか牧ノ原台地の縁辺部にも広がっている。

丘陵頂部に広がる台地状平坦部にある遺跡は、比較的高位にある場合(長者原遺跡、安田原遺跡、加藤原遺跡、杉の沢遺跡、西原遺跡、矢坪沢遺跡)と、低位にある場合(岐河山遺跡)がある。この差は、遺跡の性格によるものではなく、集落を営むことが容易な安定した地形がどの位置にあるのかという、地勢的な要因が大きい。比較的高位にある遺跡では調査が及んでいないために内容が把握できるものがないが、大井川中・下流域の縄文時代遺跡に類して、中期を主体とするものであろう。また、遺跡の分布では、加藤原遺跡、杉の沢遺跡、西原遺跡の3遺跡が同じ尾根上に所在し、興味深い。低位にある岐河山遺跡が占地する丘陵上平坦部の面積は、他の縄文遺跡のものよりも卓越した広さを有する。探査遺物の分布から、複数遺跡が近接して存在するものと考えられていた(金谷町1983)が、平成10~13年度の調査によってくまなく遺構が検出され、平坦地一面が連続した遺跡であることが把握された。中期を

中心として、丘陵の西側斜面を集落の廃棄場所、平垣地中央部を居住域に、東側を墓域とすることが明らかになった。また、調査区一面から多數の風化木痕が検出されたことは、これらの機能が隣に包まれた中に存在していたことを示唆している（財團2002）。

河岸段丘上の遺跡には神尾遺跡、宮ノ段遺跡、川根沢遺跡がある。神尾遺跡の状況は判然としないが、宮ノ段遺跡、川根沢遺跡からは打削石斧、磨製石斧、石錐などが採集されている。土器が明らかでないが、おそらく中期に属するもの推測される。牧ノ原台地縁辺部の遺跡は、唐沢遺跡である。黒曜石製、頁岩製の石鏟、石錐、スクレイバーが採集されている。ここでも土器は明らかでないが、おそらく中期に属するもの推測される。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べ土器等時期のわかる遺物が採集されている例が多い。今回の調査地である上ノ山遺跡は中期後半の遺物が出土したことからも、周囲の前身的な集落であることが把握され注目される。他の遺跡は後期を主体とするもので、河岸段丘上や低位の丘陵上にある遺跡（駿河山遺跡、宮ノ段遺跡、横岡城遺跡）と、大井川を望む牧ノ原台地斜面の遺跡（天王町遺跡、下坂遺跡）がある。駿河山遺跡では、調査区全域から200軒以上の後期後半の堅穴住居跡や方形周溝墓群が検出され、当該期の中心的な聚落のひとつであったことが判明している。また、横岡城遺跡からも後期後半の壺形土器が出土し、集落遺跡と考えられている。

古墳時代 古墳時代の遺跡は、前期初頭の遺構・遺物が駿河山遺跡から出土しているほかは、後期の横穴式石室墳が顕著である。しかし、中期～後期の集落遺跡は判然としない。

駿河山遺跡からは、前期の堅穴住居跡、方形周溝墓、区画溝等が検出されている。方形周溝墓は平垣部の西側縁辺に連続して築かれている。堅穴住居跡は、平垣部の半ばから東側縁辺にかけて造られており、外縁には区画溝が巡って居住域と墓域を分っている。全面からくまなく堅穴住居跡が検出された弥生時代後期とはまったく異なる土地利用がなされており、両時代の間に何らかの断絶が強く感じられる。また、堅穴住居跡からは、伊勢湾沿岸のS字型と在地の縫が併存する出土例が残されており、二つの文化の接点として興味深い。

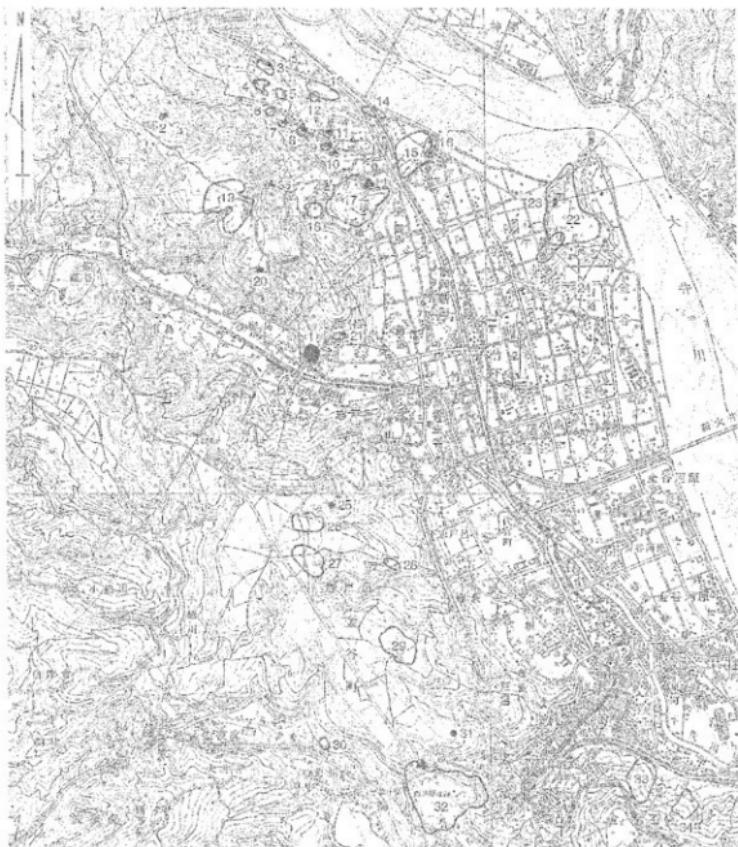
後期の横穴式石室墳は7箇所15基が把握されている。群集する例は、宮ノ段古墳群と駿河山古墳群である。前者は少なくとも3基で構成される。1号墳は最も遺存状況がよく、玄空部分は完存している。2号墳は茶壺の造成によりほぼ破壊され、3号墳も石室の一部が露出している。後者は6基で構成され、丘陵の南側縁辺に築かれている。周囲は茶壠に造成されているので、現況では把握できない古墳が存在する可能性がある。2号墳が昭和57年（1982）に茶壠の改植に伴い発掘調査され、長さ6.7mにわたる横穴式石室が検出されている。一方、孫エ門原古墳や脇平古墳、伊之助原古墳など単独墳は、丘陵縁辺の比較的高所に築かれる傾向が窺える。

古代 古代の集落遺跡は、上ノ山遺跡から奈良～平安時代の遺物と掘立柱建物等が、駿河山遺跡から平安時代後期の掘立柱建物、区画溝が検出された以外は判然としない。一方生産遺跡では、灰釉陶器窯が把握されている。金谷西窯は11世紀代の窯で、静岡県教委が実施した窯業遺跡調査に伴って発掘調査が行われている。当該期の窯は引き続く山茶窯生産とともに、近戸53号窯式並行期から灰釉陶器窯が開始される大井川東岸の旗塙窯と密接に関わるものと考えられる。周辺地域には同時期の窯が複数基所在するようであるが、判然としない。

平安時代の金谷地域は、大井川西岸域を広く莊域とする質信荘に含まれる。この荘園の来歴は、大治3年（1128）8月の藤原永範寄進状に詳しく述べられている。11世紀末には国守大江公資の私領であったものを藤原長家に寄進し本家とし、領家は孫娘が嫁した藤原成季、その子の永実、孫の永範に相伝されたと伝えられる。天永3年（1112）ごろ、本家職が永範に買取られ、実質のすべてが公資の子孫に帰したといわれる。史料には、永久2年（1114）10月14日の源基俊請文書にみえる記載が初見である。永

第2表 周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 |
|----|---------|-------|----|---------|----------|----|--------|----|
| 1 | 上ノ山遺跡 | 弥生～古墳 | 13 | 笠谷1遺跡 | 銅文 | 25 | 風平古墳 | 古墳 |
| 2 | 三ツ沢古窯 | 戦国 | 14 | すやん沢古窯群 | 平安・鎌倉 | 26 | 加能原遺跡 | 銅文 |
| 3 | さつね沢古窯 | 平安・鎌倉 | 15 | 宮ノ段遺跡 | 銅文・弥生・中世 | 27 | 杉ノ段遺跡 | 銅文 |
| 4 | ほろん沢古窯 | 平安・鎌倉 | 16 | 宮ノ段古墳群 | 古墳 | 28 | 杉沢古墳群 | 古墳 |
| 5 | ほろん沢東遺跡 | 近世 | 17 | 横阿城跡 | 歴史 | 29 | 西原遺跡 | 銅文 |
| 6 | 北古窯 | 江戸 | 18 | 御勝寺遺跡 | 中世 | 30 | 奈仁御塚 | 中世 |
| 7 | 新兵衛古窯 | 江戸 | 19 | 長者原遺跡 | 銅文 | 31 | 伊之助原古墳 | 古墳 |
| 8 | 中古窯 | 江戸 | 20 | 深々門跡古墳 | 古墳 | 32 | 諏訪原城跡 | 歴史 |
| 9 | 南古窯 | 江戸 | 21 | 上志戸呂古窯 | 戦国 | 33 | 天工町遺跡 | 弥生 |
| 10 | 益谷西古窯 | 平安 | 22 | 駿河山遺跡 | 縄文～中世 | 34 | 下坂遺跡 | 弥生 |
| 11 | 内藤古窯 | 江戸 | 23 | 猿川山遺跡 | 中世 | 35 | 川根沢古窯 | 歴史 |
| 12 | 上山原古窯 | 江戸 | 24 | 殿西山古墳群 | 古墳 | | | |



第3図 周辺の遺跡分布図

籠は、佐城が遠江守源基後に横領されそうになったため、大治3年に再び本家職を待賢門院御願寺円勝寺に寄進し、自らは領家職として保身を図ったのである。後の建久元年（1190）、駿河守護武田信義の子息板垣兼信が地頭として質臣莊に入るが、後白河法皇の反発によって兼信は更迭されたうえ、流罪となる。これ以降、地頭は補任されていない。円勝守護としての質臣莊は、文永年間（1264～75）まで継続していたようであるが、その後は定かではない。

中世 当地域の中世漁業は潤沢で、中世前期・戦国期の聚と、戦国期の山城が顕著である。

窯業生産は、前述のように平安時代後期から開始されているが、盛んになるのは中世前期の山茶碗生産以降である。現在金谷地区の山茶碗窯は5地点約50基が把握され、灰色味が強い東遠系の壺瓶を生産する。

12世紀前半の窯は、すやん沢ときつね沢、つばき沢で把握されている。このうちきつね沢とつばき沢は隣接する谷地形にあるが、すやん沢は南東に離れている。12世紀後半の窯はすやん沢ときつね沢にあるが、採集遺物からすると生産量はさほど多くないようである。最も生産が盛んになるのは13世紀前半から半ば過ぎの時期であり、すやん沢ときつね沢にはろん沢が加わる。最終段階に当たる13世紀末ではほろん沢に集約される。この時期の窯業生産には、当時の本家職である円勝寺が関わっていたのであろうか。

ついで、15世紀後半に川根沢窯と三ツ沢窯において、古瀬戸後期IV段階に近似した製品が生産される。これらの窯は単独窯であり、川根沢窯が三ツ沢窯よりも若干先行して生産を開始する。しかし、15世纪末には廃絶され、再び窯の火は絶える。この時期は今川氏親の遠江進攻とおおむね一致する。在地支配の今川軍下への転換が、窯業生産の終焉に関わっている可能性がある。

16世紀後半に至り、上志戸呂窯で大黒3段階後半に近似した製品が生産され始める。上志戸呂窯の工人には、天正16年（1588）に徳川家康から朱印状が与えられ、分国中の商売の役（税）が免除されていることが知られる（『県史』資料編8-1974）。大黒4段階では、島田市神座に所在する神座窯に生産が波及する。神座窯の工人は、中村一氏の家老横田村詮の書状から、焼物の上納義務が課せられていたことと共に、半工半農であったことが窺える（『県史』資料編9-1中村家26）。ついで連房期には、横岡一帯に生産が集約される。この流れが現在の志戸呂窯につながるものである。これら川根沢・三ツ沢・上志戸呂の3地点ではいずれも発掘調査が実施されている。特に本事業の一環で調査された上志戸呂窯は、平成元年に金谷町教育委員会が調査された分量と合わせると200箱以上に及ぶ潤沢な遺物が出土しており、当地域の窯業生産を理解するうえではまたとない資料を提供している。

戦国期の山城には、横岡に所在する横岡城跡（市指定史跡）と薬川に所在する諏訪原城跡（国指定史跡）がある。横岡城跡は河岸段丘上に築かれており、15世纪末、今川氏親によって築かれた鶴見氏の居城であったといわれる。外縁に堀と土塁を備えた約60m四方の矩形の区画が中心となり、周囲に小規模な腰曲輪を配置したもので、館としての様相が濃い構造をとる。現在は土塁の一部と井戸が残るほかは、茶畠の造成によって削平・埋め立てられている。諏訪原城跡は永禄12年（1569）に武田信玄が築いた金谷城が前身となり、天正元年（1573）、武田勝頼の命によって大改修を受けた城で、東遠江地区の徳川方に対する武田方の最終線のひとつに位置づけられる。東海道を見下ろす位置にあり、交通の要衝を押さえる意味を併せ持っている。急峻な崖を背後にもつ1郭を中心とし、平型な台地間に複数の曲輪とともに土塁、堀、馬出しを備えて、地形の不備を補っている。この城は天正3年、徳川家康によって攻略され、一時今川氏真が城主となっている。そして、家康の関東移封後に廃城になったといわれる。

近世以降 江戸幕府の開港後、金谷地区は各村落や時間ごとに幕府、豊後藩、田中藩、掛川藩、相良藩、三河国伊保藩、旗本などの領地があり組んでいる。比較的頻繁に見られるのが幕府領と掛川領の村落である。

金谷地区で特徴的な産業は、志戸呂焼である。近世からは連房式登窯での生産に転化し、明治12年（1879）には窯屋が60戸所在したと記録される。

第3節 確認調査

1 確認調査の対象地点

(1) 位置と現況

第二東名の路線は、金谷地区の中央を東西に横断する。金谷地区での路線は平野部で延長約3.5kmを測る。横岡新田付近には国道473号線（主要地方道金谷・中川根線）から接続するインターチェンジが計画されている。

まず、路線の位置を東から西へと説明する。大井川のはば中心線上となる金谷地区の西境を、島田地区から西に下る橋梁をもって横断し、平野部に入り約150mで牛尾山の東側に突き当たる。ここを握り割って西側の平野部にいたる。横岡新田付近のインターチェンジを介して上志戸呂付近の丘陵南向き斜面をカットし、大代川の形成した谷底平野である影島、中島付近を通す。ここからは栗ヶ岳を貫通する金谷トンネルに入る。丘陵のカットが生じる牛尾山、上志戸呂付近以外は、インターチェンジ部分が盛土、他の平野部分が橋梁となる。

路線内の丘陵地の現況は、多くが茶畠として利用される。土採りによって大きく改変されている丘陵は見当たらない。したがって、各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残されているとみられる。

一方、平野部・谷平野においては、道路や建築物・宅地によって開発されている部分もあるものの、水田や畑に利用されている部分の方が多い。



第4図 第二東名の路線と対象地点

(2) 対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および金谷町教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後においても、路線範囲の変更や側道等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡の所在の再確認等によって、対象地点の範囲の変更や新たな対象地点の追加も同様に行われた。最終的に、金谷地区では3ヶ所の対象地点が選定された。

3ヶ所の対象地点の内、2地点は既に局知されていた埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含ん

だ場所、その他1地点は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査は行う必要があるとされた場所である。

No91地点は、丘陵上に縄文時代～弥生時代の遺跡（駿河山遺跡）及び古墳群（駿河山古墳群）の存在が知られていた場所である。丘陵上はほぼ平坦であり、全面に遺跡が及ぶ可能性が高いことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。No92地点は、丘陵南側斜面の裾部に戦国時代の窯（上志戸呂窯跡）が存在する。工事によってカットされる範囲も類似した南向き斜面であったので、現況では把握できていない窯が存在する可能性も考えられ、より広い範囲を対象地点の範囲とした。また、No92地点と谷をひとつ隔てて西側のNo93地点は、これまで遺跡の存在が確認されていなかった箇所であるが、遺跡の立地に適した南向きの緩斜面であるのでより広い範囲を対象地点の範囲とした。

2 確認調査の方法と経過

確認調査は、いずれの地点でも対象範囲の一部を実際に掘り下げて遺跡の有無と範囲を把握した。詳細は各地点の報告書を参照いただきたい。以下の調査の方法についての記述は、対象とした3地点の共通する部分を主とする。

まず駐車場・作業員棟設置等の準備と並行して、対象地点の位置と範囲を確認した。ただし、No92・93地点は調査対象地内に駐車場・作業員棟がともに確保できなかつたので、別途近接地に確保した。その後、対象範囲内に調査区を設定した後、掘削を開始した。調査区は、対象地点が全て丘陵上であることから、トレンチを基本とし、把握の難しい場合はその局部を拡張した。また、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、調査区を対象範囲の全域にわたるように設定することに努めたが、急斜面部においては、作業の安全上を考慮してやむなく調査区の設定を避けた部分もある。調査区の掘削は、No92地点の多くは重機が入らない場所だったので、表土から人力で行った。

土層については、特に遺物や遺構を見出した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根柢や根柢・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまって出土した遺物など遺構の性格をあらわすものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままとした。以上のことによって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国士座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用い、必要に応じて、35mm判や6×7判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、No92地点では人力で行い、他は重機を用いた。一連の確認調査によっていずれの地点も本調査対応となったので、各地点の概要は各報告書にゆだねることとする。

第4節 本調査

1 本調査の方法と経過

ここでは、主に金谷地区の本調査全体に関わる事項について触れる。

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、No.91地点駿河山遺跡、No.92地点上志戸呂古窯、No.93地点上ノ山遺跡の3箇所である。

本調査の実施においては、調査範囲及び調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できること、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することとなった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。また、No.91地点（駿河山遺跡）では、調査対象範囲をさらに大きく4分割（A～D区）し、A区、D区、B区、C区の順で継続して調査を実施した。

調査の方法は、第1節の調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることとする。

第3表 調査実施期間

| 遺跡名 | 地点・期 | 面積 (m ²) | 平成10年度 | | | | 平成11年度 | | | | 平成12年度 | | | | 平成13年度 | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---------|-------------------------|--------|---|---|---|--------|----|----|---|--------|---|---|---|--------|---|---|---|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 駿河山遺跡 | 91(確認) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 91(本調査) | 27,000 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 上志戸呂古窯 | 92(確認) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 92(本調査) | 100 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 上ノ山遺跡 | 93(確認) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 93(本調査) | 3,929 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

2 本調査の概要

金谷地区の調査結果の概要は以下のとおりである。ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

縄文時代

縄文時代の遺構は、駿河山遺跡と上ノ山遺跡で検出されている。特に駿河山遺跡で検出された中期の集落は、丘陵西側の斜面を不用品の廃棄場所として利用していたとみえ、多量の土器、石器が包含層を形成していた。丘陵の中ほどからは竪穴住居跡と、おびただしい数の風倒木痕が、東側からは墓域と思われる配石遺構や翡翠製の大珠を埋納する土坑が検出されている。

弥生時代

弥生時代の遺構もやはり上ノ山遺跡と駿河山遺跡で検出されており、駿河山遺跡の資料が闇沢である。上ノ山遺跡では、丘陵の尾根を中心とした中期後半～後期の集落が検出されている。周辺の遺跡よりも先行する資料であり、駿河山遺跡の成立を考える上でもきわめて興味深い。

駿河山遺跡からは後期の竪穴住居跡が約200軒検出されており、空閑地を中心としてその外周に数棟を1グループとして配置する傾向が窺える。墓域は方形周溝墓で構成され、台地状平坦面のほぼ中央に造られる。この墓は、後続する古墳時代前期の溝に切られるため、相互の集団には何らかの断絶があるものと思われる。また、炉も床ももない長方形状の平面形状を持つ竪穴状遺構が検出されている。この遺構は、竪穴住居のグループよりもやや外側に外れた位置にあり、住居とは異なる機能を有するものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、駿河山遺跡で検出されている。前期初頭に当たるものであるが、西側に方形周溝墓群が、半ばから東より竪穴住居が配置され、これらの間は溝で区切られている。弥生時代後期の遺構からこの時期にいたる間にはさほど時期的な断絶は感じられないが、何らかの強い影響によって、土地の利用状況が一変したことが感じられる。中期以降の集落は検出されていないが、古墳時代末にあたる7世紀後半の遺物が上ノ山遺跡から得られている。

古代

古代の資料は上ノ山遺跡と駿河山遺跡から得られている。上ノ山遺跡では、出土量はさほど多くないものの、奈良時代の遺物が出土している。検出された掘立柱建物のうち、少なくとも2棟がこの時期にあたると思われる。また、平安時代後期（11世紀）にあたる藏骨器を取めた土坑も検出されている。駿河山遺跡でも、灰釉陶器の椀を複数枚埋納する小土坑が検出されている。平安時代では丘陵部が居住域としてではなく、墓域として利用されていたことを想定できる興味深い例である。

中世以降

いずれの遺跡からも、島田市横岡で生産されたと考えられる東遠系山茶椀類が出土している。きわめて小範囲にしか流通しないⅢ期-3の椀も駿河山遺跡から出土している。No.92地点の上位の斜面からも山茶椀類が出土しているが、当該期の窯の存在は把握できなかった。

No.92地点の下位の斜面からは、16世紀後半の上戸呂古窯が検出されている。この窯は以前から存在を把握されていたものであるが、少なくとも2基の窯で構成されることなど、新所見が得られている。

このように、各遺跡からは多くの新たな発見が得られている。特に、駿河山遺跡には集落の組成を把握できる資料が各時代にあり、今後の検討が期待される。



写真1 上戸呂古窯跡の調査



写真2 駿河山遺跡の調査

第5節 資料整理

1 資料整理の体制

本事業では、第1節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は統続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要となってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

金谷地区の資料整理は、平成13年度上半期末時点での現地調査が全て終了できたことから、平成14年度から部分的に開始した。現在(平成18年3月時点)、金谷地区的資料整理は中原整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製造物のクリーニングおよび保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

金谷地区的資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに因る資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第4表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第4表 資料整理の体制(平成17年度まで)

| | 平成13年度 | 平成14年度 | 平成15年度 | 平成16年度 | 平成17年度 |
|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 所長 | 齋藤 忠 |
| 副所長 | 山下 光 | 飯田 英人 | 飯田 英夫 | 飯田 英次 | |
| 官務理事兼総務部長 | 桑田 徳幸 | 桑田 徳幸 | 桑田 徳幸 | 平松 公夫 | 平松 公夫 |
| 次長 | | | 鶴田 英巳 | 鶴田 英巳 | 鈴木 大二郎 |
| 総務課長 | 本杉 昭一 | 本杉 昭一 | 鶴田 英巳 | 鶴田 英巳 | 鈴木 大二郎 |
| 総務担当員 | 福葉 保幸 |
| 総務係長 | | | | | |
| 会計係長 | | | | | |
| 施主任せ | 鈴木 秀吉 | | | 中鉢 京子 | |
| 主任事務員 | | 鈴木 秋博 | 鈴木 秋博 | | |
| 事務員 | | | | | 調所 山美 |
| 部長 | 佐藤 道雄 | 山本 畏平 | 山本 畏平 | 山本 畏平 | 石川 審久 |
| 次長 | 栗野 克己 |
| 担当課長 | 及川 司 | 中嶋 邦夫 | 中嶋 邦夫 | 中嶋 邦夫 | 中嶋 邦夫 |
| 工区主任 | 加藤 利文 | | | | |
| 主任調査研究員 | | | | | 河合 修 |
| 調査研究員 | 河合 修 | 川上 勲 | 川上 努 | 川上 努 | 鈴木 淑子 |

2 資料整理の方法と経過

例言2にも示したが、現地調査・資料整理事務とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくこととなった。また各地区的最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することとなった。

以上により、島田市域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本巻を「島田市－1」として、総論と上ノ山遺跡の報告を掲載し、隸ぐ「島田市－2」以降の報告書に島田市西部の総論と残る遺跡（駿河山遺跡、上志戸呂遺跡、上伊太遺跡）の調査報告を掲載することとした。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために金谷地区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関する資料整理の方法と経過は各遺跡の報告书中に記すこととする。

上ノ山遺跡の資料整理および報告書作成作業については次章第2節に記している。本章（総論）に関しては、調査日報等の調査資料（書類）の整理、挿図表の作成、報告の執筆・編集といった資料整理事務および報告書作成作業を、平成14年度以降に断続的に実施した。

第2章 上ノ山遺跡

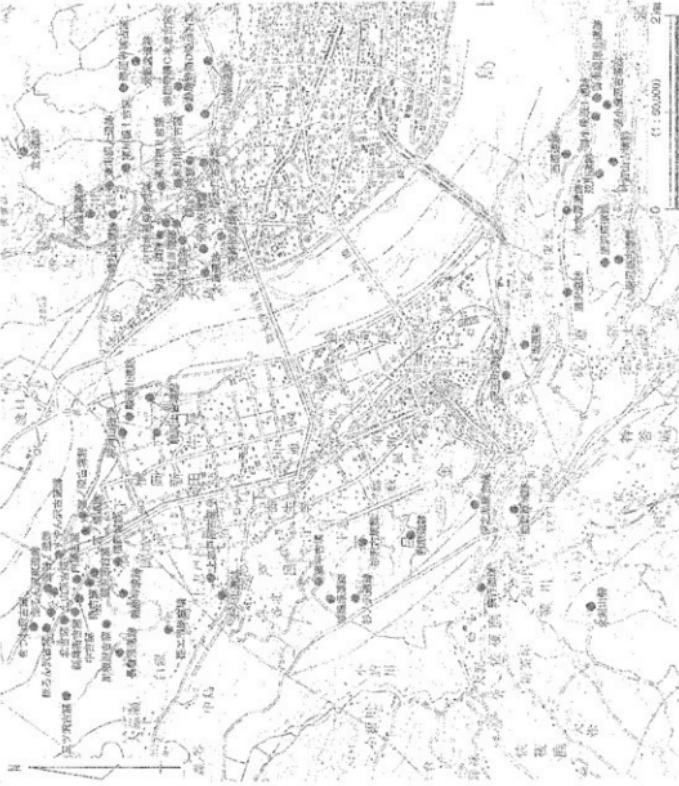
第二東名No.93地点

第1節 位置と環境

1 位置と地理的環境

ヒノ山遺跡は、静岡県島田市（旧金谷町）志戸呂の、標高107～116m程度の南～東東向き丘陵緩斜面に位置する。この丘陵は、赤石山脈南端からびた尾根中央部の大井川による河岸段丘を主軸に大井川による河岸段丘を形成している。金谷地塊に分かれる丘陵は、北部の四万十台地、中ほどの大井戸川層群、南部の金谷層群を基盤とする。遺跡の立地は砂岩と頁岩を主とした互層からなる瀬戸戸川層群にある。これは金谷付近から瀬戸川、葉利川、安倍川の上流を経て山梨県の早川流域に至る帶状の分布を示している。

丘陵南側斜面には大代川が流れてしまり、東側は駿河ノ沢とよばれる沢が流下する。いずれに面する斜面も、浸食により切り立っている。したがって、遺跡のある丘陵は常に向かって舌状に形成した形を呈する。この丘陵上は、眺望も日々よりも大変良く、遺跡の眼下には大代川が形成した谷底平野が広がる。遺跡の最も低い地点と平見面との比高差は20mほどである。



第5図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

2 歴史的環境と調査歴

上ノ山遺跡は、第二東名事業に伴って記録された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査履歴は皆無である。濃姫の南側直下に広がる大代川の堆積による谷底平野には、上ノ山遺跡と同時期の耕作域が広がっていた可能性も否定できないが、埋蔵文化財保護地として周知化されていないため、深求が及んでいない。

遺跡より東側に轟ノ沢によって隔てられた丘陵末端には、上志戸呂古窯が所在する。上志戸呂古窯は平成元年に灰原が茶窯の改修等で、平成12年に窯体が第二東名建設事業で発掘調査されている。これらの調査で窯体2基と灰原の広がりが確認され、200箇を越える遺物が出土している。窯はいずれも南向きに焚口を開えるもので、焚口側から向かって右側（東側）を1号窯、左側（西側）を2号窯とし、約3mの間隔でほぼ平行して並かれている。灰原は主に窯の東側で発達している。

上ノ山遺跡と上志戸呂古窯が築かれた丘陵を北側に登ると、標高281m付近で尾根の頂部に達する。ここは長者原と呼ばれる、長さ1km、幅500m程度の比較的平坦な台地状の地形を呈している。南端に古墳時代後期の孫工門原古墳が築かれ、半ばには縄文時代の長者原遺跡が営まれている。調査がなされていないため、両者とも内容は判然としない。



第6図 本調査範囲と周辺の地形

第2節 調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

本調査に先立って平成11年1月5日から1月末日までに、調査対象範囲のほぼ中央にある農道を基準に東側、西側に調査区を分け、15本のトレンチを設定し確認調査を実施した。等高線に直交する南北方向と平行する東西方向に、幅1mのトレンチを重複により掘削した。重機による表土及び耕作土の掘削後、人力によりトレンチ内の精査を行った。その結果、調査対象面積の東側半分で弥生土器を中心に土器、石器等の遺物と竪穴住居跡と思われる遺構が確認された。西側半分は茶園開墾時に天地返しが行われており、遺構の確認はできなかった。したがって、本調査は調査対象地東側部分で実施することとした。本調査の対象は、標高116～107mの南に面する緩斜面上の、3,929m²の地域となった。なお、調査の記録は、掘削作業と併行して実測と写真撮影を行った。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、上層断面図を図化した。写真撮影は35mm判のカラーネガを使用した。

本調査においては、重機を用いて耕作土等を除去した後、開土座標に乗った10mメッシュのグリッドを設定した。グリッド杭は業者委託により、グリッド間隔と同様に打設した。グリッド番号は、東西方向に西からA～Fとし、A列～E列の追加調査部分をZ列とした。南北方向は南から1～9とした。

遺構の掘削はすべて人力によって実施し、排土は場内に仮置きした。遺構番号は調査の進展に合わせて、調査区の際頂部乙8グリッドから最下部F2グリッドに向かい順次付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。また、本来ひとつの遺構を構成する掘立柱建物などは、柱穴個々の遺構番号と別に、アルファベットと数字によって構成される記号（SH1など）を別に冠している。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10～20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。

測量はトータルステーションを使用し、遺構全体図は空中写真測量を行った。写真撮影は6×7判のモノクロと35mm判のカラーネガ、モノクロ、カラーリバーサルを使用し、全景写真は空中写真撮影を委託により実施した。

2 発掘調査の経過

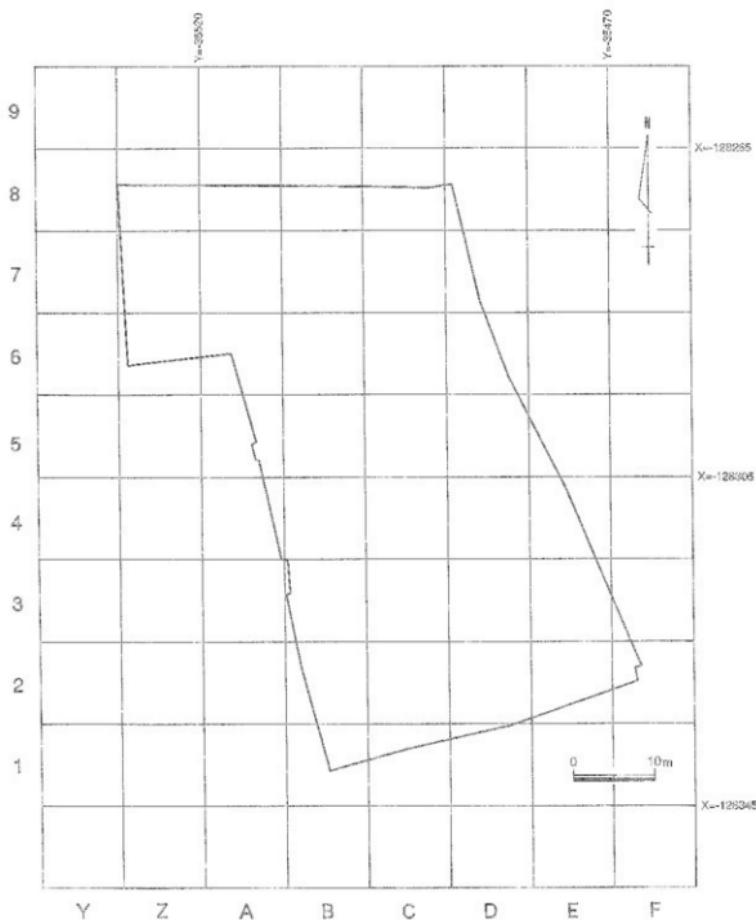
本調査は、平成11年4月12日から23日まで重機による表土除去を行うことから開始した。26日から人力により、調査区西側のグリッドA、B列を北側から中間層の除去及び遺物包含層の掘削を開始した。グリッドB列には埋没谷があり、埋土に打釘石斧等縄文時代の石器が多く含まれたため、他に先行して掘削を実施したが繰り上げに時間を要し、終了したのは7月初旬であった。4月には本調査と並行して工事用道路部分の確認調査を実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。

検出面以上の層位を除いたグリッドA・B列では、6月下旬より遺構検出を開始し、プランを確定した竪穴住居跡から漸次遺構掘削を実施した。8月後半には竪穴住居跡の掘削と並行してピット、土坑等の掘削も行い、8月末までに遺構掘削をほぼ終了した。9月に入り、写真測量のため調査区内外の全体清掃を開始し、9月半ばに写真測量の撮影を行った。

一番茶の刈り取り後から茶木の伐採に着手したZ列はグリッドA6、7、8の西側部分に当たり、6月から重機による表土除去を開始した。次いで人力による遺物包含層の掘削を行った。ここは、調査区

内の最上位に突出した部分があるので、他の区画より先行して遺構検出、遺構掘削を行い、7月のはじめに調査を終了した。

すべての遺構の調査が終了した後、検出面より下層の遺術を確認するために試掘坑を5箇所設定して掘削した。しかし、いずれからも遺構、遺物が確認されなかったため下層に遺跡は存在しないものと理解し、9月末をもって全ての調査を終了した。



第7図 グリッド配置図

3 資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、上ノ山遺跡の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点で静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区と一部の遺跡を除いた静岡工区とともに金谷地区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、上ノ山遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図、遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は6×7判のモノクロ及びカラーボジ用いた。



写真3 遺物接合・復元作業



写真4 遺物実測作業



写真5 版下作成作業



写真6 原稿執筆作業

第3節 調査の成果

1 概要

(1) 地形

上ノ山遺跡が営まれている丘陵は幅50～60mの、南～南東へ12%前後で下る日当たりに恵まれた緩斜面である。調査区西よりで検出された埋没谷は、ほぼ埋まっていたために現地表上からは明確に把握できないものであった。この埋土は、黒ボクに下位の層位が混入して形成されたもので、丘陵上位からの流出土が再堆積しているものと思われる。この中には縄文時代に遡る石器が多く、それ以降の遺物が少ない傾向から、縄文時代末～弥生時代中期初頭までにはほぼ埋まり尽し、弥生集落が形成された時分には、穏やかなくぼみになっていたものと思われる。このような埋没谷は、東側に約1.5km隔たった駿河山遺跡でも観察されたため、あるいは周辺の丘陵部に恒常的に見られる現象であるのかもしれない。

丘陵の東側にある谷地形は、殿ノ沢の開析によるものである。このような沢による谷地形は山塊のいたところに観察できる。これらから流出した土砂が、丘陵南側の大代川が流れる谷底平野を埋め立てる一助となっている。

(2) 土層

遺跡は南ないし南東側に傾斜した地形である。丘陵の上位に堆積した土壤は、風雨によって下位へ流出するため、下位に行くに従って厚くなる傾向がある。この作用は、上位には薄いながらも黒ボクが遺存し、下位には黒ボクが見られない替わりに、より下位に堆積する黄色、あるいは褐色味の強い土と黒ボクが混じり合った暗褐色の土が堆積することにも反映している。つまり、この丘陵上にみられる堆積土は、比較的元位置を保つ混じりけのない更新世の堆積物と考えられる疊層（VI層）、黄色土（V層）と完新世の黒ボク（II層）と、これらが流出し混じって再堆積した土層の3種から構成されるのである。今回の調査区では、これらの土層の中でも普遍的に見られるものを上位からI～VI層とした。

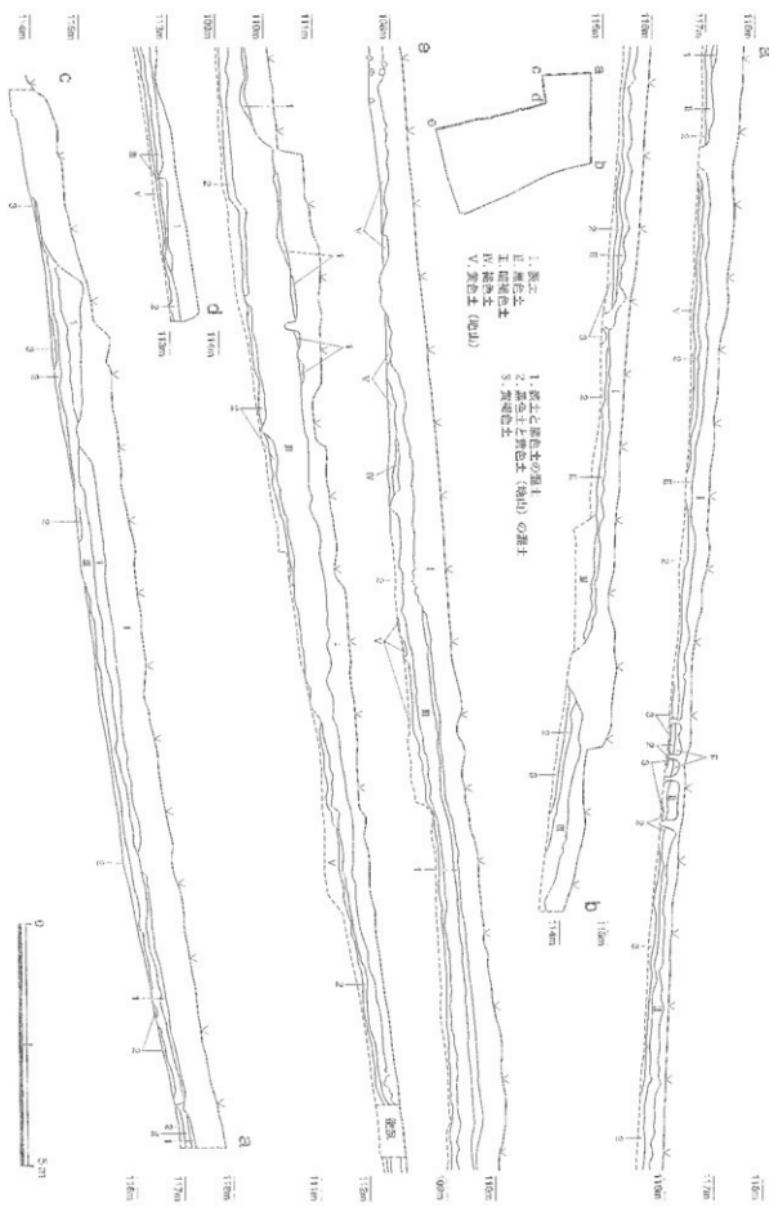
I層：黒ボクに有機質が混入した厚さ50cmほどの黒褐色土である。黒ボク上位を茶畑として耕作したことが成因である。

II層：黒ボクと呼ばれる、粘性の強い粒子の細かい黒色土である。遺物包含層や遺構の覆土となる。

III層：褐色の風化礫が混じった粘性の弱い暗褐色土であり、II層とV層、VI層との再堆積層と考えられる。調査区西側の埋没谷を中心とし、尾根上に近づくにしたがって薄くなる。近似した土を覆土とする遺構は、埋没谷の頂部にあたるZ8～B6グリッド付近と調査区中ほどD4～5グリッド付近に比較的まとまってみられる。

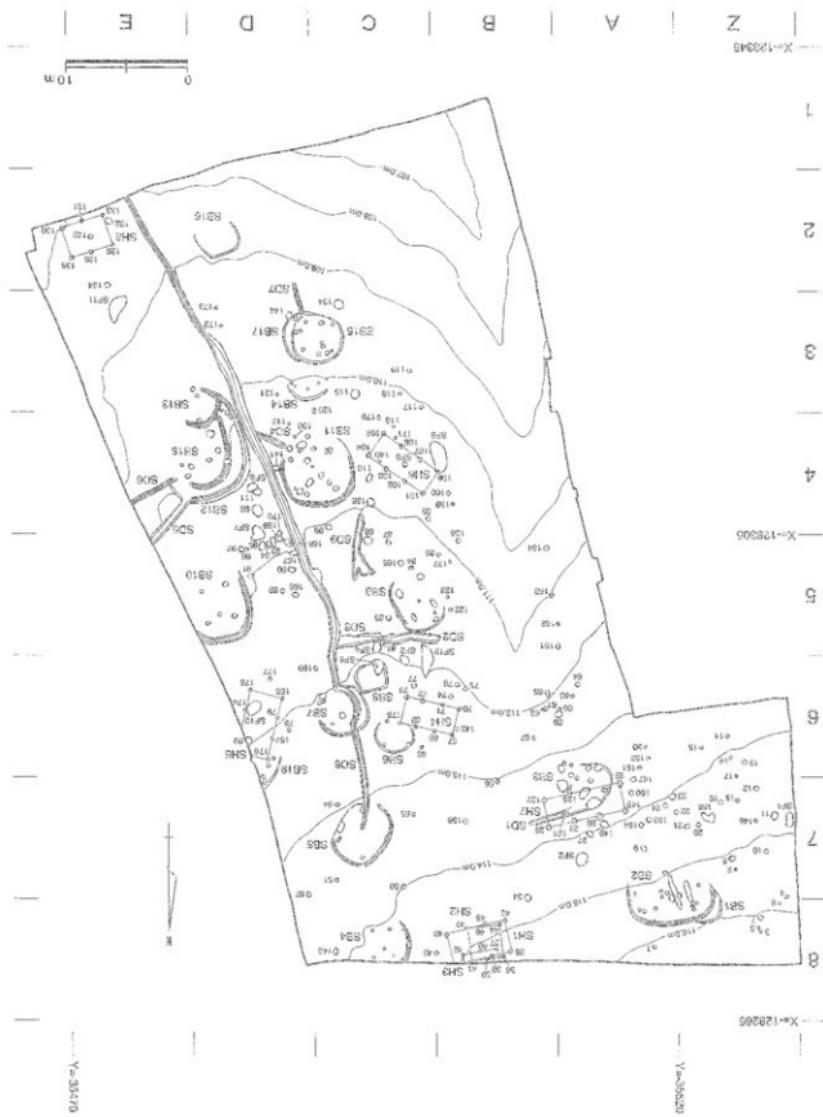
IV層：やや粘性のある、礫が混じる褐色土である。この土層の下位はやや粘性が強く、白色味を帯びた黄褐色となる。その差は漸移的であり明確に区別できなかったため、同一層位として理解した。近似した土を覆土とする遺構は尾根上のC5グリッドからE3～C4グリッド付近で比較的広汎に分布する。

V層：白っぽい風化礫が混ざった黄色粘土で、無遺物層である。疊層（VI層）に漸移的に移行する。これらの層は、丘陵の基盤上位に当たる地山である。



第3図 調査区土壤断面図

圖6 圖



(3) 遺構、遺物の概要

遺構は、縄文時代中期の土坑・小穴、弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡・土坑・溝状遺構、小穴、古代～中世前期の掘立柱建物が検出された。

縄文時代の遺構で特筆されるのは中期後半の埋窓である。褐色土を覆土とする土坑内に、深鉢が逆位で埋め込まれるものである。周囲には近似した覆土の土坑、小穴が散在する。また、C・D 3グリッドで検出された円形の掘方を持つ竪穴住居跡2軒も覆土が類似するため同時期の可能性がある。

弥生時代の遺構の代表となるのは竪穴住居跡であり、17軒が検出されている。平面形状は円形、楕円形、圓丸方形の3種類に分類される。調査範囲は傾斜地で堆積土も薄いため、多くは茶園の開墾時に斜面の下位に当たる南側の肩が削られてしまっている。貼床は部分的に残存していたS B 2以外からは検出されていない。他の住居跡は崩方とその覆土が確認できたのみであった。出土した土器から年代を検討したが、短期間で住居の形状が変化しているようである。覆土が周辺に堆積する土層を反映していると考え、①褐色土が覆土となる住居、②褐色土と黒色土が混ざって覆土となる住居、③下層が暗褐色土、上層が黒色土の住居、④黒色土が覆土となる住居の順につくられたと想定した。ただし、②と③の新旧関係は判然としない。またこのうち4軒には、南ないし南東方向に延びる溝が取り付いている。その形状から排水あるいは住居間の区画の機能を持った溝ではないかと考えられる。

また、調査区西寄りには堀溝が確認された。弥生時代にはある程度埋没してくぼみとなっていたと思われる。検出された住居跡はこのくぼみを避けてつくられている。茶園の開墾で天地返しされていて遺構が確認されなかった西側部分にも同様な竪穴住居跡が存在した可能性がある。

掘立柱建物跡は8軒分が確認された。2間×1間ないし3間×1間の衝柱建物であり、概ね等高線に平行していることからも、地形の制約を生かして建てられていることがわかる。上屋の構造は、柱穴の大きさを考慮しても比較的簡易なものであったと思われる。住居跡からは時期を示唆する遺物は出土していないが、周辺の包含層から須恵器や灰釉陶器、山茶碗類が多く出土していることからも(第44図)、古代～中世前期にあたる建物と考えられる。また、A 7グリッドから検出された小土坑S F 181からは、藏骨器と考えられる輪をかぶせた灰釉陶器の壺が出土している。

2 遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、土坑、小穴などが検出されている。これらのうち、遺物を伴うものは深鉢を埋納する土坑S F 9のみであるが、これに近接する位置にある近似した遺土で、他の住居と異質の円形のプランをもつ竪穴住居跡と小穴を同時期の所産と考えた。

① 竪穴住居跡

S B 14 (第10図)

C 3、D 3グリッドで検出された、S F 9と類似した褐色土を覆土とする竪穴住居跡である。柱穴を崩成するP 1・6・5の釣合いから、ほぼ南北のN-6°-Wの方向が主軸になると考えられる。府側が耕作によって削られているため平面形態は全域にわたって把握できなかつたが、残存する掘方の形状から直径3.5m前後の円形であったと推測される。住居に伴う柱穴は6基確認され、P 1・3・5が主柱穴と判断される。炉跡は検出されなかつた。なお、遺物は出土していない。

圖11圖 土坑S E 9號陶出土地點及出土遺物

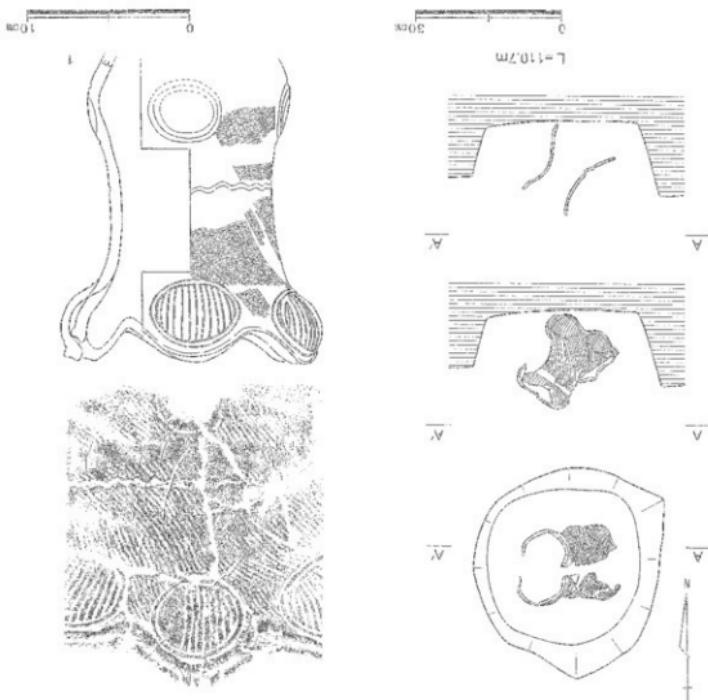
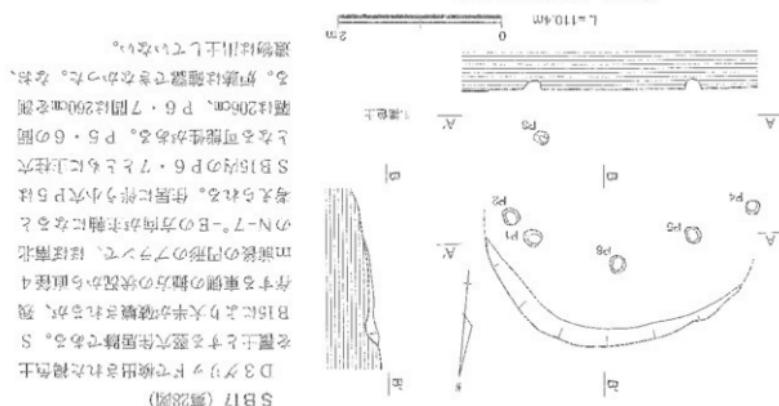
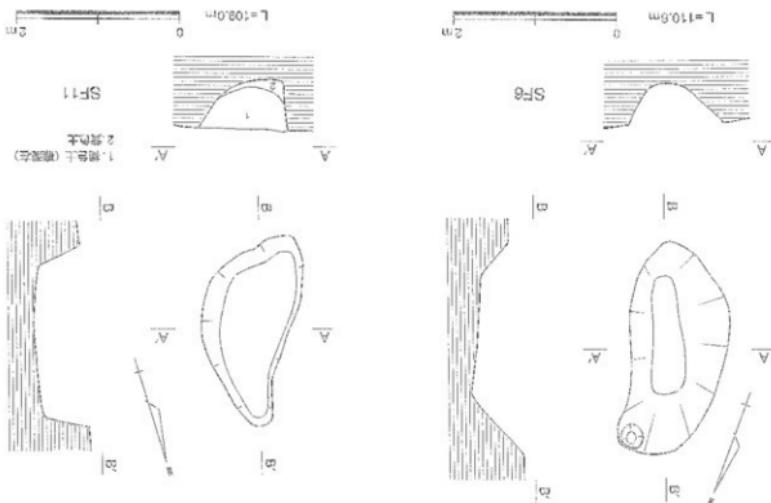
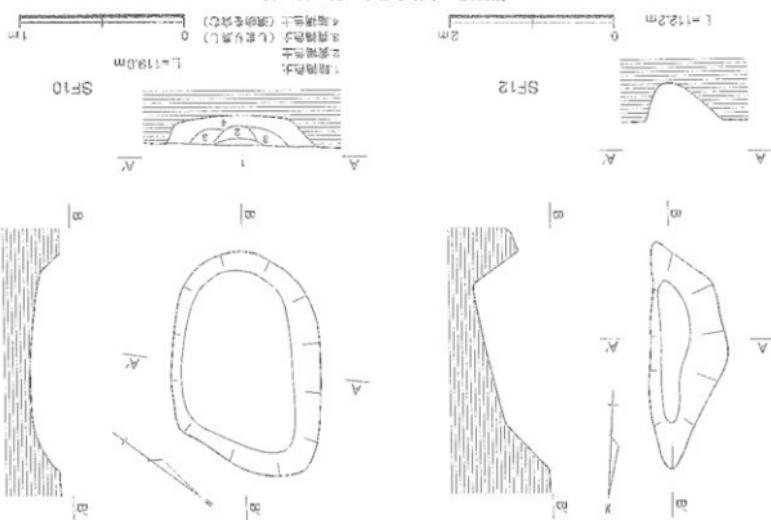


圖10圖 豐大堆墓S B14



S B17 (圖28圖)

第12圖 土坑S.F6・10・11・12



② 土坑

S F 9 (第11図)

C 4グリッドで検出された褐色土を覆土とする土坑である。規模は直径40cmの円形で、深さは17cmを測る。底面は平坦で、縄文中期後半の波状口縁をもつ深鉢が、逆位のやや傾いた状態で埋め込まれていた。

この深鉢（第11図-1）はほぼ完形である。底部は欠損しているが周囲から破片が出土しなかつたことからも、埋め込まれる時点で意図的に欠かれていたものと思われる。口径は15.5cm、残存高18.6cmを測り、胎土に長石、石英、砂粒、橙色粒子を含むが灰褐色に便く焼きあがっている。外面全体にR L縄文が施される。口縁は六単位の波頭部を持ち、その下に竹管を用いた縦位の沈縫を入れた3対の橈円区画文が施される。区画文のうち、一対のみ2/3ほどしか沈縫が施されていない。区画文の内面は内湾している。胴部は緩やかにくびれ、竹管による波状文が一周している。その下には二重円状の文様が4ヵ所に施されている。内面は摩滅していて明確ではないが、磨き調整で仕上げられていると思われる。

S F 6・11・12 (第12図)

検出された場所はやや離れているが、いずれも覆土や形状等に類似点がある。覆土は褐色土で、2~3mmほどの黄褐色の風化礫が混ざる。平面形は半月状をしており、底面が直線状の刃に寄っているため、この部分の立ち上がりが垂直に近くなる。規模はS F 6が長さ260cm、幅125cm、深さ51cm、S F 11が長さ215cm、幅125cm、深さ61cm、S F 12が長さ277cm、幅95cm、深さ50cmを測る。S F 11から石器細片が出土しているほかは、遺物は出土していない。これらの遺構は、風倒木痕の可能性がある。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、埋没谷を避けるように調査区全域に広がっている。特に尾張の頂部を中心に竪穴住居跡が配置されている状況が特徴的である。遺物の中には中期後半にさかのぼるもののがみられ、駿河山遺跡等、周辺の弥生時代遺跡のなかでも比較的古手にあたる遺物群に位置づけられる。なお、各遺構から出土した遺物は、当該期の土器と主要な石器はなるべく遺構図とともに掲載し、大型の石器（砥石、台石等）はまとめて掲載した。混入品と思われる遺物については包含層出土の遺物とともに掲載している。

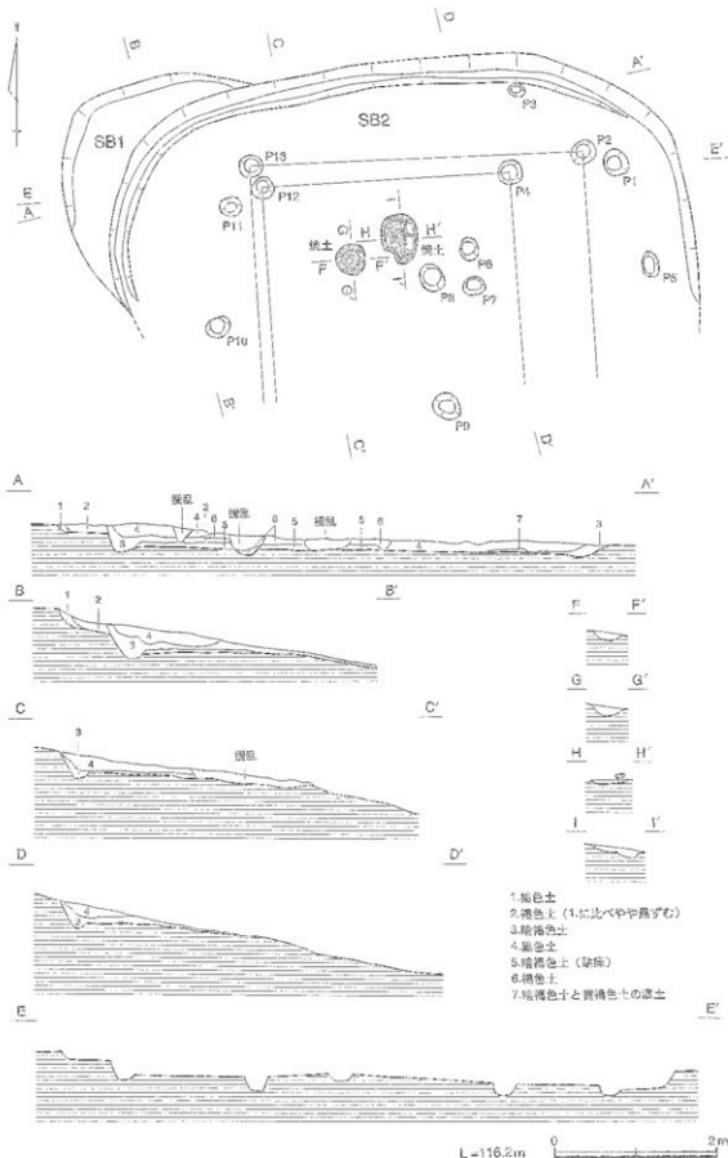
① 竪穴住居跡

S B 1 (第13・14図)

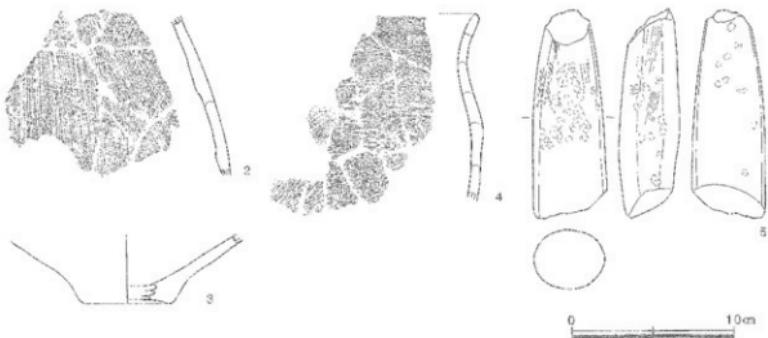
調査区北西隅であるZ 7・8グリッドで検出された中期後半にあたる小型の竪穴住居跡である。東側から南側にかけてS B 2が重複する。S B 2の掘方がS B 1より深いために、掘方のおよそ半分しか残存していない。北側から西側にかけての掘方の状況から、直角3m前後の四隅がやや強めの円形のプランで、ほぼ南北のN-11°-Wの方向が主軸になると考えられる。床面、炉などの住居内の施設は検出されていない。

遺物は掘方覆土である褐色土から土器が出土している。

2は中期後半に当たる壺の肩部片である。胎土は緻密で径1mm程度の砂粒・小豆色粒子を含み、にぶい黄色を呈しよく焼きあがっている。体部外表面は縦方向にハケ調整されているが、ハケメが格子状に残る部分からも、複数方向から調整が施されていることがわかる。内面は摩擦が激しく調整は不明である。



第13図 整穴住居跡 S B 1・2



第14図 穴住居跡SB 1・2出土遺物

SB 2 (第13・14・47・53図)

調査区北西のE7・8、A7・8グリッドで検出された、中期後半にあたる大型の竪穴住居跡である。兩側半分が耕作等の削平により失われている上、近年の農道建設に伴う平行する溝に切られている。覆土は下位が暗褐色土、上位が無色土である。平面形は彌丸長方形で、縁が現存で3.12m、幅7.14mの規模を測る。主軸方向はN-5°-Wを指向する。

住居内の施設は壁構造、床構造、炉が確認された。壁構造は西側から北東側にかけて検出され、幅、深さとともに30cm程度を測る。床構造は北西の一部に厚さ5cm程度が残存していた。炉は中央やや北よりの位置に、2ヵ所検出されている。そのうち北東側の焼土の上には、面が平らな長方形の石が乗せられていた。この石は横方向に溝状のくぼみが切れ、二つに割れている。焼土の上にあるにもかかわらず被熱の痕跡がないことから、火を消した後に、炉の機能とは直接関連がない目的で置かれた配石と判断した。住居のプラン内からは13基に及ぶ小穴が検出された。主柱穴の組み合わせにはP4とP11、P2とP13が想定される。西よりの炉に伴う主柱穴P4とP11が当初建築された住居のものであり、後に西側と北側のプランの一帯を利用しながら東側に拡張した住居に、配石を伴う炉と主柱穴P2とP13が伴うものと考えられる。

遺物は床面上の覆土から出土している。

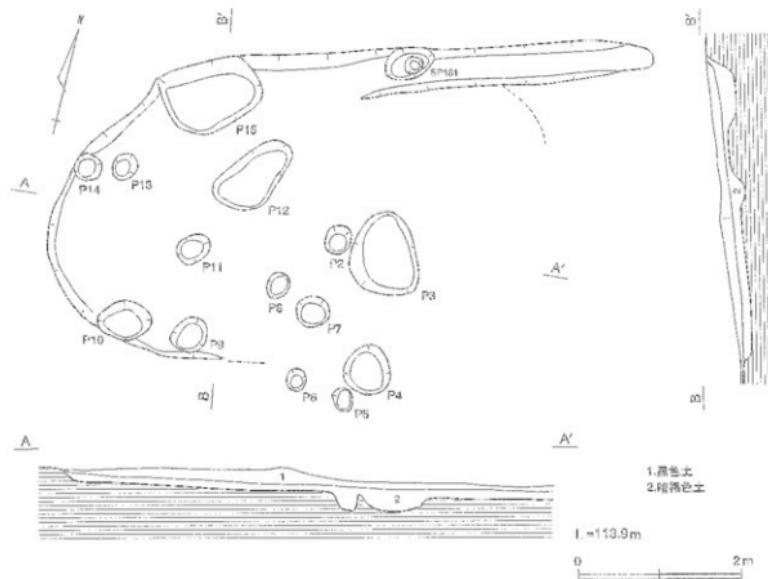
3は黒色土から出土した中期後半の壺底部片である。底径5.4cm、残存高4.2cmを測る。壺土には径0.5~1mmの褐色粒子、径1~2mmの砂粒を多く含み、灰色を呈しよく焼きあがっている。表面が剥離しているため、調査技法は判然としない。

4は床面直上の覆土から出土した中期後半の壺である。口径13.7cm、残存高11.5cm、底部最大径14.2cmを測る。壺土は緻密で褐色粒子を多く含み、灰黄褐色を呈しよく焼きあがっている。くの字状の口縁をもち、体部内外面はミガキ状のナデ調質で仕上げられている。

5は断面が梢円形形状を呈する砂岩製の乳棒状石斧で、被熱している。基部、刃部とともに欠損しており、残存部分は長さ12.78cm、幅4.59cm、厚さ3.62cmを測る。

131は泥岩製の打製石器である。ほぼ完形であるが、縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

194は細粒砂岩製の打製石斧である。基部が折れて欠損している。先端部は原礫面を多く残し使用痕とみられる無数の擦痕が付く。131とともに縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。



第15図 窑穴住居跡 S-B3

S-B3 (第15・52図)

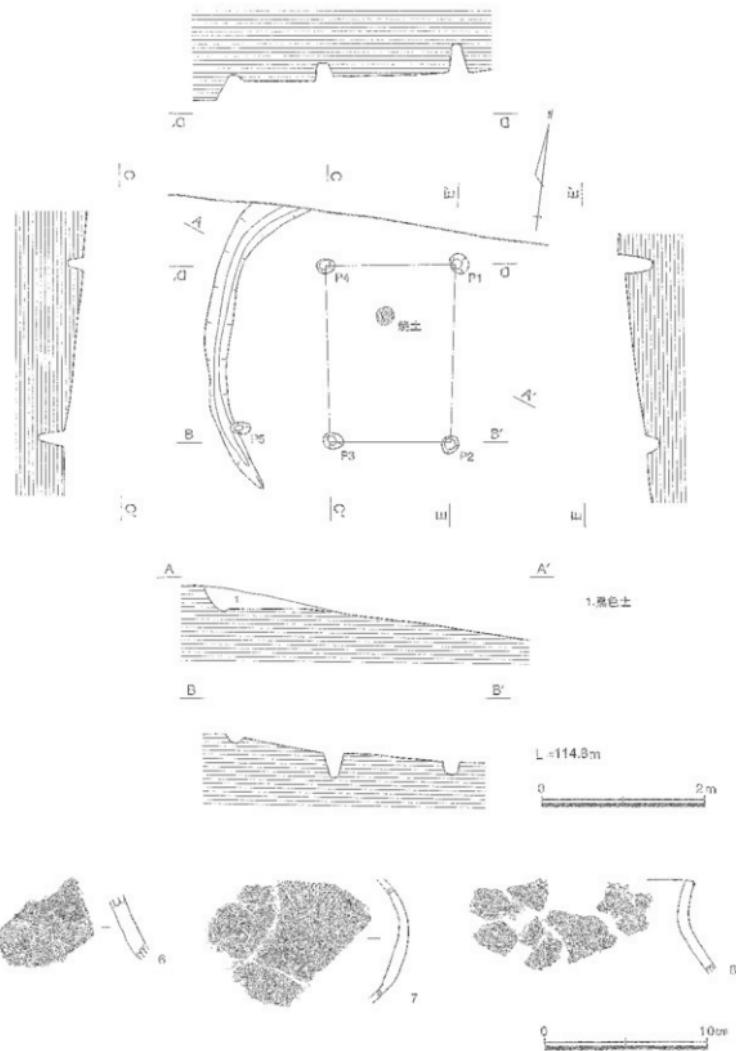
A 6・7グリッドで検出された窯穴住居である。後世の耕作等によって南東側から東側の掘方が失われているが、平面形はN-26°-Wに主軸方向をもつ楕円形を呈していたものと思われる。規模は南北方向に3.75m、東西方向に現存で2.96mを測る。覆土は上位が黒色土、下位が暗褐色土となり、内部から床面、炉等の施設は検出されなかった。したがって、残存していた部分は、床面下の掘方理土であると判断される。北東側の壁沿いには、住居外のN-72°-E方向に延びるS-D1が取り付いている。住居の掘方内に存在したと思われる小穴が8基検出されたが、主柱穴は判然としない。

遺物は覆土から弥生土器片、打製石斧、黒耀石剥片等が出土しているが、弥生土器片、黒耀石剥片はいずれも細片で同化できない。

188は頁岩製の打製石斧である。完形で先端部は原礫面を多く残し使用痕とみられる無数の擦痕が付く。また、基部にも使用痕とみられる擦痕が観察できる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

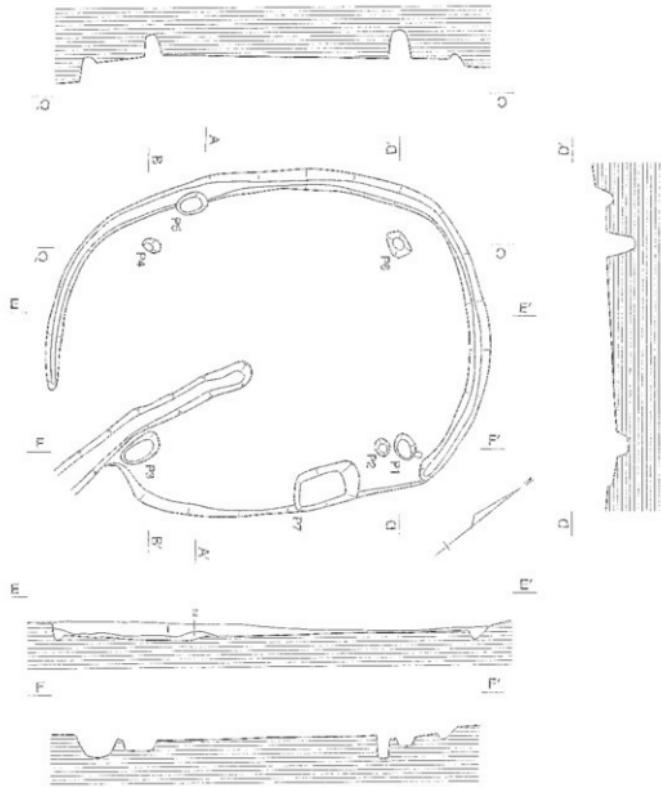
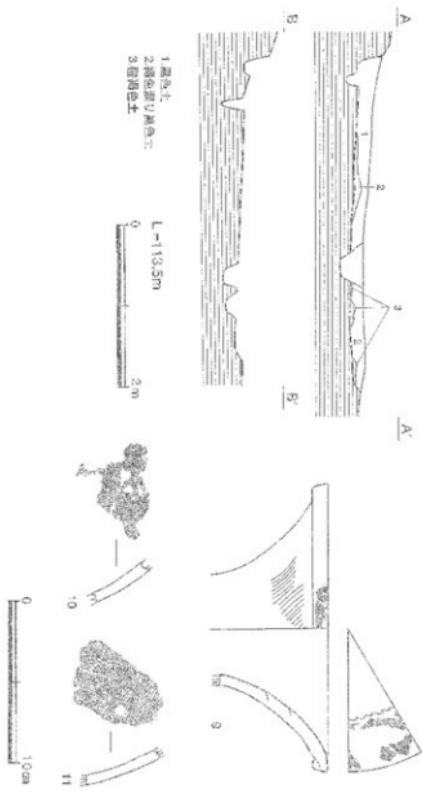
S-B4 (第16・33図)

C 8グリッドで検出された、後期の圓丸方形を呈する窯穴住居である。覆土は黒色土である。調査区外に当たる北側は未検出であり、他の部分も耕作等で掘方肩部がまったく失われているが、西側の壁構が残存していたため形状を把握することができた。柱穴の位置から、主軸はN-5°-Wを指向するものと思われる。住居内の施設は堀溝、炉が検出されている。堀溝は幅20~40cm、深さ30cm前後を測る。炉は、中軸線上の北側よりに造られている。主柱穴はP 1~4であり、柱穴の間隔はP 1・2間が220cm、P 3・



第16図 聖穴住居跡S-B4及び出土遺物

第17圖 突穴住居跡SB5及び出土遺物



4間が208cm、P 1・4間は162cm、P 2・3間は144cmと、両面の間隔がやや狭まっている。明確な胎床は検出されなかったが、住居内壁方向に壁溝が立ち上がらないことからも、埴方底面を直接床面としていた可能性が高い。

遺物は覆土である黒色土から、中期後半の土器、石製品が出土している。

6は中期後半の壺肩部である。胎土は緻密で径1mm以下の黒色粒子・長石・黒盤母を多く含んでいる。にぶい黄褐色を呈し、よく焼きあがっている。体部外面は上位をナデ調整、下位をハケ調整し、その接点に7条一対の櫛状工具を用いた波状文が施される。文様の交点には円形浮文が貼付された痕跡があるが、剥離している。内面には指頭痕が認められる。

7は中期後半の壺全体である。残存高6.9cm、調部最大径17.2cmを測る。胎土は密で径0.2mm以下の小礫、0.1mm以下の長石を多く含んでいる。灰黄色を呈し、よく焼きあがっている。外面には炭化物が付着している。外面は上位に上から下に向けて縦位にハケメが認められ、下位は摩滅のため明確ではないが、無文でミガキを施していると思われる。内面も摩滅のため調整は判然としないが、擦痕痕が認められる。

8は中期後半の壺口縁部である。残存高は5.7cm、胎土は緻密で0.1mm以下の長石、1mm以下の橙色粒子を多く含んでいる。にぶい黄褐色を呈し、よく焼きあがっている。口唇部は面取りされたうえ、ヘラ状工具による刻みが施される。外面は下から上に向けて縦位のハケメが認められ、内面にも横位のハケメが施されている。

53は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。被熱し、主面部に摩耗痕が認められる。

S B 5 (第17・32図)

C 7グリッドで検出された、後期の楕円形を呈する竪穴住居である。覆土は黒色土である。ほぼ全体が残存し、縦5.44m、横4.2m、床面積は22.948m²を測り、主軸はN-39°-Eを指向する。西側から南側部分以外は、幅15~30cm、深さ20cmの壁溝が走っている。住居の鐘方内からは、小穴が7基検出されたが、このうちのP 1・3・4・6が主柱穴に当たると考えられる。柱穴間の間隔は、P 1・3間が324cm、P 6・4間が304cm、P 1・6間が246cm、P 3・4間が244cmを測り、東辺がやや広く取られている。また、明確な炉跡、胎床は検出されなかった。住居内壁方向に壁溝が立ち上がらないことからも、埴方底面を直接床面としていた可能性が高い。なお、中央部から南側にかけて掘られる溝S D 8は中世の所産である。

遺物は覆土である黒色土から土器、石製品が出土している。

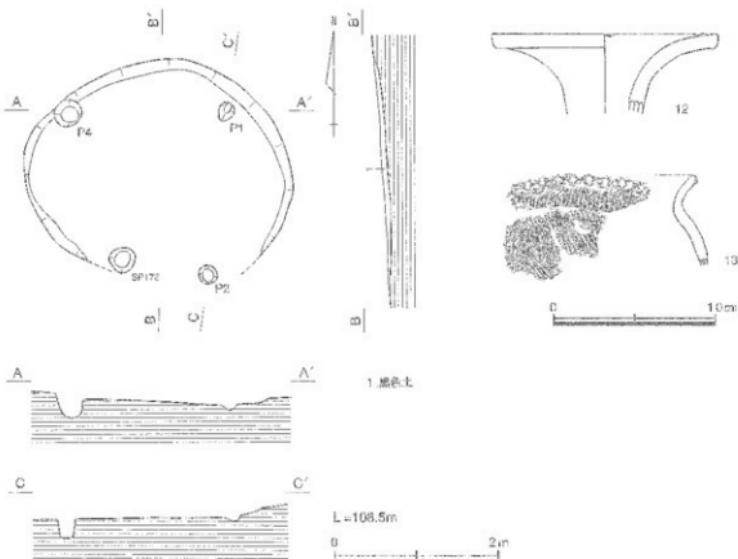
9は後期の壺肩部へ口縁部である。口径17.8cm、残存高7.1cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒、径0.1mm以下の橙色粒子を多く含んでいる。明黄橙色を呈し、よく焼きあがっている。外面は縦のハケ調整を施し、折り返し口縁の面取りされた口唇部にはR L繩文が施される。口縁部内面も端部に近いほうから、R Lの羽状繩文、L Rの羽状繩文、結節繩文が認められる。内面は摩滅が激しいが、ナデが施されていたと思われる。10、11と同一個体の可能性が高い。

10、11は後期の壺肩部である。胎土、焼成とともに9に類似する。外面はR Lの羽状繩文、L Rの羽状繩文が施され、円形浮文の剥離の跡かと思われる円形の痕跡が認められる。内面は摩滅が激しく陶片は不明である。

50は砂岩製の礫石である。主面部に鉈面が認められる。

S B 6 (第18図)

C 6グリッドで検出された、後期の円形で小型の竪穴住居である。覆土は黒色土である。南側の一部が耕作等によって削られ、不明確になっている。規模は縦3.3m、横は現存2.47mを測り、主軸はほぼ南



第18図 積穴住居跡S B 6及び出土遺物

北のN-6°-Eを指向する。住居の掘方内からは、小穴が4基検出されている。このうち南西側の小穴S P178は古代～中世の壠立柱建物S B 6に伴うものなので、他のP 1・2・4が柱穴と判断される。P 1・2間は204cm、P 1・4間は198cmである。か跡、貼床等、住居内の施設は確認されなかった。

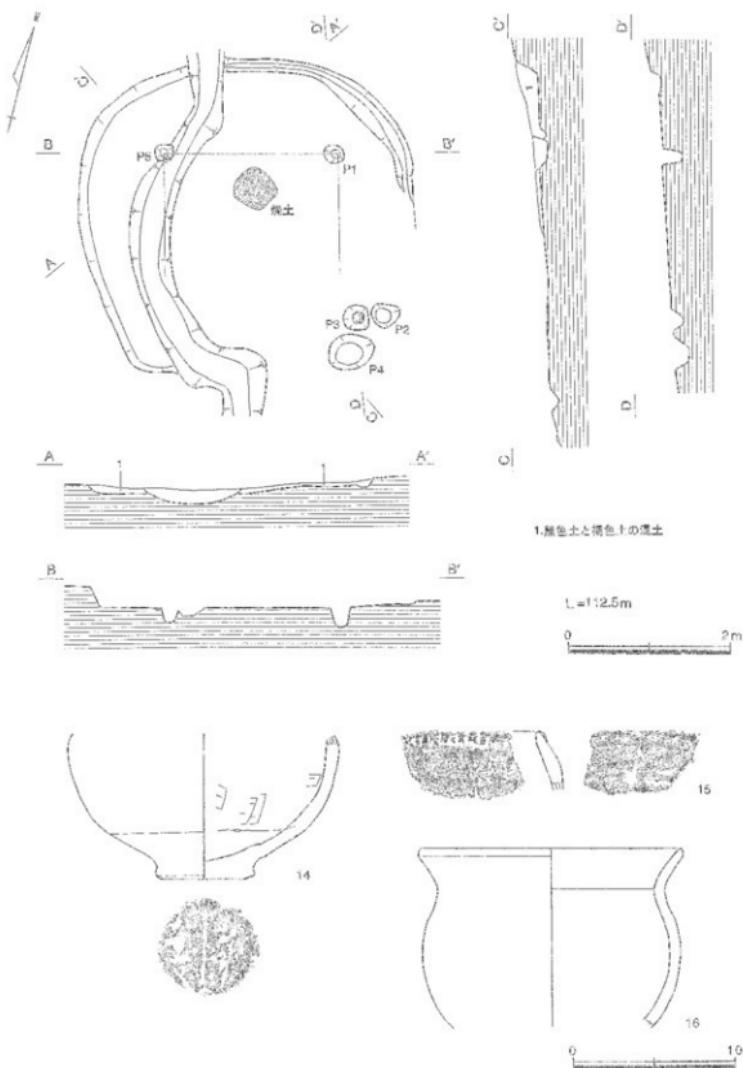
遺物は覆土である黒色土から土器が出土している。

12は後期の壠口縁部である。口径14.0cm、残存高4.9cmを測る。胎上は緻密で径5mm以下の長石、橙色粒子を多く含み、黄褐色によく焼きあがっている。調整方法は内外面とも摩滅が激しいため判然としないが、口縁部内面に貼り付けによる円形浮文が4ヵ所中2ヵ所に残存している。

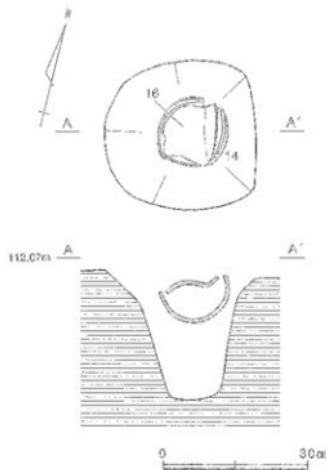
13は後期の壠口縁部である。残存高5.4cmを測る。胎上は緻密で径1mm以下の砂粒を多く含み、橙色によく焼きあがっている。外面を縱位方向のハケで調整したうえ、口唇部に刻目を施す。内面の調整は、摩滅が激しいため明らかでない。

S B 7 (第19・20・32・47図)

C 6グリッドで検出された、中期後半の割丸方形を呈する積穴住居である。覆土は褐色土と黒色土が混じった土である。覆土中から床面にかけて大量の炭化物が混入していたことから、火災によって失われたものと考えられる。西側から南側のプランは、耕作等によって削られ不正確になっている。現存する規模は、縦3.68m、横4.14mを測り、主軸はN-15°-Wを指向する。北東側には幅15~30cm、深さ10cm程度の壁跡が確認された。併は住居中央よりやや北によって造られている。住居の掘方内からは、小穴が5基検出されている。このうちP 1・5は主柱穴と判断され、その間隔は206cmを測る。住居内の南東隅にあるP 3は、P 1・5に対して主柱穴となりうる傾向の位置に掘られているが、内部には14の甃に16の甃が重ねられるかたちで埋め込まれていた。柱穴であれば、柱を引き抜いた後に入れたことになる。



第19図 整穴住居S-B7及び出土遺物



第20図 穹穴住居SB 7内P 3遺物出土状況

14はP 3内に重なった状態で出土した後期の壺口縁部である。口径は推定で径4.96m、横3.77mを測り、主軸は柱穴の間隔からN-35°-Wを指向するものと思われる。東側の一部には幅22~40cm、深さ15cm程度の焼跡が認められた。住居の強方内からは小穴が6基検出された。このうちのP 1~4が主柱穴と判断される。柱穴の間隔はP 1・2間が226cm、P 4・3間が241cm、P 1・4間が200cm、P 2・3間が222cmを測る。柱穴で囲まれた矩形の空間の、やや北に寄った位置に炉が設けられている。

15はP 3内に、14の上に重なった状態で出土した後期の壺口縁部である。口径は推定で径16.4cm、横15.9m、残存高10.9cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面を板ヶ替りで、口唇部をナデ仕上げた後、口唇部に5~7mm間隔で刻みを施している。なお、底面部外面上には木葉痕が認められる。

16はP 3内に、14の上に重なった状態で出土した後期の壺である。口径16.4cm、横部最大径15.9cm、残存高10.9cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面の調整は、摩滅が激しく明瞭でない。外面の所々に炭化物が付着している。

17は砂岩製の砥石・敲石である。完形であり主面部に砥面を持ち、端部に敲打痕が認められる。

18は泥岩製の打製石錐で、端部が一部欠損する。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと見われる。

SB 9 (第21図)

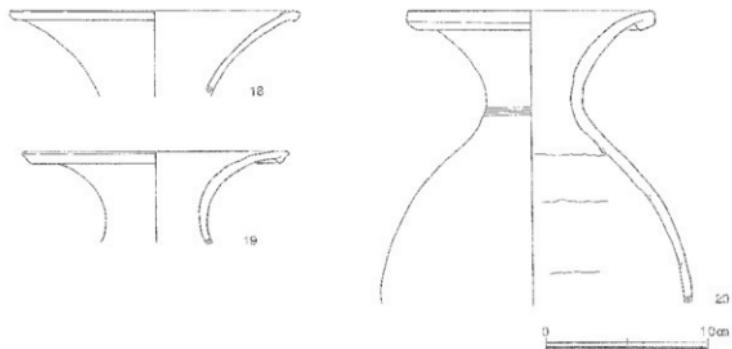
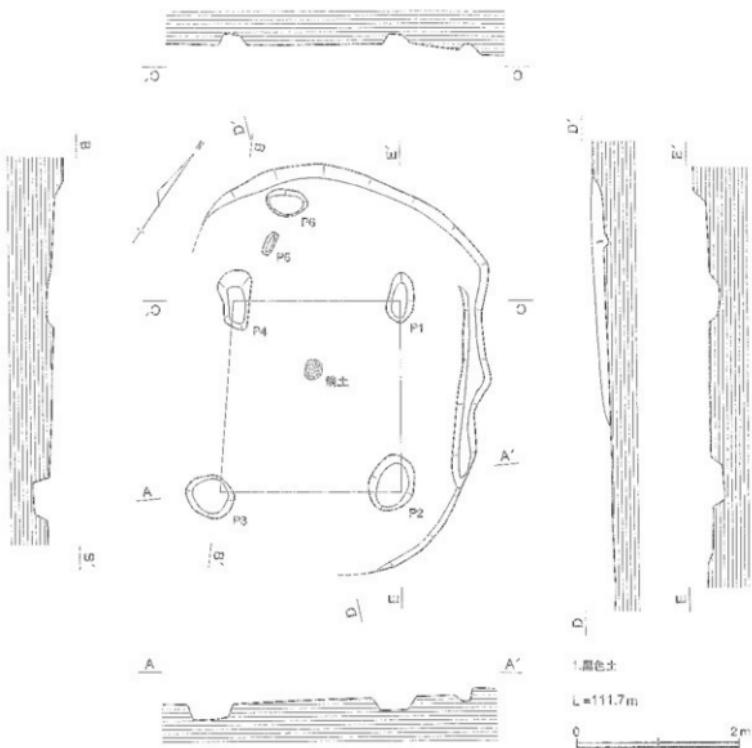
B 5・C 5グリッドで検出された、後期の楕円形を呈する穹穴住居である。覆土は黒色土である。西側から南側にかけての肩部が失われている。規模は推定で縦4.96m、横3.77mを測り、主軸は柱穴の間隔からN-35°-Wを指向するものと思われる。東側の一部には幅22~40cm、深さ15cm程度の焼跡が認められた。住居の強方内からは小穴が6基検出された。このうちのP 1~4が主柱穴と判断される。柱穴の間隔はP 1・2間が226cm、P 4・3間が241cm、P 1・4間が200cm、P 2・3間が222cmを測る。柱穴で囲まれた矩形の空間の、やや北に寄った位置に炉が設けられている。

遺物は、覆土から土器が出土している。

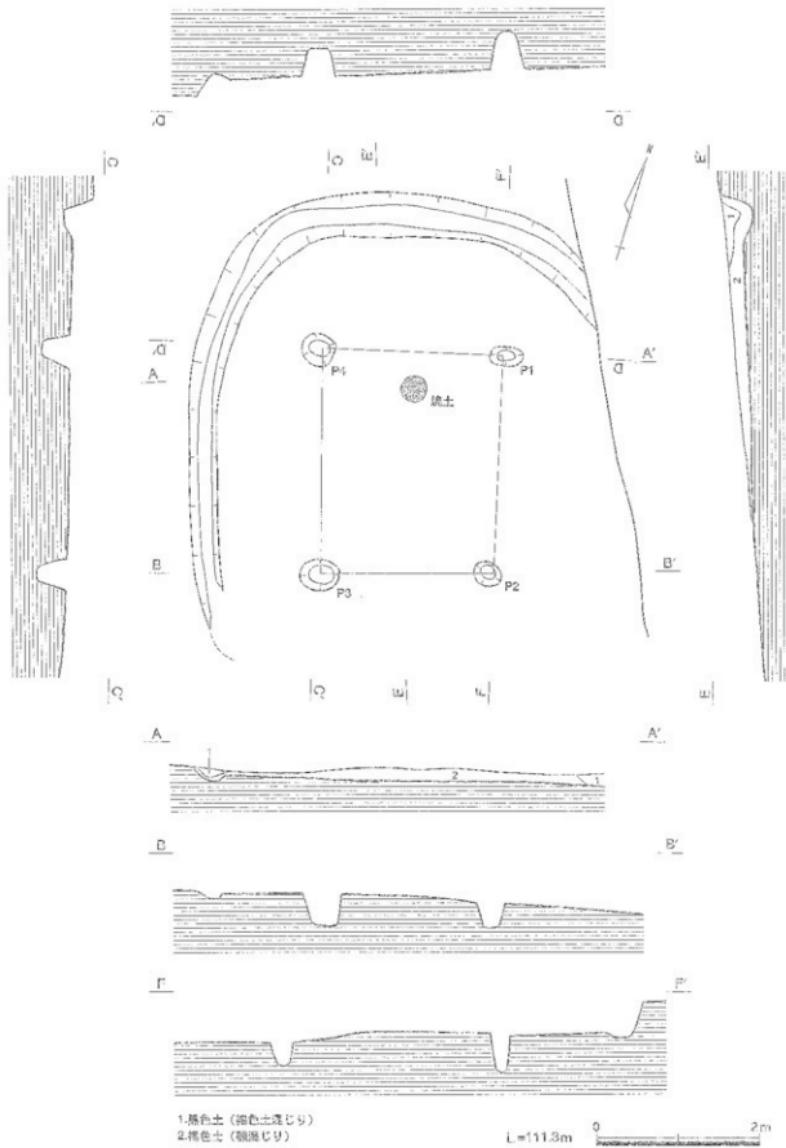
18は後期の壺口縁部である。口径18.8cm、残存高5.3cmを測り、薄手で繊細なつくりをしている。胎土は緻密で径2cm以下の長石を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。軽く折り返された口唇部の内面には円形浮文が認められる。体部内外面とも摩滅のため調整は明瞭でない。

19は後期の壺口縁部である。口径16.4cm、残存高5.5cmを測る。胎土は緻密で径5cm以下の長石、径1mm以下の橙色粒子を多く含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面とも摩滅のため調整は明瞭でない。

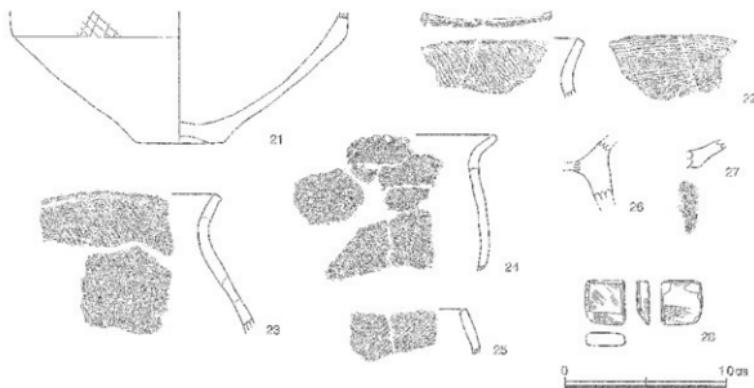
20は後期の壺である。口径は15.3cm、横部最大径19.3cm、残存高17.9cmを測る。胎土は1cm以下の長石・礫を多く含み、淡黄橙色を呈してよく焼きあがっている。頸部に2本の平行沈線が認められる。体部内外面とも摩滅のため調整は明瞭でない。



第21図 整穴住居跡 S-B9 及び出土遺物



第22図 整穴住居跡 S B10



第23図 壺穴住居跡SB10出土遺物

SB10 (第22・23・52図)

D5グリッドで検出された、中期後半の壺形窓を有する壺穴住居である。覆土のほとんどは褐色土であるが、壁溝部分にだけ上位に黒色土が、下位に褐色土が入る。東側の調査区間にあたるため、プランの東側一部は検出されていない。規模は縦が現存5.34m、横が現存5.23mを測り、主軸はN-15°-Wを指向する。壁溝は幅30~50cm、深さ40cmの規模があり、検出されたプランにはほぼ全周して認められた。住居に伴う小穴は4基で、すべて主柱穴と判断される。柱穴の間隔は、P1・2間が264cm、P4・3間が280cm、P1・4間が226cm、P2・3間が204cmを測る。掘方の中央からやや北寄りに炉が設けられている。貼床は検出されなかったが、住居内側方向に壁溝が立ち上がらないことからも、掘方底面を直接床面としていた可能性が高い。

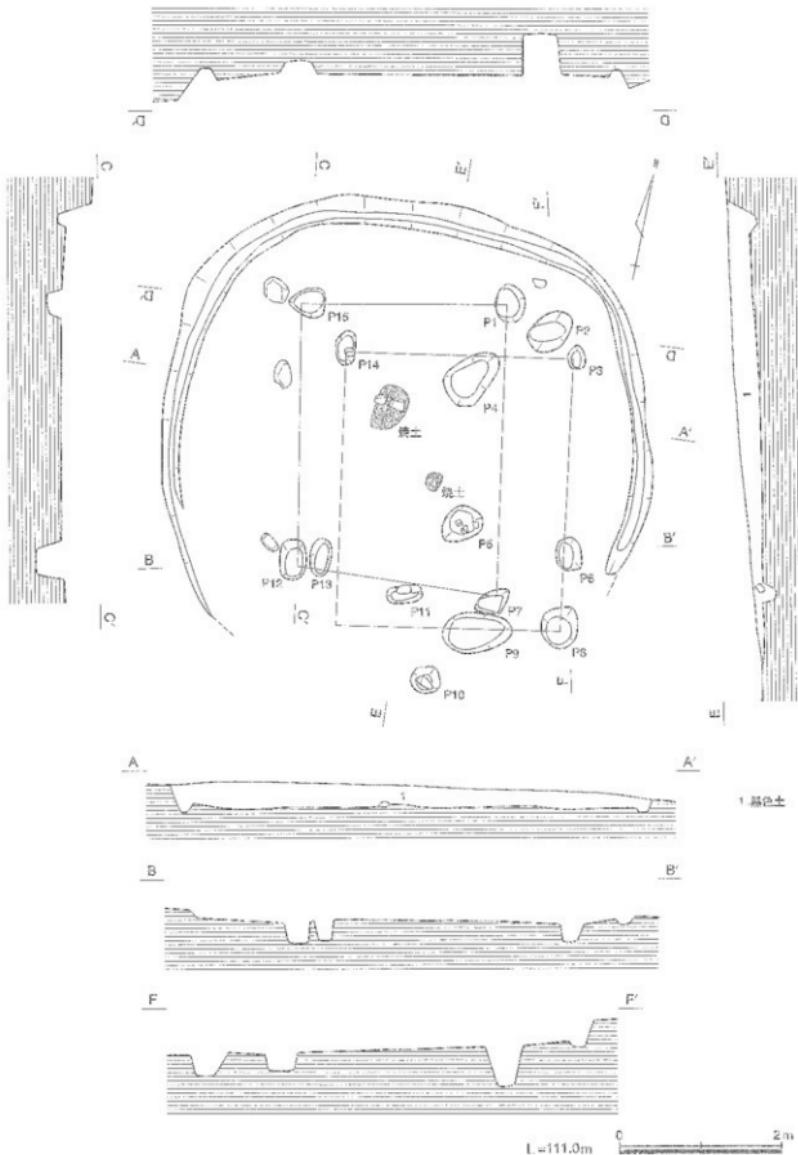
遺物は土器であり、27が覆土の下位にあたる褐色土から、他は壁溝上位に堆積する黒色土から出土している。

21は中期後半の壺体部～底部である。底径は5.5cm、残存高8.0cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒・長石・橙色粒子を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。底部は中央が若干盛り上がる上げ底状で、体部は底部から急に立ち上がる。体部下半に稜をもち屈折するが、ここに細いヘラ状工具による斜格子文が施される。調整方法は内外面ともには摩滅のため明らかでないが、おそらくミガキで仕上げられていると思われる。

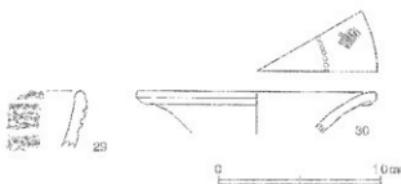
22は中期後半の壺口縁部である。胎土は緻密で1mm以下の長石を少量含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面ともにハケ調整され、口唇部は面取りされる。全体にすくけて炭化物が付着している。

23は中期後半の壺口縁部である。残存高3.5cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の橙色粒子、2mm以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面はハケ調整されるが、他の部分は摩滅のため明らかでない。口唇部は面取りされる。口縁部外面には炭化物が付着している。

24は中期後半の壺口縁部である。残存高8.4cmを測る。胎土は緻密で径2mm以下の砂粒を多数含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部内外面はハケ調整が認められるが、他の部分は摩滅のため明らかでない。口縁端部は面取りされ、8mm前後の間隔で刻みが施される。外面は部分的に黒くすりつけている。



第24図 穹穴住居跡S-B11



第25図 豊穴住居跡S-B-II出土遺物

25は鉢口縁部片である。胎土は緻密で径1mm以下の黒雲母・砂粒を多く含み、黄橙色を呈してよく焼きあがっている。外面はナデの後LR繩文が施される。内面は摩滅のため調整は明らかでない。口縁端部は面取りがされていると思われる。

26は高环である。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒を多く、径1mm以下の長石・褐色粒子を少景含み、淡黄橙色を呈してよく焼きあがっている。

27は縄文土器の底部である。底径は15.8cm、残存高1.7cmを測る。胎土は2mmの大いな小穂を含み、黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

28は緑色凝灰岩製の扁平片刃石斧である。完形品であるがよく使い込まれており、刃部が食い減りしてかなり短くなっている。大きさは長さ2.71cm、幅2.52cm、厚さ0.82cmを測る。

187は中粒砂岩製の打製石斧である。先端部にゆくほど丁寧に調整される。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

S-B-II (第24・25・33・47・50・53図)

C・D4グリッドで検出された、後期の四隅がやや張った円形を呈する豊穴住居である。炉跡が2基検出されているため、2時期にわたり拡張されていると思われる。覆土は黒色土で、切り合いかみられないことから、検出された状態が最終形態と判断される。規模は縦が現存4.9m、横5.93mを測り、主軸はN-19°-Wを指向する。耕作等によって失われている南側以外には、幅15~40cm、深さ15~35cmを測る壁溝がめぐらしている。南東側には壁溝に連結する位置にN-67°-Wへ伸びるS-D4がある。住居に接する状況は明らかではないが、住居からの排水機能を持つ溝であると思われる。住居の掘方内からは、小穴が15基検出されており、このうちのP1・7・12・15が最終形態の主柱穴と判断される。柱穴の間隔はP1・7間で365cm、P15・12間で310cm、P1・15間で250cm、P6・7間で245cmを測り、東西方向がほぼ同一であることがわかる。また、南側のP9は貯蔵穴の可能性がある。炉跡は中央や北西よりに検出され、焼土の上にはS-B2と同様、二つに割れた上面が平坦な長方形の石を配石している。

これに先行する住居は、プランの南東側に検出されたがを中心とするP3・8・14を柱穴に用いたものである。これにより、従来の住居を北西側に拡張した上、主柱穴と炉を中央よりに通り替えることが分かる。柱穴の間隔は、P3・14間で285cm、P3・8間で335cmを測る。なお、この住居の覆土からは他の住居跡に比べ土器片や石器が多く出土している。それに比べ復元できる個体が著しく少ないことは、所蔵後のくぼみが痕跡土坑として利用されたことを示唆しているのだろう。

遺物は、覆土から土器、石器、石製品が出土している。

29は縄文陶器に当たる大高BC式に併行する深鉢の口縁部である。残存高は3.4cmを測る。胎土は石英、長石を含み、外面がにぶい褐色、内面が明赤褐色を呈してよく焼きあがっている。内外面に条痕による調整の後、口縁に沿う沈線区画の中に竹管による刺突を施す。S3と同一個体である。

30は壁溝の黒色土から出土した、後期の窓口縁部である。口径14.8cm、残存高2.5cmを測る。胎土は緻密で1~2mmの長石を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。折り返し口縁をもち、口縁内側にLR繩文、円形押圧文が施される。外面の調整は摩滅のため明らかでない。

49は、P-IIから出土した砂岩製の磨石である。被熱による破損が顕著で、本来は倍以上の大きさであったと思われる。

第26圖 離穴性層隙 S B12・13・18

图 110.5m

2m

0

- 1.褐色土
- 2.褐土
- 3.暗褐色土

A'



0

A'

0

A'



P12



P13



P14



P15



P16

SB18



P17

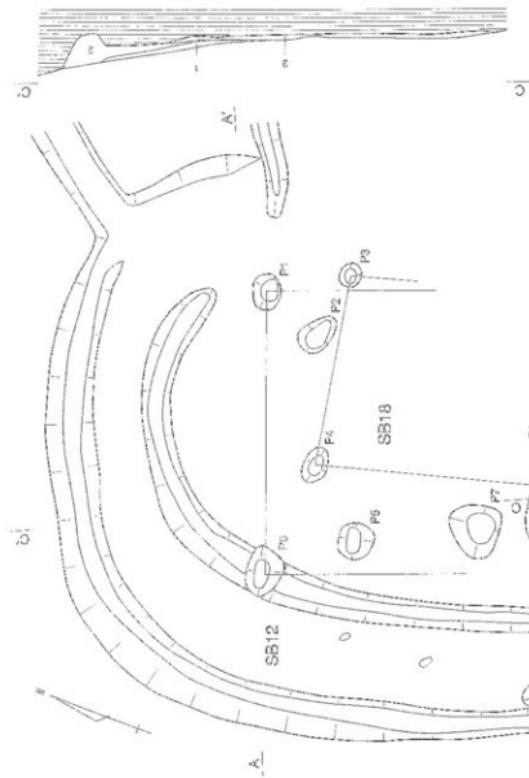


P18



P19

B



B

C

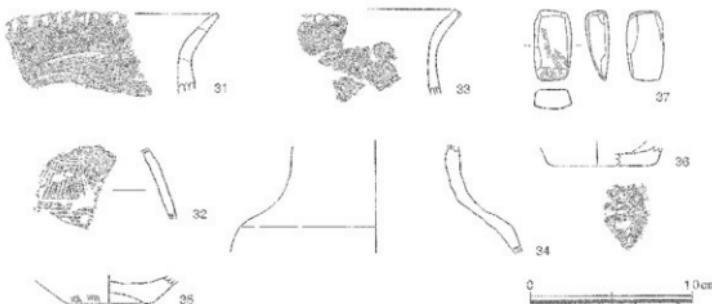
D

C

A'

C

A'



第27図 積穴住居跡SB12・13、溝SD5出土遺物

52は被熱する砂岩製の砥石である。P12脇の床面に掘え置いたかたちで出土した。表裏、両側辺に砥面が認められるが、とくに正面が使い込まれている。磨製石斧の砥石であろう。

55は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。正面部に摩耗痕が認められる。西よりの床面に掘え置かれたかたちで出土している。

137はチャート製の石匙である。主に片面からの調整で仕上げられる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

199は細粒砂岩製の打製石斧である。基部は折れて失われている。表面には原礫面を残し、比較的広い剥離面が目立つ。裏面は側縁からの丁寧な調整が加えられる。なお、一部に被熱した痕跡がある。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

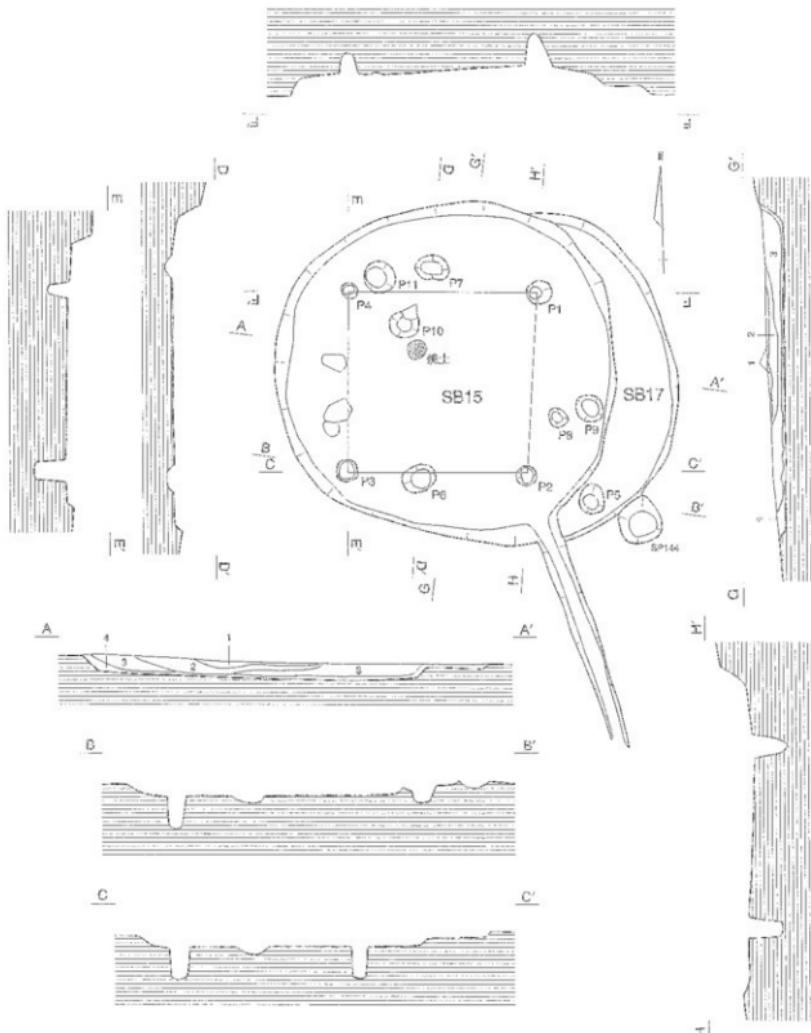
なお、これらのはかに扁平片刃石斧が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SB12・13・18 (第26・27・32・33・50図)

D・E3、D・E4グリッドで検出された、SB12・18は中期後半の橢円形、SB13は中期後半～末の丸方形容を呈する積穴住居である。SB12はSB18からの拡張、SB13はSB12とSB18が疊合した後にこれらの一帯に重複するかたちで建てられたものとみられる。覆土はSB12が褐色土、SB13が褐色土上に黒色土が混ざった土、SB18は黄褐色土となる。

SB18は西から南北側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は黄褐色土である。平面形は橢円形で、規模は残存部分で縦5.6m、横5.4mを測り、柱穴の位置から主軸はN-17°-Wを指向すると思われる。横溝は幅30～50cm、深さ28cmの規模で、北側から南北側にかけて検出された。聖溝の覆土は、床面と考えられる掘方底面上にある黄褐色土と同質であることから、SB12へ拡張する際に新たな床面を造成するため一律に埋められたものと考えられる。この住居に伴う柱穴はP3・4・10が想定される。柱穴の間隔はP3・4間で240cm、P4・10間で332cmを測る。が跡は検出されなかった。

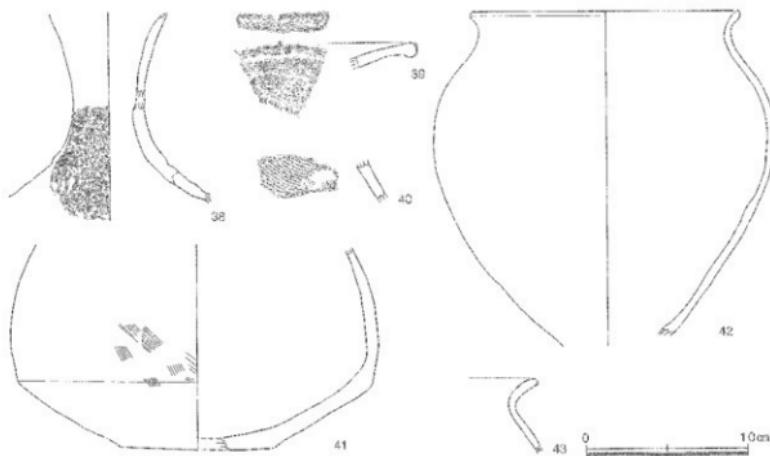
SB12も西から南北側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は褐色土を主体とするが、上位に部分的に黒色土を含んでいる。平面形は橢円形で、規模は残存部分で縦8.48m、横6.75mを測り、柱穴の位置から、主軸はN-20°-Wを指向すると思われる。壁溝は幅29～68cm、深さ45cm前後を測り、北東側から南北側にかけて検出された。壁溝付近からSB18の範囲にかけて褐色土が堆積しているが、聖溝の立ち上がりが内側に観察できなかったため、掘方の底面とSB18に入れられた黄褐色土の上面が床面になっていたものと考えられる。この住居に伴う柱穴はP1・6が想定される。南側には該当する柱穴はみられない。柱穴の間隔はP1・6間で352cmを測る。炉跡は検出されなかった。



1. 灰土 (耕作土)
2. 黑色土
3. 暗色土 (黑色土 < 泥炭)
4. 深色土 (黑色泥 < 泥炭)

L = 110.0m 0 2m

第28図 整穴住居跡 S B15 + 17



第29図 窓穴住居跡S B15出土遺物

なお、北東側には住居外へN-46°-Eの方向にSD 5が据られている。柄鏡と出土遺物は洞の順で述べる。

遺物は、覆土から土器、石器が出土している。

31は中期後半の窓口縁部である。残存高は4.8cmを測る。胎土は緻密で径0.1mm以下の石英、径1mmの橙色粒子・小豆色粒子を含み、浅橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面は磨滅のため明確ではないが、ハケ調整が施されているものと思われる。口唇部には7~11mm間隔で刻みが施される。

32は中期後半の窓局部である。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒・橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してよく焼きあがっている。外面はハケ調整後に横位の櫛状文が施される。内面は磨滅のため明らかでない。

37は壁内から出土した、小型の緑色凝灰岩製柱片右刃斧である。完形品であるが、使用頻度が頗る者であり、刃部に擦痕が認められる。大きさは長さ4.36cm、幅2.35cm、厚さ1.42cmを測る。

47は凝灰岩製の砥石である。端部が欠損しているものの使い込まれており、中央部がわずかに湾曲する。

57は凝灰岩製の砂岩製の礫断片である。47と同じ石材であるため、礫石の素材である可能性がある。

58は頁岩の扁平な礫である。長さ7.47cm、幅6.79cm、厚さ1.24cmで側辺の稜線部に摩耗痕が顯著である。用途は判然としない。

S B13は西側が耕作等によって削られて残存していない。覆土は黒色土である。平面形は隅丸方形と想定され、規模は残存部分で縦3.15m、横2.09mを測り、窓溝の方向から、主軸はN-32°-Eを指向すると考えられる。S B18よりも掘方が深く、幅19~48cm、深さ12cm程度の窓溝が残っている。住居の窓方内からは3基の小穴が検出されたが、P10はS B18の柱穴、P12は窓溝の延長上にあたるため、主柱穴は待定できない。炉跡は検出されなかった。

遺物は、覆土から土器、石器が出土している。

33は中期後半の窓口縁部である。胎土は緻密で径1mm以下の橙色粒子・砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面は縦位に、内面は横位にハケ調整が施される。口唇部には5~10mm間隔で刻みが施される。

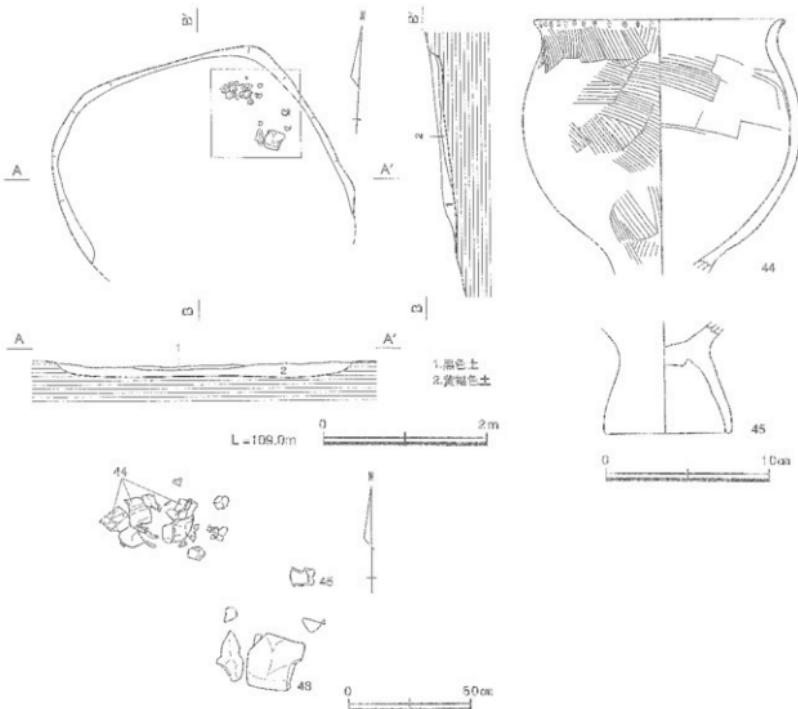
34は中期後半の壺肩部である。胎土は緻密で径4mm以下の長石、径1mm以下の砂粒を含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。内外面とも磨滅のため調査は明らかでない。

35は中期後半の壺底部である。底径は5.6cm、残存高1.7cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の長石・砂粒を含み、にぶい黄褐色を呈しよく焼きあがっている。底部外面が持ち上がって上げ底風となっている。外面にはナデの後ハケ調整が施される。内面は磨滅のため明確ではない。

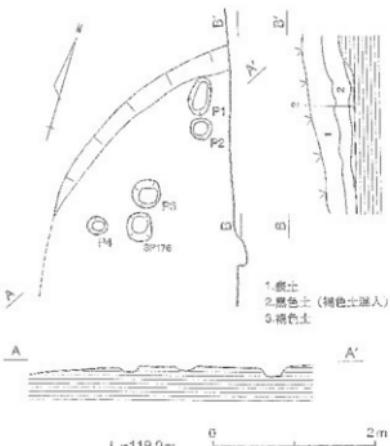
171は細粒砂岩製の打製石斧である。表面に広く原疊面を残す。先端部には使用痕と思われる無数の擦痕が付く。刃部と頭部は丸ノミ状となる。縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

S B15 (第28・29・32・33・48図)

C・D 3 グリッドで検出された、後期の円形を呈する竪穴住居である。置土は下位が褐色土、上位が黒色土である。規模は縦4.03m、横4.21m、床面積は16.9m²であり、主軸はN-3°-Eを指向する。掘方内からは10基の小穴が検出され、P 1～4が主柱穴と判断される。柱穴の間隔はP 1・2間、P 4・3間がともに222cm、P 1・4間が225cm、P 2・3間が224cmとほぼ等間隔である。中央や北西寄りに炉跡が確認された。南側には住居外のN-19°-Wの方向へ、排水のための溝と考えられるS D 7が取り付いている。



第30図 竪穴住居跡 S B16及び出土遺物



第31図 積穴住居跡 S B19

る。内面の調整は摩滅のため明らかでない。

41は後期の壺である。底径9.5cm、調部最大径22.6cm、残存高12.4cmを測る。胎土は緻密で径5mm以下の小鉢を含み、黄褐色を呈してよく焼きあがっている。体部外面とも摩滅が激しいが、外面の一部にハケ調整後に長いナナゲが施されている。また、底部外面には木葉痕があり、外面には焼成時の黒斑が認められる。

42は後期の台付壺である。口径16.8cm、腹部最大径21.0cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒・橙色粒子を含み、浅黄褐色を呈してよく焼きあがっている。調整は体部外面とも摩滅のため明らかでない。

43は後期の壺口縁部である。胎土は緻密で径3mm以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面の調整は摩滅のため明らかでないが、内面は口縁部付近がハケ、頸部に近いあたりがヘラナナゲで仕上げられている。口唇部は直取りされ、剥みが付けられる。

51・54は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。正面部に摩耗痕が認められる。いずれも西よりの床面に抱え置かれたかたちで出土している。

148は上位の褐色土から出土した台形状を呈する泥岩製のスクレイバー、189は細粒砂岩製の打製石斧である。表面側縁部に原礫面を残す。ともに縄文時代のもので、覆土中に混入したものと思われる。

S B16 (第30・32図)

D 2グリッドで検出された後期の方形を呈する土坑である。柱穴、炉跡は確認できなかったが、小型住居のため無主住の可能性もあると考え、竪穴住居と理解した。南側が耕作等によって失われている。覆土は上位が黒色土、下位が黄褐色土となる。特に下位の黄褐色土は褐色土が白色化したように見え、S B18の覆土に近い雰囲気を持つ。規模は残存部分で縦3.3m、横2.25mを測り、主軸はN-57°-Eを指向すると思われる。住居内の北側の床面上からは、台付壺1個体がつぶれて出土し、これから南東側に1.4m離れた位置に台石が抱え置かれていたほか、覆土中に握り拳大～人頭大の礫が多量に含まれていた。

遺物は、覆土のうち下位の褐色土（第28図中4層）から上層が、上位の褐色土（同3層）と黒色土（同2層）から石器が出土している。

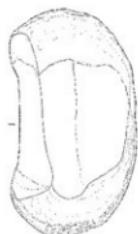
38は中期後半の壺頸部から肩部である。胎土は緻密で径5mm以下の長石を含み、明黄橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面には幅6mm程度の縫合部が輪位に貼り付けられ、その下に櫛状工具による刺突文が施される。さらに、この部分から肩部にかけてR L縞文が認められる。内面の調整は摩滅のため明らかでない。

39は後期の壺口縁部である。胎土は緻密で径5mm以下の長石を多く含み、浅黄褐色を呈してよく焼きあがっている。体部内外面ともに調整は摩滅のため明らかでないが、口縁部に棒状浮文が1ヶ所認められる。

40は後期の壺肩部である。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒を多く含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面にはR L縞文が施される。

第5表 穫穴住居跡小穴計測表

| 記録名 | 番号 | グリッド | 直径(cm) | 深さ(cm) | 遺構名 | 番号 | グリッド | 直径(cm) | 深さ(cm) |
|-----|-----|------|--------|--------|------|-----|-------|--------|--------|
| SB2 | P1 | A8 | 39 | 16 | SB10 | P1 | D5 | 42×25 | 48 |
| | P2 | A8 | 39 | 12 | | P2 | D5 | 37×30 | 28 |
| | P3 | A8 | 22×15 | 7 | | P3 | D5 | 45×40 | 38 |
| | P4 | A8 | 30 | 14 | | P4 | D5 | 40 | 25 |
| | P5 | A7 | 30×20 | 11 | | P1 | D4 | 45×37 | 13 |
| | P6 | A7 | 27×22 | 27 | | P2 | D4 | 60×42 | 50 |
| | P7 | A7 | 28×23 | 17 | | P3 | D4 | 30×20 | 34 |
| | P8 | A7 | 35×30 | 28 | | P4 | D4 | 75×52 | 12 |
| | P9 | A7 | 35×30 | 29 | | P5 | D4 | 32×45 | 13 |
| | P10 | Z7 | 30×25 | 16 | | P6 | D4 | 60×30 | 25 |
| | P11 | Z8 | 28×23 | 5 | | P7 | D4 | 35 | 16 |
| | P12 | Z8 | 30×25 | 17 | | P8 | D4 | 50×45 | 28 |
| | P13 | Z8 | 30 | 6 | | P9 | D4 | 52×60 | 9 |
| | P14 | A7 | 38×30 | 20 | | P10 | D4 | 35 | 16 |
| | P15 | A7 | 103×85 | 11 | | P11 | C4・D4 | 45×20 | 19 |
| SB3 | P1 | A6 | 62×57 | 16 | | P12 | C4 | 50×30 | 24 |
| | P2 | A6 | 30×25 | 24 | | P13 | C4 | 47×25 | 25 |
| | P3 | A6 | 26 | 16 | | P14 | C4 | 42×25 | 11 |
| | P4 | A6 | 40 | 15 | | P15 | C4 | 45×35 | 15 |
| | P5 | A7 | 35×25 | 11 | | P8 | D4 | 40×27 | 16 |
| | P6 | A6 | 45 | 12 | | P9 | D4 | 20 | 11 |
| | P7 | A6 | 50 | 12 | | P10 | D4 | 40×30 | 12 |
| | P8 | A7 | 42×32 | 9 | | P11 | D3 | 30 | 15 |
| | P9 | A6 | 105×55 | 16 | | P12 | D3 | 40×32 | 8 |
| | P10 | A6 | 35 | 12 | | P1 | D3 | 25×20 | 13 |
| | P11 | A7 | 39 | 13 | | P2 | D3 | 25×20 | 13 |
| | P12 | A7 | 120×90 | 12 | | P3 | D3 | 15 | 22 |
| | P13 | A7 | 22×17 | 18 | SB14 | P4 | C3 | 15 | 18 |
| | P14 | A7 | 25×20 | 31 | | P5 | C3 | 20 | 12 |
| | P15 | A7 | 25×15 | 26 | | P6 | D3 | 20 | 15 |
| SB4 | P1 | C8 | 25 | 42 | | P1 | D3 | 30 | 40 |
| | P2 | C8 | 20 | 15 | | P2 | D3 | 25 | 41 |
| | P3 | C8 | 25×20 | 31 | | P3 | C3 | 25 | 40 |
| | P4 | C8 | 22×17 | 18 | | P4 | C3 | 20 | 25 |
| | P5 | C8 | 25×15 | 26 | | P5 | C3 | 20 | 30 |
| SB5 | P1 | C7 | 35×25 | 13 | | P6 | C3 | 42×32 | 3 |
| | P2 | C7 | 22×17 | 27 | | P7 | C3 | 42×27 | 11 |
| | P3 | C7 | 50×30 | 13 | | P8 | D3 | 25×20 | 7 |
| | P4 | C7 | 25×15 | 25 | | P9 | D3 | 35 | 11 |
| | P5 | C7 | 35×25 | 25 | | P10 | C3 | 37×30 | 10 |
| | P6 | C7 | 32×25 | 36 | | P11 | C3 | 40 | 8 |
| | P7 | C7 | 60×48 | 28 | | P5 | D3 | 37×30 | 22 |
| | P8 | C6 | 25×20 | 5 | SB17 | P1 | E4 | 45×35 | 24 |
| SB6 | P1 | C6 | 22 | 23 | | P2 | E4 | 55×35 | 10 |
| | P2 | C6 | 35×30 | 23 | | P3 | E4 | 30 | 27 |
| | P4 | C6 | 35×30 | 23 | | P4 | D4 | 45×30 | 15 |
| SB7 | P1 | C6 | 25 | 24 | | P5 | D4 | 45 | 17 |
| | P2 | C6 | 35×30 | 11 | | P6 | D4 | 60×40 | 22 |
| | P3 | C6 | 32×27 | 25 | | P7 | D4 | 65×60 | 10 |
| | P4 | C6 | 57×42 | 18 | SB19 | P1 | D7 | 50×25 | 16 |
| | P5 | C6 | 20 | 18 | | P2 | D8・D7 | 27 | 9 |
| SB8 | P1 | C5 | 60×35 | 13 | | P3 | D6 | 35 | 41 |
| | P2 | C5 | 72×55 | 14 | | P4 | D6 | 25 | 9 |
| | P3 | C5 | 57×50 | 19 | | P5 | D6 | 40 | 10 |
| | P4 | C5 | 72×42 | 14 | | P6 | D6 | 40 | 10 |
| | P5 | C5 | 30×12 | 6 | | P7 | D4 | 65×60 | 10 |
| | P6 | C5 | 50 | 10 | | P1 | D7 | 50×25 | 16 |

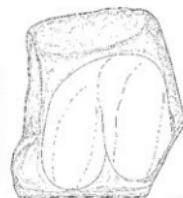


46

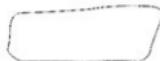


47

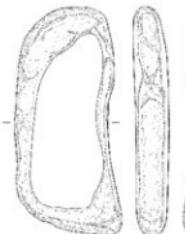
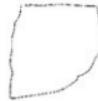
0 10 cm



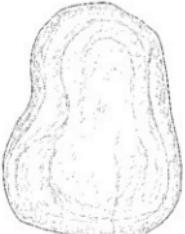
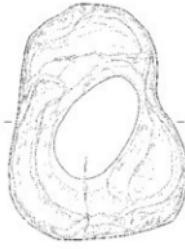
48



49



50

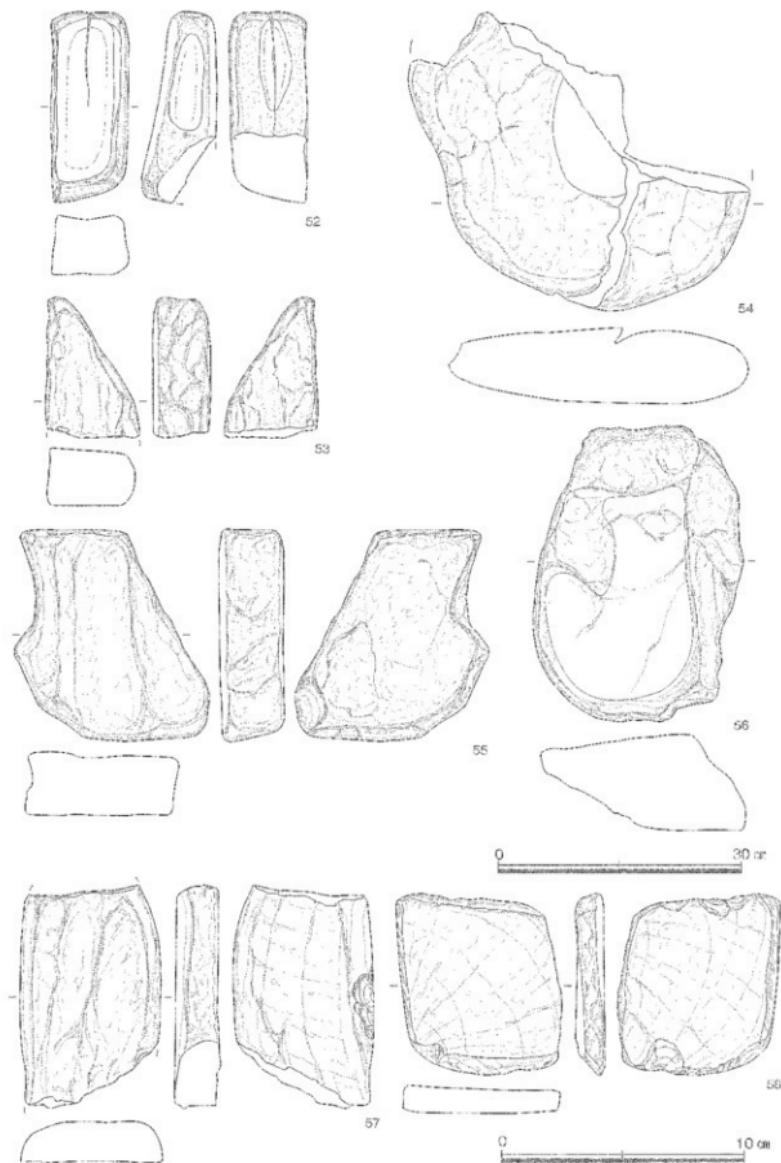


51



0 30 cm

第32図 遺構出土の石器・石製品1



第33図 遺構出土の石器・石製品2

遺物は、下位の包含層である黄褐色土から土器・石製品が出土している。

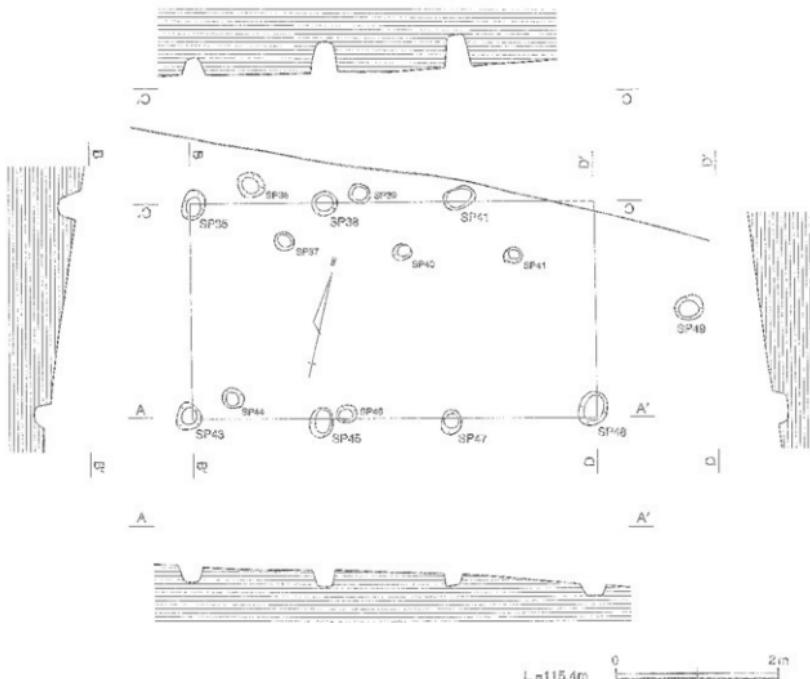
44は後期の窯である。口径15.5cm、胴部最大径17.1cm、残存高15.6cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。体部外面はハケ調査が施され、内面も横位のハケ調整が施される。口唇部には8~10mm間隔で刻みが付けられる。また、外面はすすぐて、内面の下位には炭化物が付着している。

45は後期の台付壺脚部である。底径7.6cm、脚の高さは5cmを測る。胎土は緻密で径1mm以下の砂粒を多く含み、橙色を呈してよく焼きあがっている。調整は、内外面ともに厚塗のため明らかでないが、脚部と体部の接合部にはわずかな指頭痕が複数残されている。

48は床面から出土した砂岩製の砥石である。床面に据え置いて使用されたものであり、主面部に砥面が認められる。

S B19 (第31図)

C 6・7グリッドで検出された神円形を呈すると思われる竪穴住居である。覆土は黒色土と褐色土が混ざった土である。調査区の東側の隅で半分以上は調査区外であり、南側も削られてしまっているため、検出できたのは、住居跡の北西の一部であると思われる。住居の縦方内からは4基の小穴が検出された。相互の位置関係が判然としないが、P 3が柱穴である可能性がある。



第34図 摂立柱遺物SH1

② 溝

溝はいずれも竪穴住居に伴うものである。堀削されている位置からすれば、SD 4や7のように住居から低い方向へ伸びるのは、排水などの用途が想定される。これとは別にほぼ同レベル、あるいは高い方からつながるSD 1・5・6などは、排水には利用できないので、それぞれの住居をつなぐ何らかの用件による区画溝と考えておきたい。

SD 1

A・B 7グリッドで検出された、竪穴住居跡S B 3に伴う溝である。住居のプランの北縁から東側へ延びる。規模は長さ3.15m、幅50cm前後、深さ2~3cmを測り、暗褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。

SD 4

D 4グリッドで検出された、竪穴住居跡S B 11に伴う溝である。住居のプランの南東縁より南東側へ延びる。規模は長さ2.85m、幅40cm前後、深さ10cm前後を測る。黒色土を覆土とする。遺物は出土していない。

SD 5 (第27図)

E 4・5グリッドで検出された、竪穴住居跡S B 12に伴う溝である。住居のプランの北東縁より北東側へ延びる。規模は長さ4.6m、幅60cm前後、深さ12cm前後を測る。褐色土を覆土とする。

36は繩文土器の深鉢底部である。底径は6.7cm、残存高1.2cmを測る。埴土は石英、雲母、長石を含み、明赤褐色を呈してよく焼きあがっている。このほか弥生中期後半のものと思われる上墻片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SD 6

E 4グリッドで検出された、竪穴住居跡S B 18に伴う溝である。住居のプランの北東縁より北東側へ延びる。規模は長さ4.5m、幅25~40cm、深さ5cm前後を測る。黄褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。

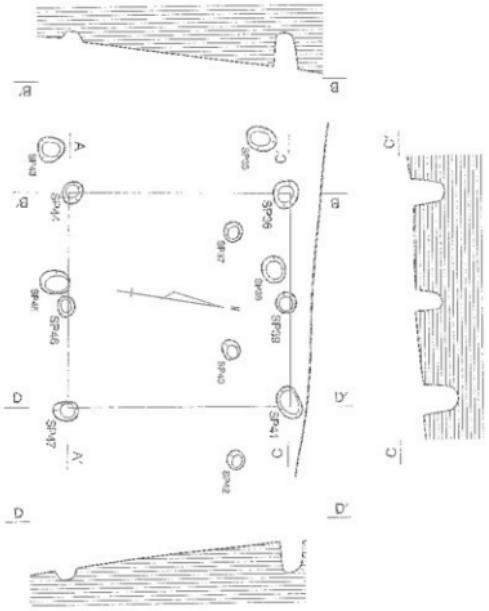
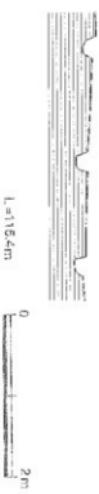
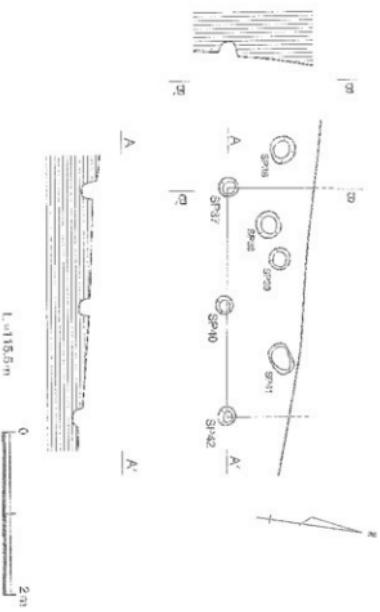
SD 7

D 3グリッドで検出された、竪穴住居跡S B 15に伴う溝である。住居の南縁より南側へ延び、規模は長さ2.6m、幅25cm前後、深さ5~8cm前後を測る。黒色土と褐色土の混土を覆土とし、遺物は出土していない。

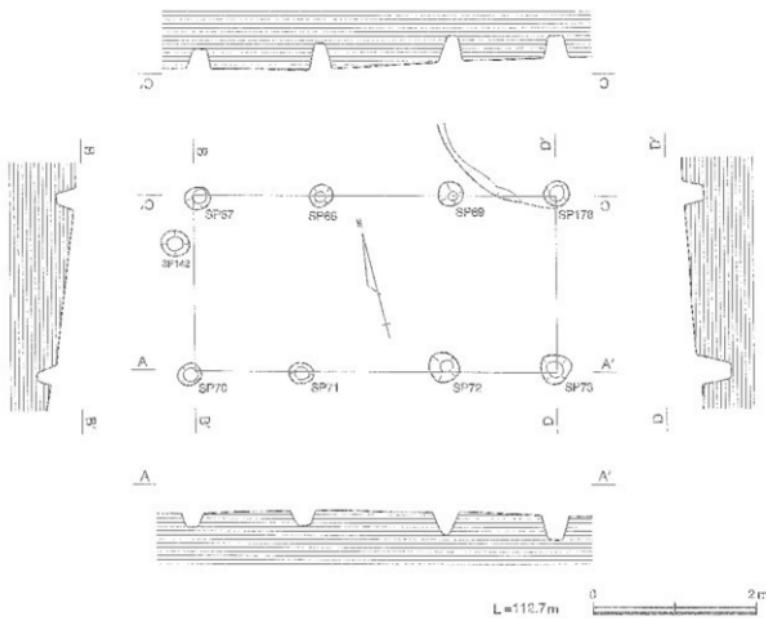
③ 土坑

S F 10

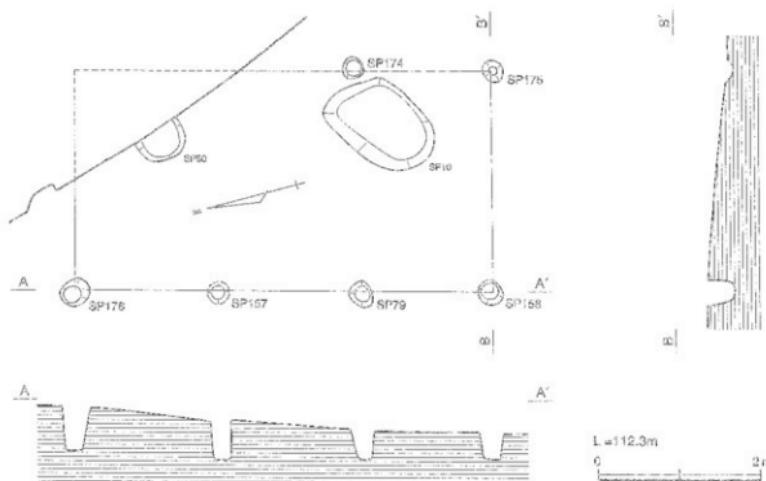
D 6グリッドで検出された、平面形は橢円形状の土坑である。規模は長さ130cm、幅95cm、深さ20cmを測り、皿状の断面形を呈する。覆土は主に上層が黄褐色土、下層が少量の炭化物を含む暗褐色土である。西側半分を中心に、四角に割り取られた大小さまざまな砾が埋め込まれていた。暗褐色土からは後期の土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。



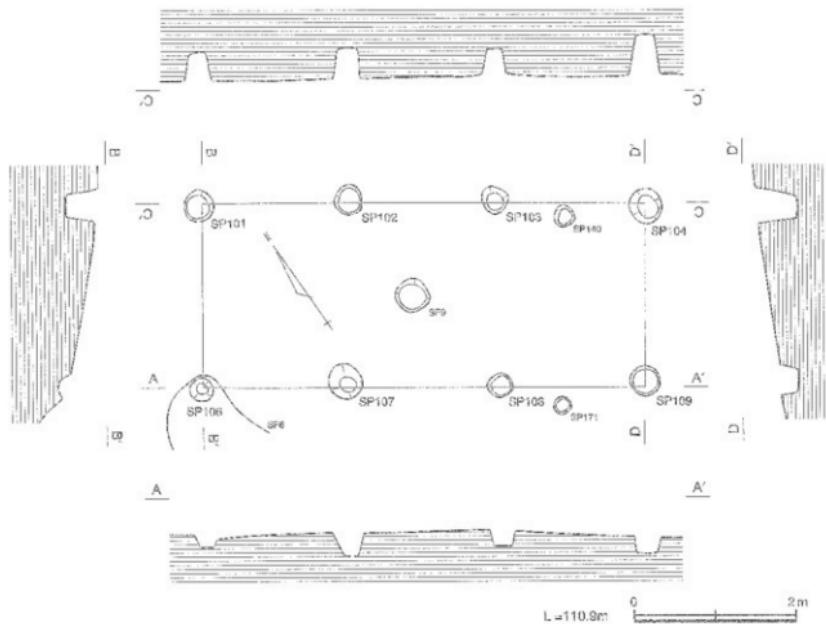
第35図 独立性題物SH2・3



第36図 捩立柱建物SH4



第37図 捩立柱建物SH5



第38図 挖立柱建物S H 6

(3) 歴史時代の遺構と遺物

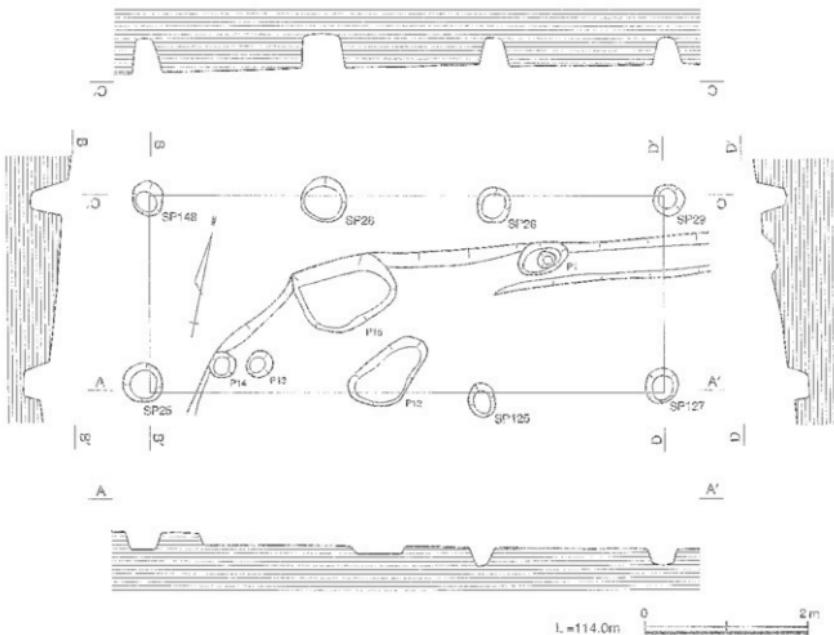
歴史時代の遺構は、掘立柱建物、竪穴住居跡、小土坑、溝が検出された。このうち、掘立柱建物は柱穴埋土から建設された時期を把握できる遺物が出土していないため、明確な時期は明らかでない。ただし、調査区内の包含層からは古代の遺物が出土し、中世前期の山茶楨も第44図のように分布することから、この時期の遺構と考えた。柱穴覆土は、大きく分けて暗褐色土を主体とするものと、黒色土のものに大別される。暗褐色土の組成が、より下位に堆積する層位によるものであることを考慮すれば、前者の埋土のものが古代、後者が中世前期の遺物と考えられる。いずれも概ね等高線に平行・直交するように築かれており、矩形の制約を受けた配画がなされていると見受けられる。

① 掘立柱建物跡

S H 1～3（第34・35図）

B 8グリッドで検出された、掘立柱建物である。S H 1～3は互いに重複する位置関係にある。S H 2・3の柱穴埋土が暗褐色土、S H 1の柱穴埋土が黒色土であることから、前者が後者に先行するものと考えられる。

S H 1は、南に面する3間×1間の便柱建物で、棟方向はN-78°-Eを指向する。規模は桁行4.95m、梁行2.6mで、桁行の柱穴間隔の平均は1.65mを測る。北東隅にあたる柱穴は、調査区外のため検出できなかった。柱穴の形状はS P 38が円形、他は橢円形である。



第39図 挖立柱建物SH 2

SH 2は、桁行2間、梁行1間の側柱建物で、棟方向はN-82°-Eを指向する。規模は桁行2.6m、梁行2.7mで、桁行の柱間間隔の平均は1.3mを測る。柱穴の形状はSP36・46が円形、他は梢円形である。なお、SP41・47はSH 1の桁行の柱穴と重複する位置にあり、埋土も黒色土である。現地では双方の建物の柱穴が重複していると考えたが、SH 2が南北に長い1間四方の建物であった可能性もある。

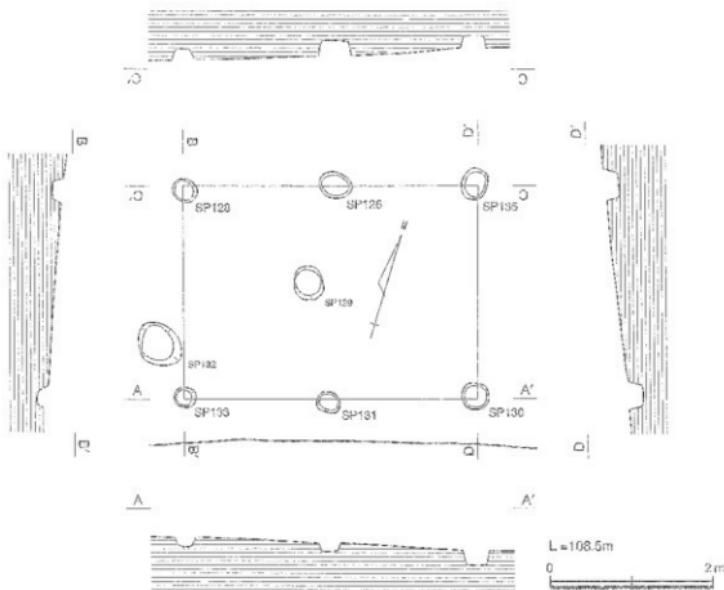
SH 3は、南に面する桁行が2間の建物であり、棟方向はN-80°-Eを指向すると思われる。規模は桁行2.8mで、柱間間隔の平均は1.4mを測る。柱穴の形状はいずれも円形である。北面の柱穴が調査区外にあたり検出できなかったため梁行の規模は把握できないが、柱穴の大きさや深さなどから、おそらくSH 2と近似した規模の建物と考えられる。

SH 4 (第36図)

B・C 6グリッドで検出された南に面する3間×1間の側柱建物で、棟方向はN-77°-Wを指向する。規模は桁行4.5m、梁行2.15mで、桁行の柱間間隔の平均は1.47mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形状はすべてほぼ円形である。

SH 5 (第37図)

D 6グリッドで検出された東に面する3間×1間の側柱建物で、棟方向はN-14°-Eを指向する。この建物だけが唯一南面しない。東面の北よりは調査区外のため、2本分の柱穴が確認されていない。規模は桁行5.1m、梁行2.7mで、柱間間隔の平均は1.7mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形状は円形である。



第40図 標立柱建物SH 8

SH 6 (第38図)

B・C 4グリッドで検出された南に面する3間×1間の側柱建物で、棟方向はN-55°-Wを指向する。規模は桁行5.4m、梁行2.25mで、桁行の柱間距離の平均は1.8mを測る。柱穴の覆土は黒色土で、平面形はS P104・108・109が円形、他は橢円形である。

SH 7 (第39図)

A・B 7グリッドで検出された南に面する3間×1間の側柱建物であり、棟方向はN-77°-Eを指向する。規模は桁行6.3m、梁行2.4mで、桁行の柱間距離の平均は2.1mを測る。桁行南面の西から2つめの柱穴は確認できなかった。柱穴の覆土は黒色土であり、平面形はS P125が橢円形、その他は円形である。

SH 8 (第40図)

E・F 2グリッドで検出された南に面する2間×1間の側柱建物で、棟方向はN-72°-Eを指向する。規模は桁行3.6m、梁行2.6mで、桁行の柱間距離の平均は1.8mを測る。柱穴の覆土は暗褐色土で、平面形はS P126・135が橢円形、他は円形である。

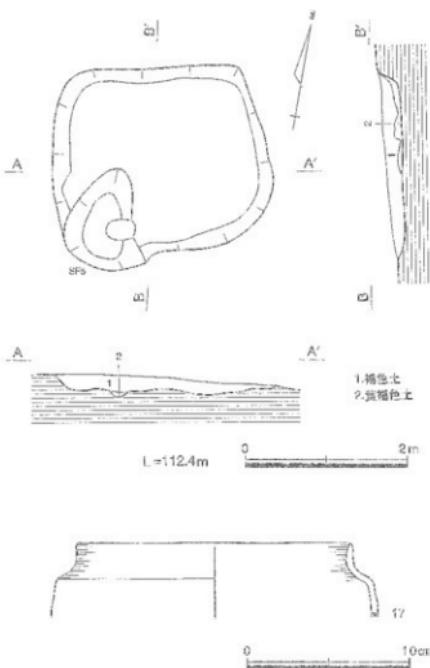
② 積穴住居跡

SB 8 (第33・41図)

C 6グリッドで検出された方形の土坑である。柱穴、炉跡は確認できなかったが、小型住居のため無

第6表 堀立柱植物跡柱穴計測表

| 遺構名 | SP番号 | グリッド | 直角(cm) | 深さ(cm) | 性 土 | 備考 |
|---------|-------|------|--------|--------|---------|------|
| SH1 | SP35 | B 8 | 36×22 | 24 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP36 | B 8 | 23 | 38 | 2.5Y2/1 | 褐色土 |
| | SP43 | B 8 | 33×26 | 16 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP45 | B 8 | 35×28 | 21 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP46 | B 8 | 46×33 | 20 | 2.5Y2/1 | 褐色土 |
| SH1・SH2 | SP41 | B 8 | 37×25 | 32 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP47 | B 8 | 31×24 | 19 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| SH2 | SP36 | B 8 | 24 | 37 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP39 | B 8 | 24×20 | 36 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP44 | B 8 | 24×20 | 19 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP46 | B 8 | 23 | 15 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| SH3 | SP37 | B 8 | 21 | 19 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP40 | B 8 | 18 | 13 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP42 | B 8 | 20 | 16 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| SH4 | SP67 | C 6 | 27 | 25 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP68 | C 6 | 26 | 29 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP69 | C 6 | 26 | 28 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP70 | C 6 | 25 | 22 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP71 | C 6 | 25 | 16 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP72 | C 6 | 36 | 30 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP73 | C 6 | 30 | 36 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP178 | C 6 | 28 | 29 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| SH5 | SP77 | C 6 | 34 | 14 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP157 | D 6 | 28 | 48 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP158 | D 6 | 30 | 31 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP174 | D 6 | 27 | 33 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP175 | D 6 | 26 | 13 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP176 | D 6 | 34 | 53 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| SH6 | SP191 | C 4 | 38×34 | 38 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP192 | C 4 | 39×33 | 35 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP193 | C 4 | 30×26 | 33 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP194 | C 4 | 32 | 51 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP196 | B 4 | 37×32 | 16 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP197 | C 4 | 35×33 | 28 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP198 | C 4 | 30 | 19 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP199 | C 4 | 34 | 24 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| SH7 | SP25 | A 7 | 46 | 21 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP26 | A 7 | 46 | 40 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP28 | A 7 | 38 | 36 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP29 | B 7 | 32 | 32 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP125 | A 7 | 42×34 | 21 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| | SP127 | B 7 | 40 | 19 | 2.5Y2/1 | 黒色土 |
| SH8 | SP126 | B 2 | 37 | 18 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP128 | B 2 | 29 | 13 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP130 | E 2 | 34 | 17 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP131 | E 2 | 30×25 | 12 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP133 | B 2 | 28 | 8 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |
| | SP135 | E 2 | 30 | 17 | 10Y3/3 | 暗褐色土 |



第41図 竪穴住居跡S B 8及び出土遺物

掘り込まれたものと思われる。内部には灰釉陶器の碗と壺が端え付けられる形で出土した。壺の底部は、小土坑の底面からおよそ6cm浮いた位置にある。おそらく、小土坑を掘り込んだ際の廃土に、壺の底部を強く差し込んで端え付けたのであろう。壺は内面に骨粉と思われる白い粉が若干量付着していたため、咸骨器に使用されたものと考えられる。碗は逆位で壺の蓋として、しっかりととかぶせられていた。また、壺の内部には蓋である灰釉碗を染み透った少量の水が溜まっていた。

59は蓋として利用されていた灰釉陶器の壺である。丁寧に作られているが、やや歓賞の焼き上がりであるため、出土した時点では全体にひび割れを生じていた。口径14.6cm、底径6.8cm、高さ5.0cmを測り、底部から口縁にかけてやや内窓気味に立ち上がり、口縁部を外側に挽いて、縁部を丸く取める。高台は比較的高く、残面が舌状になるものである。胎土は3mm以上の礫を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。体部内外面はナデ調整で仕上げられている。高台内側は貼り付け時のナデが認められるが、厚誠しているため切り離し痕は不明である。

60は咸骨器に利用されていた灰釉陶器の壺である。口径8.7cm、底径6.4cm、器高13.4cm、脚部最大径10.7cmの完形である。胎土は密であるが、1cm大小の小礫を頻繁に含んでいる。紐輪積みで整形され、全体をナデで調整している。覗くきれいに焼きあがっており、体部右側の口縁から肩部にかけて自然釉がかかっている。口縁はラッパ状に開き、頸部内面の中程に明瞭な接合痕が、頸部末端の外面に接合部の

主性の可能性もあると考え、竪穴住居と理解した。覆土は褐色土である。規模は、総2.25m、横2.66m、床面積は5.935m²を割り、南北を主軸とすると、N 22°Wを指向する。南西隅の外側に張り出した位置に、長さ1.15m、幅1.35mを測る楕円形の土坑S P 5が掘られている。東側の肩には上面が平らな石が置かれていた。

遺物は、覆土から上層が出土しているが、きわめて少ない。

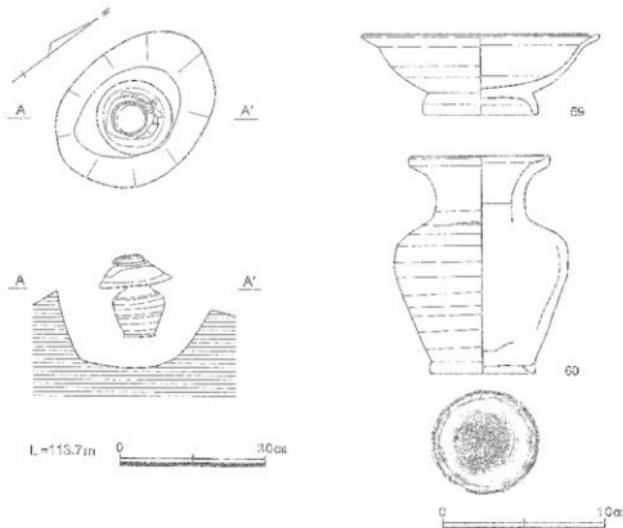
17は土師器の施口縁部である。口径16.8cm、残存高4.6cmを測り、胎土は緻密で褐色整子を含み、浅黄褐色を呈してよく焼きあがっている。調整は内外面ともにナデが施される。外面に灰化物が付着している。

56は大型で扁平な砂岩の自然礫を素材とした台石である。正面部に摩耗痕が認められる。南西隅で検出された土坑の上部から出土しているため、別時期の可能性がある。

③ 土坑

S P 181 (第42図)

A 7グリッドで検出された、長径37cm、短径27cmと楕円形の開口を持つ深さ15cmほどの小土坑である。覆土は黒褐色土であったことから、元来は現地表に近い位置から



第42図 土坑SP181及び出土遺物



第43図 溝SD8出土遺物

はがれに起因するひび割れがみられる。高台はやや丸みを帯びた三角形の付け高台で、貼り付け時にナデが施される。高台内側底部には回転糸切り痕が認められる。

これらの灰釉陶器はいずれも、旗指古窯跡群で焼成されたものと見われる。高台を高くしつらえる澁の綻は、旗指22号窯以降に現れる。口唇部を上方に垂直に掲き上げる臺は、旗指20号窯陶器群出土遺物の中にみられる。したがって、SP181に埋納されていた灰釉陶器は、いずれも灰釉陶器最終期の、11世紀末ごろのものと考えられる。

④ 溝

SD 2・3・8・9 (第9・43図)

溝SD 8は尾根の頂部付近をC～E列にかけて南北に掘られた基幹となる溝であり、B・C5グリッドでこれに直交するSD 2・3とともに何らかの区画を形成するものと思われる。SD 8からはⅢ期-Ⅰ～Ⅱの山茶碗が、SD 2からもほぼ同時期の山茶碗片が出土しているため、12世紀の遺構と考えられる。

S D 8は、C 7グリッドからE 2グリッドにかけてN-24°-W方向にはば直線状に掘られている。規模は幅50~90cm、深さ20~30cmを測り、C 5・6グリッドの境以南では場所によって70cm前後の深さとなる。C 5・6グリッドの境に当たるS D 3と交差する付近から、覆土の色調が異なっている。このことは、元來T字形を呈する区画溝が、中世以降のいわゆるの時期にS D 3を含むU字形の区画溝として改修されたことを示唆している。

断面形状は、上位に当たるC 7グリッドからC 6グリッド南端では、底が平らなU字型の断面形を呈し、黒褐色土を覆土とする。C 5グリッド北端にあたるS D 3との合流点から南にかけて一段深くなり、底の丸いV字型の断面形となる。覆土は下位に疊が混ざった暗褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土である。

遺物は上位の部分の覆土上半から東遠系の山茶輪類が出土している。

61、62はⅢ期-1～2にあたる山茶輪の底部片である。底部外面は斜切り未調整で、断面が三角形状～台形状の低い高台を貼り付ける。

63は小皿である。Ⅲ期-1にあたるものである。

S D 2とS D 3は、ともにN-85°-E方向を指向するため同一の意図で掘られたものと考えたが、S D 2部分がS D 3部分に比べ深いため、便宜上別遺構とした。

S D 2は、長さ5m、幅70cm前後、深さ30~50cmを測り、東に行くにつれて深くなる傾向がある。断面形状は底が平らなU字型で、覆土は下位に疊が混ざる黒褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土が乗る。覆土から、山茶輪の細片が出土している。

S D 3は、長さ3.9m、幅80cm前後、深さ20cmを測る、底が平らな浅い溝状造構で、覆土は黒褐色土である。東端でS D 8に連結する。遺物は出土していない。

S D 9は、C 4・5グリッドで検出され、N-5°-Eを指向する。規模は長さ5.5m、幅50cm前後、深さ10cm前後を測る。断面形状はやや緩いV字型で、覆土は下位に疊が混ざる黒褐色土、上位に耕作土に近似した黒ボクに有機質が混入した黒褐色土とS D 2に類似する。遺物は出土していない。なお、北西側に派生する短形の部分は別遺構の可能性もあるが、切り合等による判別はできなかった。

(4) 遺構外出土の遺物

遺構外からは、縄文時代から近世にいたる遺物が13箇分出土している。縄文時代の遺物には土器、石器、石製品があり、甕文時代の遺構が検出されたD・C 3～4グリッド付近のほか、畠没谷中の暗褐色土から出土している。特に打製石斧の出土量が多く、目立つ存在である。弥生時代の遺物は中期後半～後期の土器、石器である。土器はいわゆる細片のため同化できたものはないが、石器の中には磨製石器がみられる。古代の遺物は、須恵器と土師器である。須恵器の中には遺跡周辺であまり出土例の見られない双耳壺や壺があり、一定の機能を有する集落の存在を感じさせる。中世の遺物は、13世紀の山茶輪類が主体で、常滑製品も若干見られる。また、1点のみであるが非ロクロ系のかわらけが存在することも興味深い。これら古代～中世の遺物は、尾根部を中心とした耕作土層直下の黒色土から出土している。近世の遺物は、志戸呂焼とかわらけである。なお、確認調査の際に出土した遺物については、帰属する遺構が確定できないので、遺構外出土遺物と同等に取り扱う。

① 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は土器と石器、石製品である。土器は中期にあたるものが多く、後期、晩期が少量出土している。石器は第44図に示したように、打製石斧が埋没谷を中心に多量に出土していることが特徴的である。

土器（第45図64～84）

64は、B 5 グリッドの黒色土下層から出土した中期にあたると思われる深鉢体部片である。風化して表面が剥落しているため、調整方法や文様は明らかでない。胎土は雲母、細砂、長石を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

65は、A 6 グリッドの黒色土上層から出土した中期の五領ヶ台式併行期の北裏C式にあたる深鉢口縁部である。口縁部の下位を肥厚させ、連続の爪形文を施している。胎土は長石、細砂を含み、にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

66は、B 2 グリッドの黒色土上層から出土した中期の五領ヶ台式併行期にあたる深鉢口縁部である。波状口縁を構成する。胎土は細砂、長石を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

67は、B 3 グリッドの暗褐色土から出土した中期の五領ヶ台式併行期にあたる深鉢口縁部である。緩やかな波状口縁を構成するもので、内側に肥厚させた口唇部直下の口縁部外面にR L繩文を施し、ヘラ状工具や竹管状工具で沈線を施している。また、内面にもR L繩文をつける。胎土は石英、長石を含み、にぶい橙色を呈してよく焼きあがっている。

68は、B 4 グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢口縁部である。風化して、表面の剥落が著しいが、内側に肥厚させた口唇部外側には竹管状工具で口縁に平行する沈線を施し、以下に何らかの文様で充填された沈線による区画が施される。胎土は雲母、石英、長石を含み、暗褐色を呈してよく焼きあがっている。

69は、B 4 グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢口縁部である。口唇部の直下には、竹管状工具による2条の平行する沈線を施す。風化のため、体部の調整、文様は不明瞭である。胎土は細砂、長石を含み、褐色～暗褐色を呈してよく焼きあがっている。

70は、A 5 グリッドの黒色土から出土した中期以降の深鉢口縁部である。口縁部にそって横位の整形痕が観察される。胎土は長石を含み、にぶい赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

71は、B 5 グリッドの暗褐色土から出土した中期末と思われる深鉢口縁部である。風化のため、体部の調整、文様は不明瞭である。胎土は長石を含み、褐色を呈してよく焼きあがっている。

72は、B 5 グリッドの暗褐色土から出土した中期初頭の深鉢口縁部である。先端が三角となるヘラ状工具を用いて横位に連続する刺突を施す。胎土は石英、長石、雲母を含み、にぶい赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

73は、確認調査で出土した中期初頭の五領ヶ台式併行期の深鉢口縁部である。口唇部外面に隆起帯を施し、その下位に、竹管を用いて継位の刻みを入れて矢羽根状の沈線を構成する。胎土は2mm以下の長石を含み、明赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

74は、B 3 グリッドの暗褐色土から出土した中期と思われる深鉢体部片である。半截竹管状工具による緩く平行する沈線で横位の区画を描き、内部に同様な工具の先端曲面を斜めに押し付けてできる三角形状の文様を凍結して配置する。胎土は石英、雲母、長石を含み、にぶい褐色を呈してよく焼きあがっている。

75は、B 4 グリッドの暗褐色土から出土した中期の五領ヶ台式併行期の深鉢体部片である。半截竹管状工具による区画の中に、R L繩文を施し、さらにヘラ状工具で刻みをつける。胎土は石英、長石、雲母を含み、灰褐色を呈してよく焼きあがっている。

76は、B 5 グリッドの黒色土から出土した後期～晩期の深鉢体部片である。外面には斜位に擦痕を施している。胎土は細砂を含み、にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

77は、B 4 グリッドの黒色土下層から出土した中期の深鉢体部である。風化により調整、文様は不明瞭であるが、横位に粘土紐を貼り付け、幅1mm前後の突帯を形成する。その下には、突帯に平行して竹管による沈線を施している。胎土は長石、細砂を含み、赤褐色を呈してよく焼きあがっている。

78は、B 4 グリッドの黒色土層から出土した中期と思われる深鉢部である。風化して表面が剥落し、礫砂、文様は明らかでない。胎土は雲母、粗砂、長石を含み、暗赤色を呈しよく焼きあがっている。

79は、A 4 グリッドの黒色土層から出土した中期初頭と思われる深鉢口縁部である。外面には連続する爪形文を少なくとも2段にわたって付けている。胎土は長石、石英、雲母を含み、明褐色を呈しよく焼きあがる。

80は、A 7 グリッドの褐色土から出土した中期の深鉢体部である。ヘラ状工具の刺突による縦位の細かな刻みを連続してつけた下位に、葉線状の沈線を施す。胎土は直径1.5mm前後の砂粒と石英を含み、灰褐色～褐色を呈しよく焼きあがっている。

81は、C 5 グリッドの橙褐色層の直上から出土した後期の深鉢体部である。無文であり、斜位の擦痕が施される。胎土は細砂を多量に含み、黒褐色～灰褐色を呈してよく焼きあがっている。

82は、C 7 グリッドの褐色土から出土した晩期と思われる深鉢体部である。幅5mm程度の沈線区画中を繩文で埋める。胎土は石英、長石を含み、黒褐色～にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

83は、B 3 グリッドの黒色土から出土した晚期の大洞B C式併行期の深鉢口縁部である。口縁に沿う2条の沈線区画の間を竹管による2列の連続した刺突で埋め、口縁部以下内外面に横位と斜位の余痕を施す。胎土は長石、粗砂を含み、にぶい赤褐色を呈しよく焼きあがる。SB11出土の26(第25図)と同一個体である。

84は、C 6 グリッドの褐色土から出土した晩期の大洞B C式併行期の深鉢口縁部である。口唇部に平行する沈線を施した下位に、さらに長方形状の沈線区画を設け、内側に繩文を施す。胎土は長石、雲母、粗砂を含み、にぶい黄褐色を呈してよく焼きあがっている。

石器・石製品 (第47～58図125～130、132、134～136、138～144、158～170、172～186、190～193、195～198、200～207)

打製石斧 (158～170、172～186、190～193、195～198、200～207)

ほとんどがBグリッド列の埋没谷の暗褐色土層から出土した。後・晩期を主体とするものと思われる。完形品は10点で、他は基部の欠損、基部や刃部の断片である。泥岩、凝灰岩、頁岩、砂岩が用いられ、泥岩の比率が他よりも多い。原礫面を残す例が多いことから、周囲で採集できる自然礫の表面を打ち欠いて得た調片を素材として用いていることがわかる。

これらは形態と調整方法から、①短冊形を呈し、両面の側縁から細かな調整を加え片面に原礫面を残すもの (158～170、172～174、179、180)、②楔形を呈し、両面の側縁から細かな調整を加え片面に原礫面を残すもの (175～178)、③短冊形～円形を呈し、片面の側縁から細かい調整を加え片面に原礫面のすべてを残すもの (181～185)、④短冊形を呈し、側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後、側縁に細かい調整を加えるもの (186、190～198、200、201)、⑤楔形を呈し、側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後側縁に細かい調整を加えるもの (202～205、207)、⑥分離形を呈し側縁からの広い剥離により原礫面をほとんどあるいはすべて取り去った後側縁に細かい調整を加えるもの (206) がある。形態的には短冊形を呈するものがもっとも普遍的に用いられている。

もっとも大きなものは180であり、もっとも小さなものは158、179、198などである。大きなものは使用に応じて刃部を再調整しながら次第に小さくなつてゆくものと思われる。

石錐 (143、144)

いずれもB 3 グリッドの黒色土層から出土した打製石錐である。石材は143が凝灰岩、144がチャートである。143はほぼ完形で、刃部に繊細剥離痕が見られ、先端が摩耗している。144は刃部が折れて失われている。

石鏡 (136、138~142)

すべてBグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材はすべて凝灰岩である。縦形が2点、横形が4点であり、うち3点が完形品である。141は被熱しており表面に原礫面を広く残す。刃部に使用痕と思われる擦痕が無数に付く。

打製石鏡 (125~130、132、134、135)

ほとんどがBグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材は凝灰岩を用いる例が多いが、泥岩、チャート、黒曜石も少量用いられる。形態のわかるものはすべて凹基式で、5点が完形品である。129は画面の中央部に島状の瘤がある。127のみが長さ3.71cm、重量2.90gと細身で長く大型である。128は薄い剥片の両側縁に細かな剥離を加えることによって形作られる。

スクレイパー (145~147、149~154)

ほとんどがBグリッド列の埋没谷の土層から出土している。石材は泥岩、チャート、頁岩が用いられる。縦長剥片の側縁に細かな彫整を施して刃部を作成するものが主体である。

石鎌 (208~230)

出土した石器の中で最も数が多く、23点を図化して掲載した。ほとんどがBグリッド列の埋没谷を中心とする位置の黒色土あるいは暗褐色土から出土した。石材は泥岩もしくは砂岩の扁平な梢円形の礫を素材とし、その両端を打ち欠いて形作る。ほとんどが50g以下の軽いものであり、最大は217の77.5gとなる。

② 弓生時代の遺物

弥生時代の遺物は、石器が主体である。住居と同時期の中期後半～後期のものと考えられる

磨製石鏡 (第48図155、156)

155はE7グリッドの黒色土から出土した。石材は緑色凝灰岩である。凹基式で、ほぼ完形である。基部には充貫洞であるが、穿孔の痕が両面ともに2ヶ所ずつあり、有孔磨製石鏡といえる。長さは5.17cm、幅2.32cm、厚さ0.35cm、重さ4.58gである。

156はE7グリッドの暗褐色土から出土した。石材は泥岩で、抉りを入れることにより基部を作り出す。

磨製石斧 (第48図157)

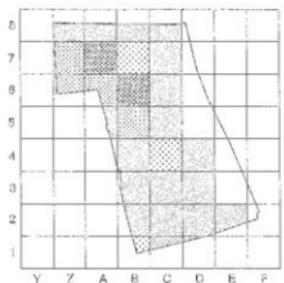
157はB2グリッドの暗褐色土層から出土した泥岩製の短冊形の磨製石斧である。基部が欠損している。長さ6.71cm、幅4.94cm、厚さ0.99cmである。

敲石 (第57・58図231~238)

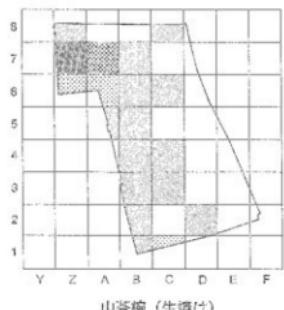
B4・5グリッドの暗褐色土から出土した。石材はすべて砂岩であり、梢円状、扁平梢円状、円状の確認素材に分類できる。231は主面部に敲打痕の集中が見られ、側面にも敲打痕が認められる。232は端部及び肩縁部に敲打痕が認められた。233、234は主面部に敲打痕の集中が見られる。235は上下端に敲打痕が認められる。236~238は敲打痕が観察されないが、形状や大きさから敲石の素材とし、ここで取り扱うこととした。

③ 古墳時代～古代の遺物

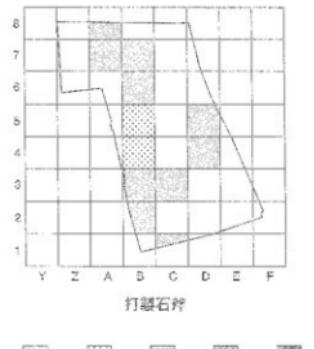
古墳時代の遺物は須恵器である。7世紀後半のものと思われる壺蓋(35)やフラスコ型瓶(91)が該当する。古代の遺物は、須恵器と灰釉陶器、土師器(86~89、92~96)である。須恵器は湖西産と思われるもので8世紀代が主体となり、壺蓋、壺身、双耳壺、罐、長頸瓶、甕などがある。土師器は甕であり、須恵器と同様に8世紀代にあたる。灰釉陶器は長頸瓶(90)がこれにあたり、9世紀後半のものと思われる。



山茶椀



山茶椀(生焼け)



打鍛石斧



第44図 主要遺物の分布状況

85は、B 6・7グリッドの黒色土層から出土した湖西産と思われる須恵器の环蓋である。全体的に回転台によるナデで整形され、紐と受部は貼り付けられる。上面に自然釉がかかるため、紐の周りのヘラ削りは観察できない。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

86は、B 7グリッドの黒色土層から出土した湖西産と思われる須恵器の环蓋である。全体的に回転台によるナデで整形される。口部のかえりは顎落ではない。頂部と紐は失われている。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

87はZ 6グリッド、88はZ 8グリッドの黒色土層から出土した土師器の环である。两者ともに近似した形状で、全体的にナデで整形される。胎土はきわめて目が細かく、赤色粒子を含むほかは含有物がない。硬質で淡い褐色に焼きあがる。

89は、B 8グリッドの黒色土から出土した湖西産と思われる須恵器の長颈瓶である。全体的に回転台によるナデで整形される。

90は、C 7グリッドの褐色土から出土した灰釉陶器の長颈瓶の脚部である。外面には自然釉がかかり、下位にヘラ状工具を用いて段を付ける。内面には輪廻痕が残り、端部には浅いスル状のくぼみが残る。胎土は緻密で微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰色に焼きあがる。

91は、B 7グリッドの黒色土・褐色土から出土した湖西産と思われる須恵器のフランコ型瓶である。ナデで整形された後、端部のみを回転ヘラ削りで調整する。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で灰褐色に焼きあがる。

92は、B 5グリッドの黒色土から出土した須恵器双耳环の耳である。耳の本体に、ヘラ状工具で面取りされた板状の突起を貼り付ける。胎土は緻密で微細な長石粒が多く含まれる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

93は、B 8グリッドの褐色土から出土した、壺の本体である。本体の過半を回転ヘラ削りで調整した後、注口部をナデで貼り付ける。注口は、外側から棒状の工具を用いて穿孔しているため、内部に若干の粘土がはみ出している。胎土は緻密で、微細な長石粒が多く含まれる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

94は、A 7 グリッドの黒色土から出土した、湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形される。口唇部には縁帶が貼り付けられる。また、内面には薄く自然釉がかかる。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

95は、C 8 グリッドの褐色土から出土した、湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形された後、上位に2条の平行する沈線を、下位に2種の敲き具を絞くあてがうことによる羽状の圧痕を付ける。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが多く現れる。硬質で暗灰色に焼きあがる。

96は、B 7 グリッドの黒色土・褐色土から出土した湖西産と思われる須恵器の甕口縁部である。全体的にナデで整形された後、半ばと思われる位置に1条の沈線を付ける。口唇部は斜め内側に挽き出され、外面向き縁帶を貼り付ける。胎土は緻密で、長石と鉄分が含まれ、表面に黒色の鉄分の吹き出しが現れる。硬質で灰色に焼きあがる。なお、外面には黒色に発色する鬼板が掛けられる。

97は、確認調査で出土した湖西産と思われる須恵器の坏身である。高台径は11.0cmを測る。底部を回転ヘラ削で平滑に整えた後、丁寧なナデにより高台を貼り付ける。体部内面は回転ナデ調整で仕上げられている。胎土は1mm以下の長石を微量に含み、硬質で灰黄色に焼きあがる。

④ 中世の遺物

中世の遺物は前期の山茶碗類を主体とするものであり、C 4～Z 7 グリッドにかけて濃密に分布する。これらは近在する横岡窯で焼成されたものと想われ、中期一・二(13世紀半ば前後)を中心とする。灰色～青灰色を呈し硬質に焼きあがるものと、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがるもの2種がある。特に後者はこれまで「生焼け」と称されてきた一群であるが、今回のように集落遺跡から小皿を主体に一定量が出土していることは、生産段階で土師質を指向した焼成状態であったことを示唆している。両者の出土位置は第44図に示したようにほぼ重複しており、各々が特に別の位置で使用された形跡はない。

98はA 6 グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径7.9cm、底径4.5cm、器高1.6cmを測る。内外面をナデ調整により、直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

99はB 2 グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径7.7cm、底径3.2cm、器高1.6cmを測る。体部内外面をナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。内面底部は意図的に丸く膨らめられている。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

100は、確認調査で出土した小皿である。底径は4.5cmを測る。外面は過半から口縁にかけて強いナデが施されるため、体部外面中位に明瞭な稜が生じている。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で、微細な長石粒と鉄分を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。

101は、Z 7 グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径6.4cm、底径3.1cm、器高2.0cmを測る。体部内外面をナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で少量化の橙色粒子、長石を含み、浅黄橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

102は、A 6 グリッドの黒色土から出土した小皿である。口径8.5cm、底径4.9cm、器高2.0cmを測る。体部内外面をナデ調整により、体部をいつたん柄方向に挽き出した後、口唇部にかけて直線状に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整であり、糸によって巻き込まれた紐状の粘土が付着する。胎土は橙色粒子を含み、橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

103は、確認調査で出土した小皿である。口径7.8cm、底径5.1cm、器高1.5cmを測る。体部の内外面を回転ナデ調整により、やや内湾気味に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は1mm以下の

長石、赤色粒子を微量に含み、橙色を呈してやや軟質に焼きあがる。

104は、確認調査で出土した小皿である。径7.5cm、底径4.0cm、壁高1.3cmを測る。きわめて扁平で、体部の内外面を回転ナデ調整により直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は2mm以下の赤色粒子、微砂粒を含み、にぶい橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

105は、確認調査で出土した小皿である。口径8.3cm、底径4.3cm、器高2.1cmを測る。体部の内外面を回転ナデ調整により直線的に立ち上げる。底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で1mm以下の鉄分を少量含み、吹き出しが多く認められる。灰色を呈し、硬質に焼きあがる。口縁部を中心に自然結がかかる。

106は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は5.3cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面が丸みを帯びた逆三角形状で、端部には軽度の凹痕が認められる。胎土は緻密で、やや青みを帯びた灰色を呈し硬質に焼きあがる。なお、内面は見込みの一一部を除いてほとんど磨り減らない。

107は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は5.8cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面が丸みを帯びた逆三角形状で、端部にはスココ状压痕が認められる。胎土は緻密で、黄灰色を呈し硬質に焼きあがる。なお、内面は磨り減らない。

108は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状で、端部を砾石で削取りする。胎土は緻密で、4mmの大いな小礫が微量混ざり、にぶい褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込み部分が摩滅する上、煤状の黒い付着物が認められる。

109は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかも軽くナデされる。高台は低くつぶれた幅広の付高台で、端部にはスココ状压痕が認められる。胎土は緻密で、3mm入の礫を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込み中央部が摩滅する。

110は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は7.2cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整される。断面逆三角形状の付高台の端部には、压痕はみられない。胎土は緻密で、2mmの大いな小礫が微量混じり、灰黄褐色を呈して硬質に焼きあがる。

111は、確認調査で出土した山茶碗である。高台径は7.2cmを測る。体部の内外面は回転ナデ調整により整形される。高台は断面逆三角形の付高台であり、端部にはスココ状压痕が認められる。胎土は緻密で、1mm以下の長石を含み、黄灰色を呈し硬質に焼きあがる。

112は、E 2 グリッドの褐色土から出土した山茶碗である。高台径は6.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状で、端部にはスココ状压痕が認められる。胎土は緻密で、微細な長石粒を多く含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は直径1cm程度の瘤状の粘土塊が付着するが、見込み一部が摩滅する。

113は、Z 7 グリッドの黒色土から出土した山茶碗である。高台径は7.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、糸切り未調整である。高台は断面逆三角形状である。胎土は緻密で、直径5mm程度の小礫を含み、灰色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込みの一部が摩滅する。なお、割れ口の底部付近には、器厚のほぼ半ばに接合痕が観察される。このことは、体部がひとつの粘土塊から挽き出されたのではなく、回転台上に据え置かれた粘土に異なる粘土を纏いだ上で整形されたことを示している。また、底部外面には墨書きが施されるが、

部分のため判読はできない。

114はZ 6・7グリッドの黒色土から出土した山茶碗である。底径7.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整されるほかは、余切り未調整である。高台はつぶれた断面形状を呈し、端部にスノコ状圧痕が認められる。胎土は緻密で砂粒、長石、橙色粒子を含み、橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

115はZ 7グリッドの黒色土から出土した無高台の山茶碗である。口径11.4cm、底径6.5cm、器高2.5cmを測る。口縁部外面をやや強くナデすることでわずかに外反させている。底部外面は回転糸切り未調整である。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

116は、Z 6・7グリッドの黒色土・褐色土から出土した山茶碗である。口径16.9cm、底径7cm、器高4.9cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部内面は高台際が貼り付けに伴ってナデ調整される。口唇部は内側を小さな突起状に肥厚させる。高台は断面逆三角形状である。胎土は緻密で長石を含み、灰褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面は見込の一部が摩滅する。

117はA 7グリッドの黒色土から出土した無高台の山茶碗である。底径7.6cmを測る。底部外面には回転糸切り痕が認められる。胎土は緻密で、浅黄橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

118は、C 1グリッドの褐色土から出土した無高台の山茶碗である。底径6.4cmを測る。体部内外面は回転ナデ調整により整形され、底部外面は回転糸切り未調整でスノコ状圧痕が認められる。内面は底部の外縁に沿って強いナデによる段が付く。胎土は緻密で長石、鉄分を含み、灰褐色を呈し硬質に焼きあがる。内面の見込は摩滅しない。

119は、排水中から採集された10型式にあたる常滑の窓口縁である。口唇部外面には折り返された扁平な縁帯が付く。内外面には自然釉が付着する。

121はA 7グリッドの黒色土から出土した12~13世紀前葉のものと思われる非ロクロ系のかわらけである。ほぼ完形であるが、全体的に脆く、摩滅が激しい。口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.6cmを測る。底部から口縁にかけてやや内湾気味に立ち上がる。口唇部に強い横ナデを施すため、体部遍半に割れを生じている。胎土は緻密で少量の橙色粒子を含み、橙色を呈し軟質に焼きあがる。

⑤ 近世の遺物

近世の遺物は、志戸呂焼とかわらけが出土している。

120は確認調査で出土した17世紀前葉にあたる志戸呂焼の香炉である。底径は13.4cmを測る。黒褐色の鉄釉が体部外面底部に施されている。全体的にロクロナデで整形した後、外面のみに回転ヘラ削りを施す。内面は露胎であるが、底部外縁に鉄釉が散っている。胎土は1~5mmの長石、1mm以下の赤色粒子を含み、露胎部分が褐色を呈して硬質に焼きあがる。

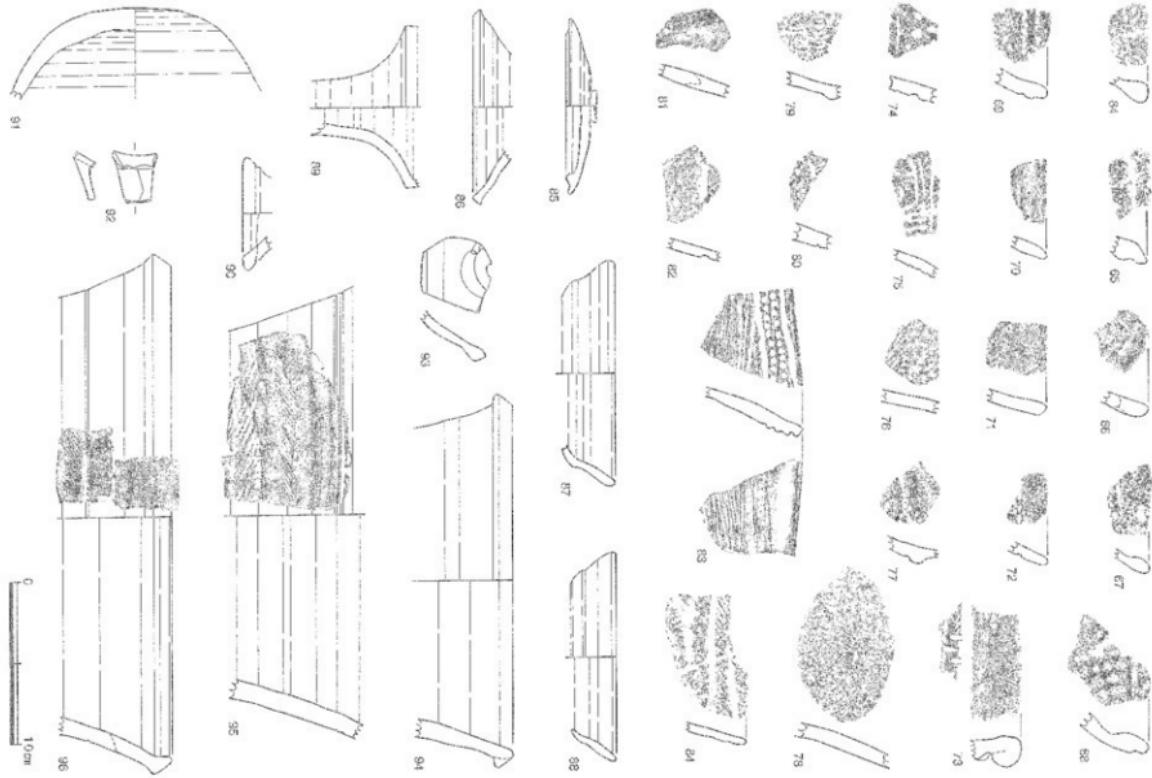
122はA 7グリッドの黒色土から出土したかわらけである。口径は11.8cm、底径6.6cm、器高2.6cmを測る。底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。体部内外面にナデ調整が施され、底部は回転糸切り痕がわずかに認められる。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、淡橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

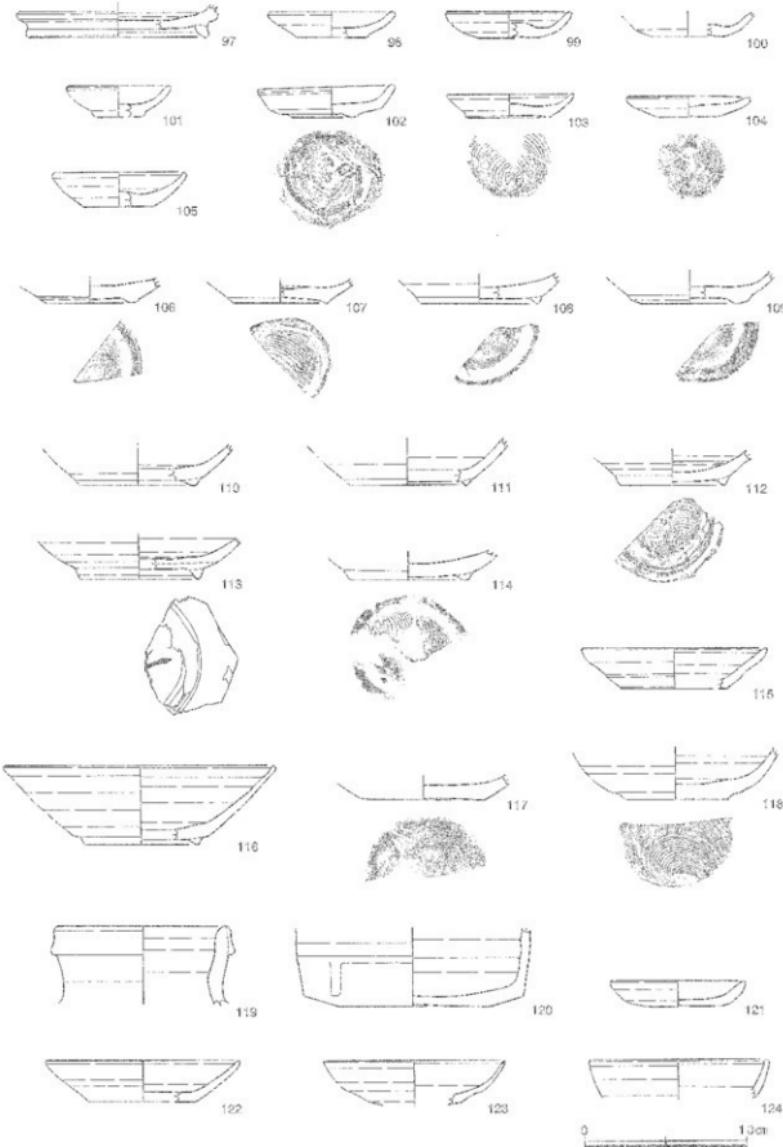
123はB 4グリッドの暗褐色土から出土したかわらけである。口径11.2cm、器高2.4cmを測る。底部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がる。体部内外面はナデ調整が施され、底部の切り離し痕は摩滅のため明確ではない。体部内面には煤が付着する。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、浅黄橙色を呈しやや軟質に焼きあがる。

124はA 6グリッドの黒色土から出土したかわらけである。口縁部から胴部が残存しており、口径11.1cmを測る。頭部から口縁にかけてやや内湾気味で、口縁外面端部はヨコナデされる。胎土は緻密で微量の橙色粒子を含み、橙色を呈してやや硬質に焼きあがる。

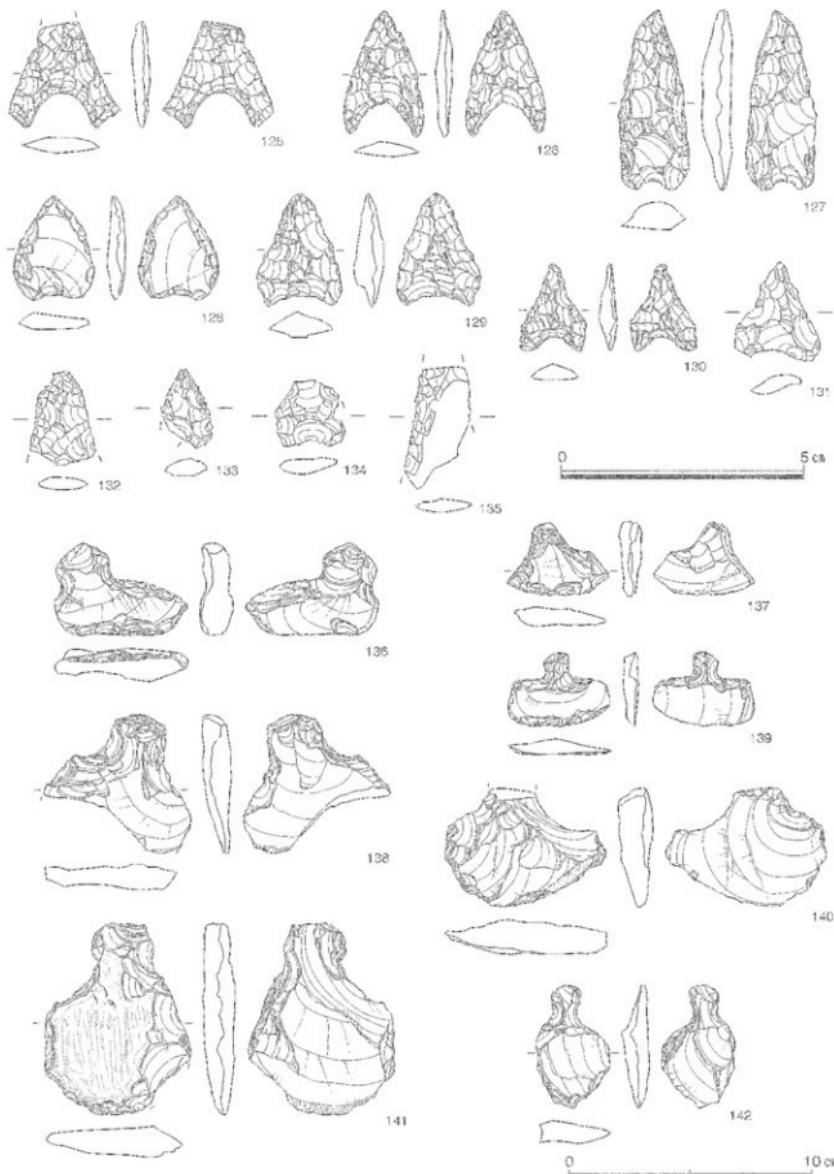
第55図 遷懶外出土遺物 1

-72-





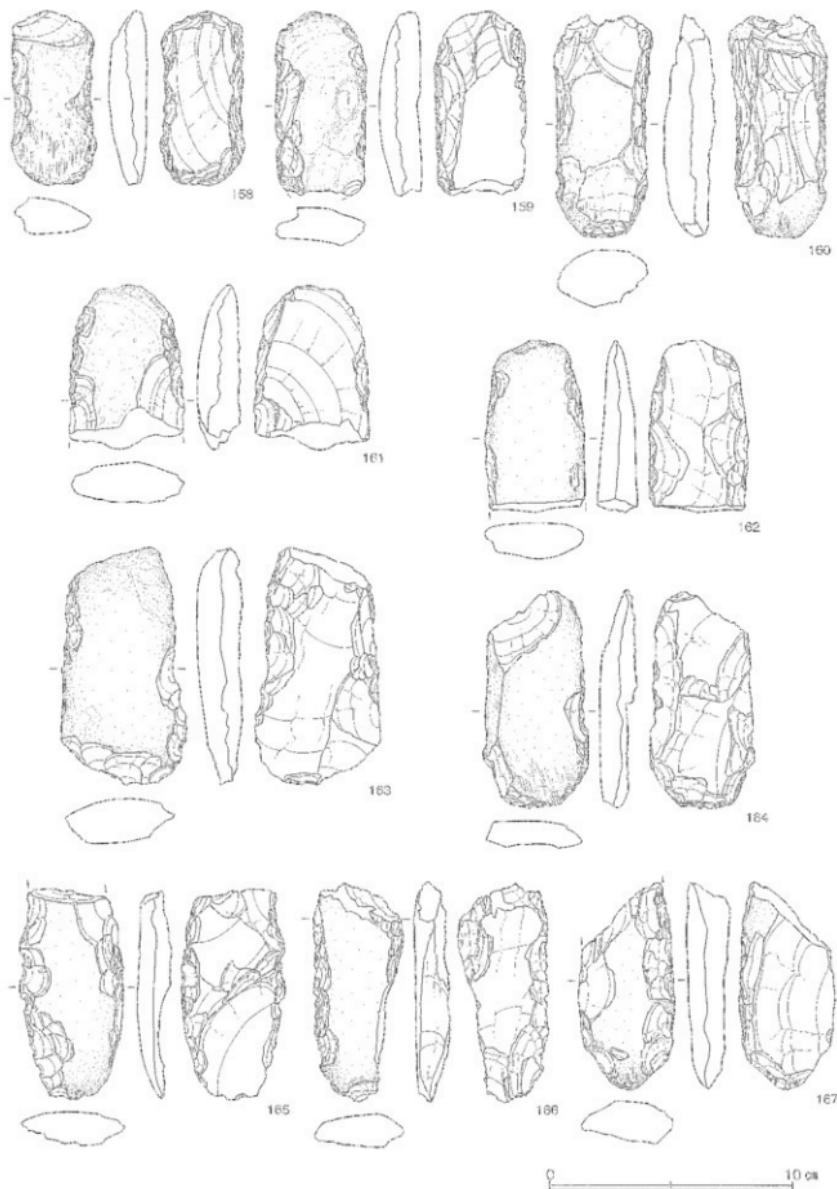
第46圖 遺構外出土遺物 2



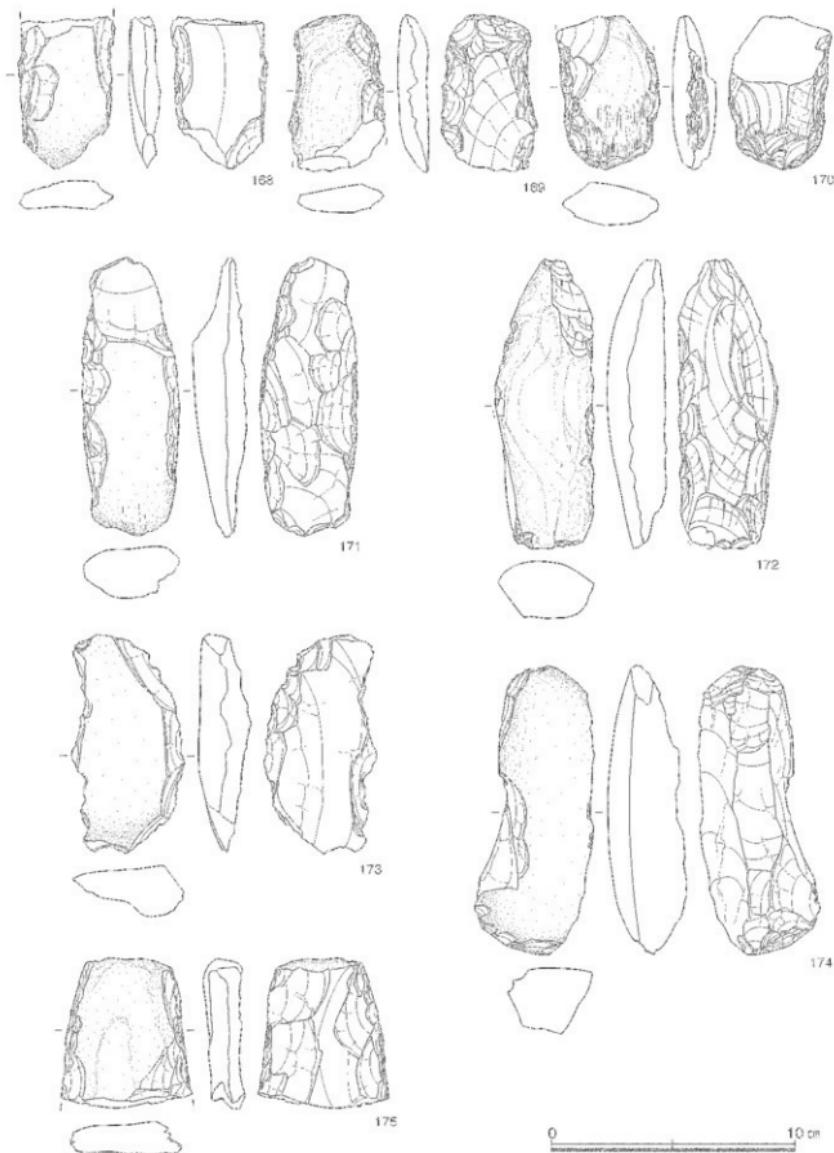
第47図 遺構外出土遺物3

器物图 遗物出土实物4

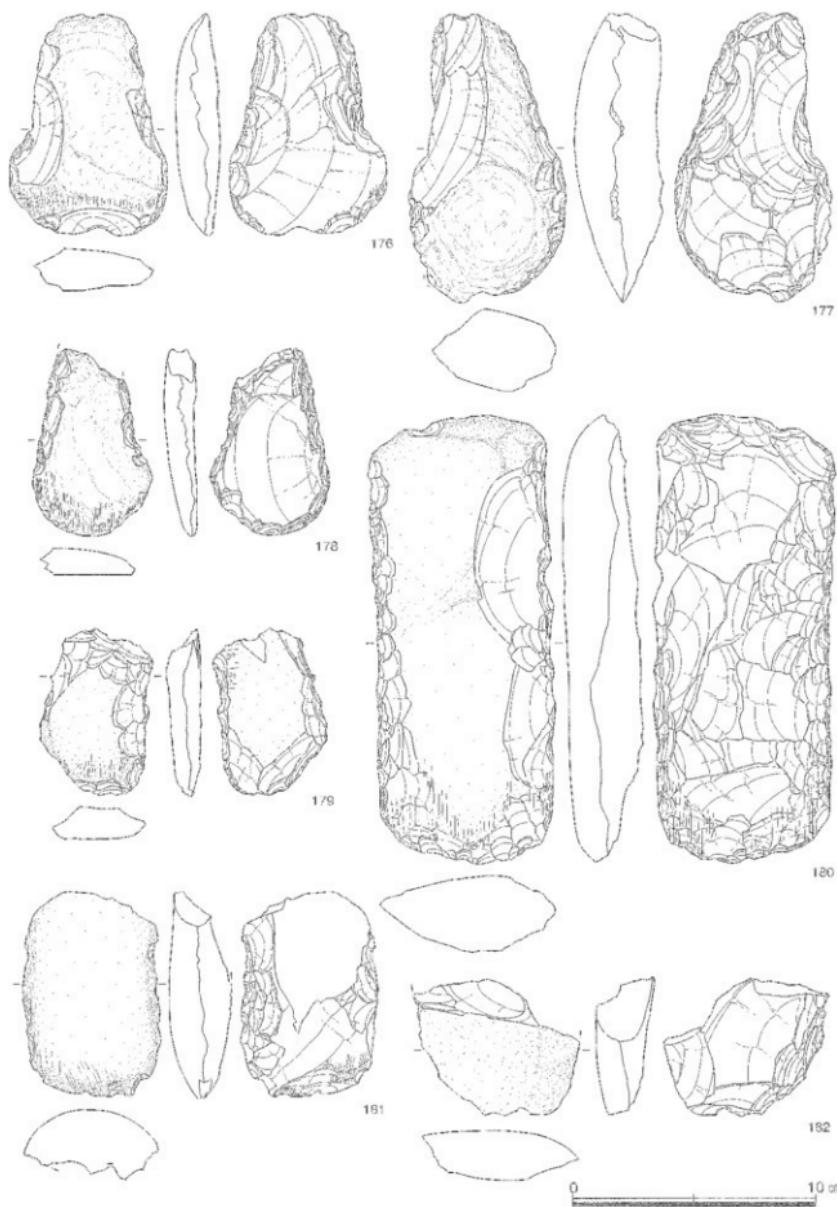




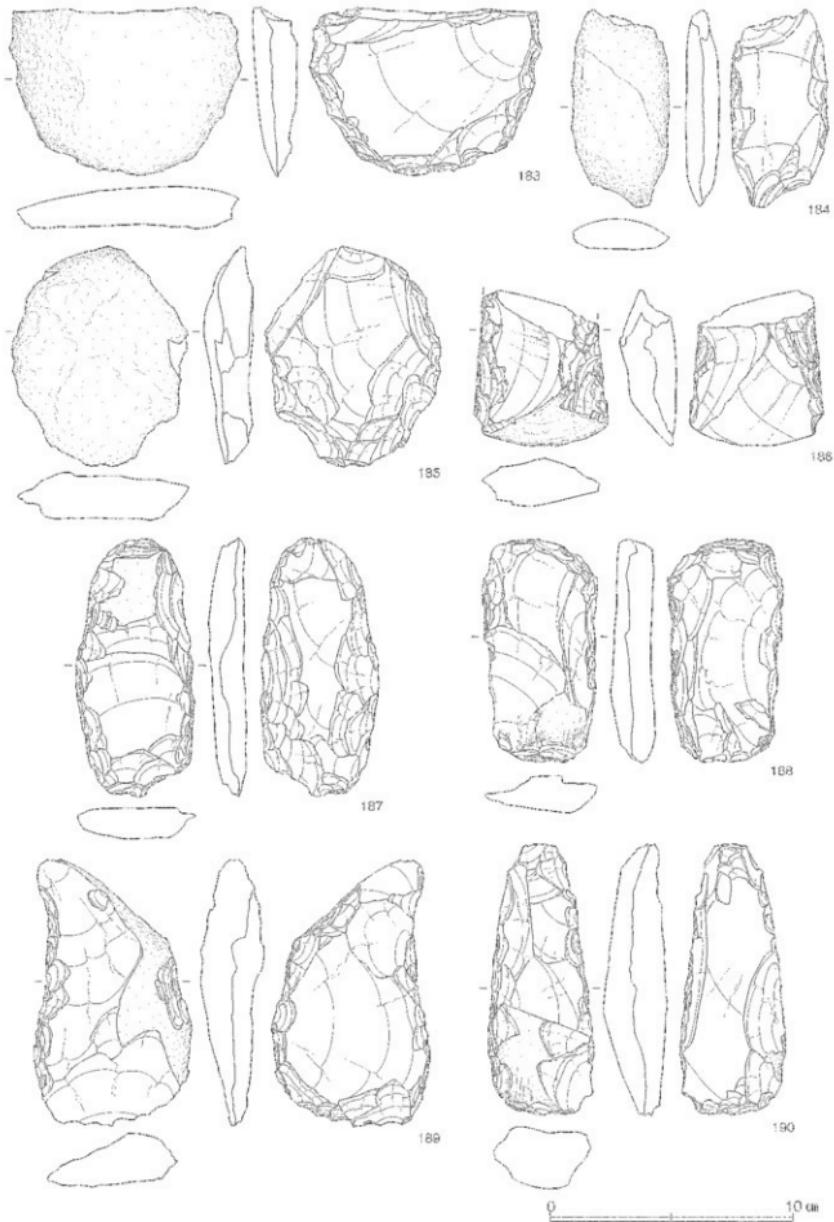
第49図 遺構外出土遺物5



第50圖 造勞外出土遺物 6



第51図 遺構外出土遺物 7



第52図 透様外出土遺物8

圖53 圖 義烏出土石器

0 10 cm

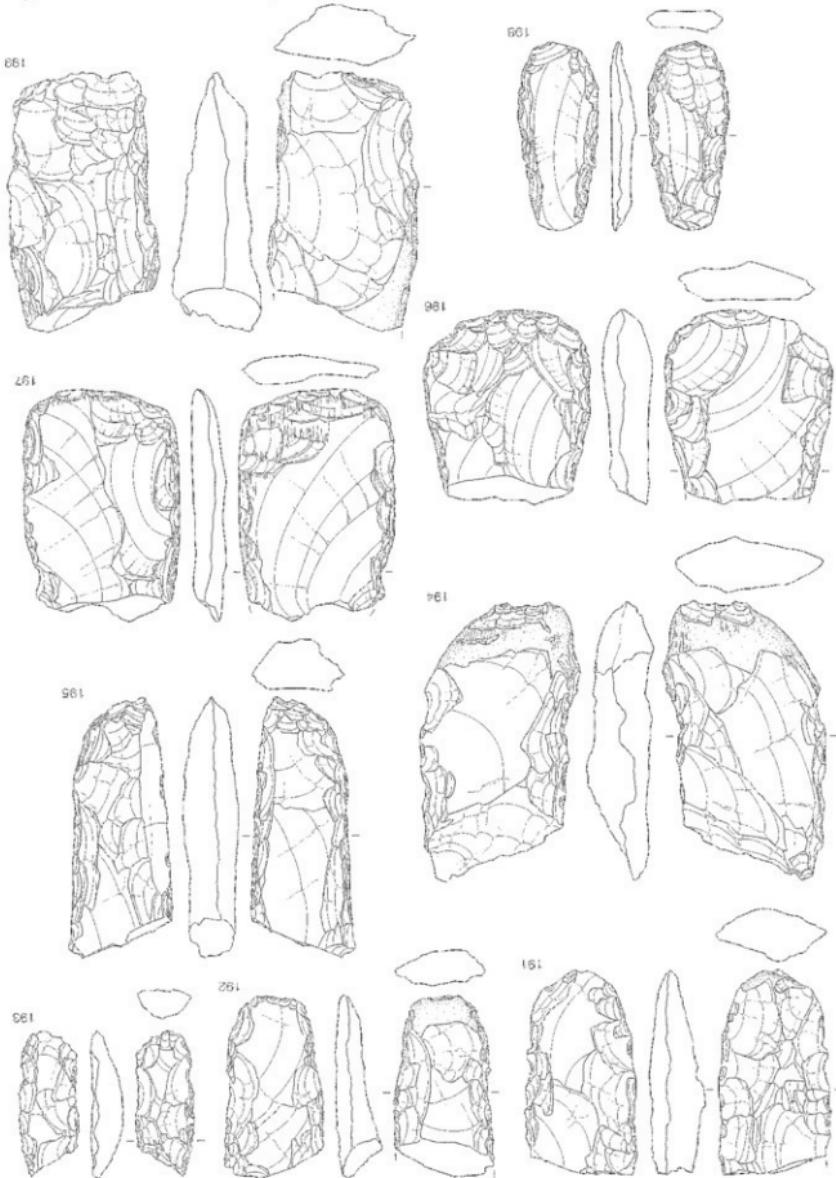
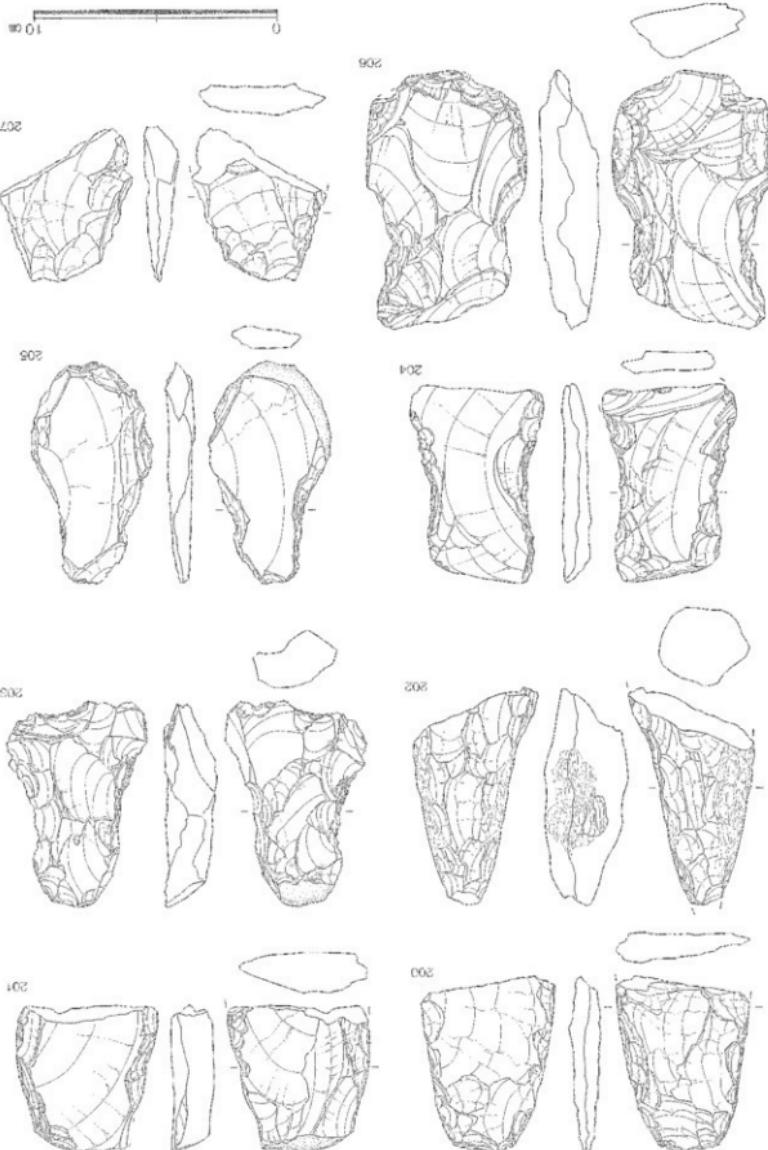
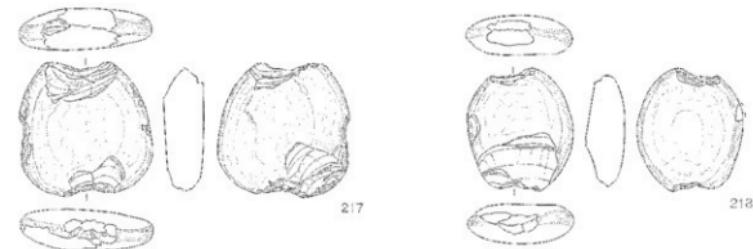
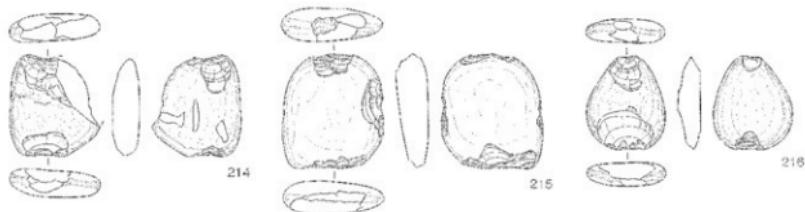
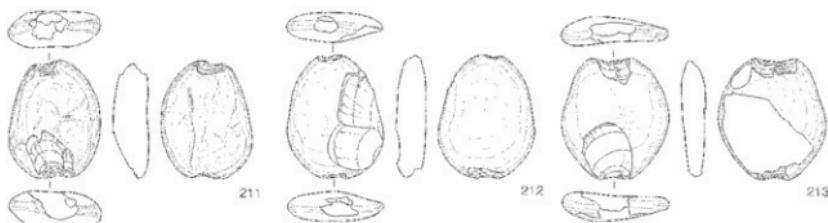
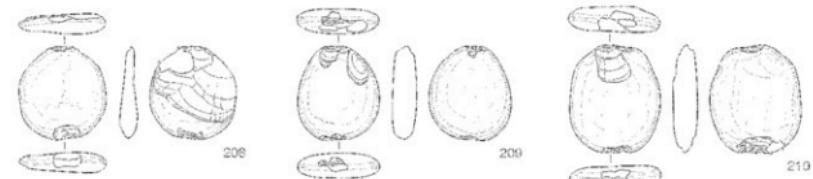


圖54 遺物外出土遺物10



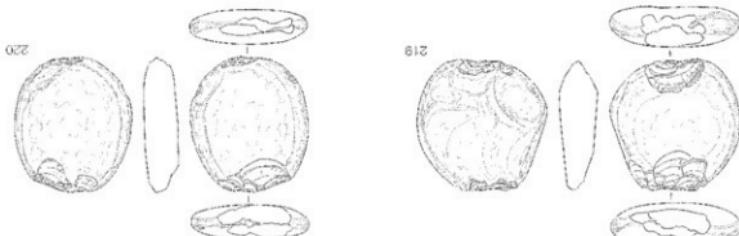
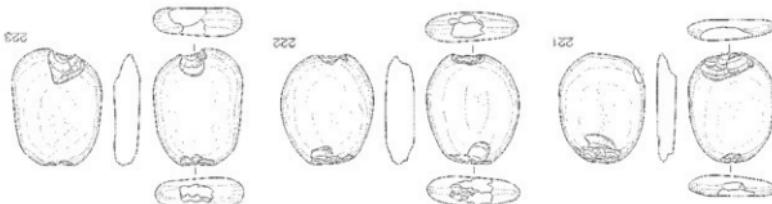
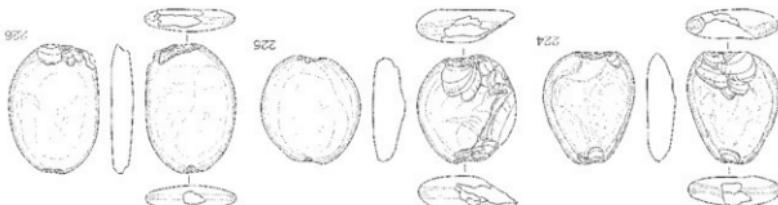
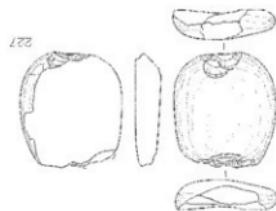
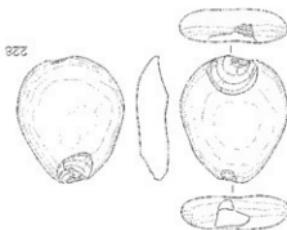


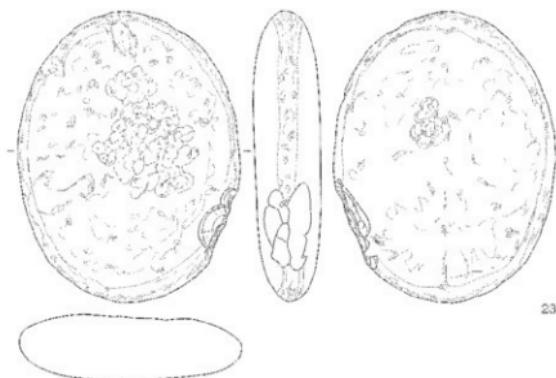
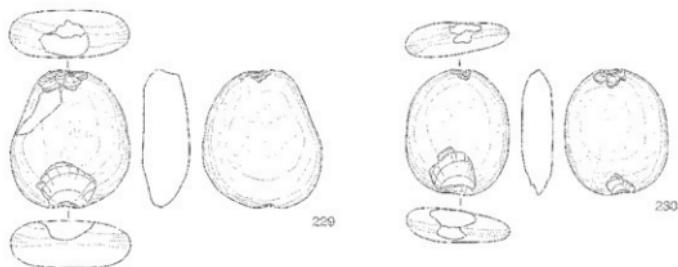
0 10 cm

第55図 遺構出土遺物11

图56图 遗漏外出土螺物种12

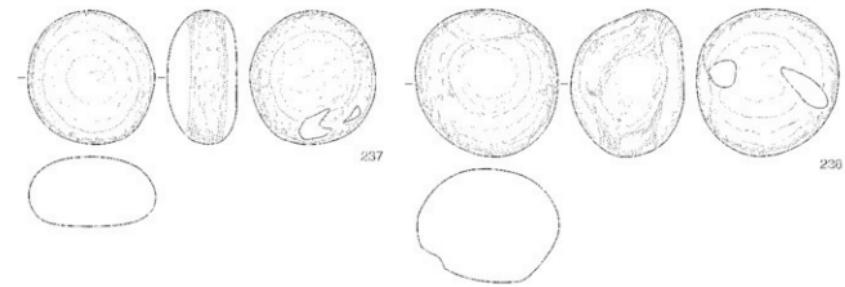
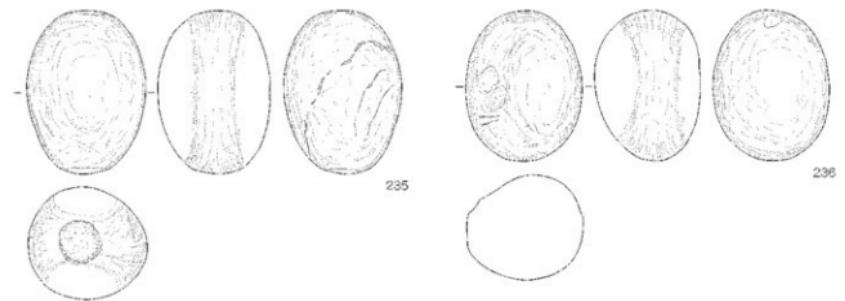
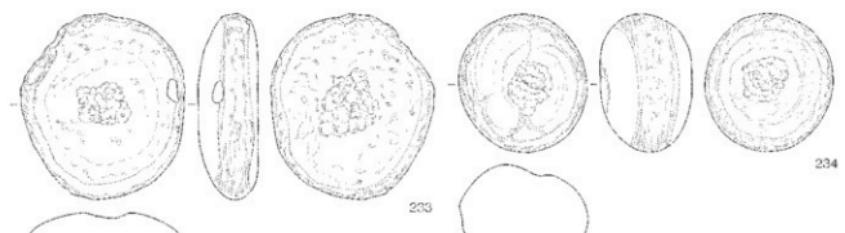
0 10 mm





0 10 cm

第57図 遺構出土遺物13



0 10 cm

第58図 遺構外出土遺物14

第7表 出土遺物鑑察表(土器・陶器1)

| 番号 | 種類 分類 | 出土状況 | 区画 | 編期 | 時期 | 色 酒 | 形态 | 既存率 | 口径 (cm) | 縦幅 (cm) | 高さ (cm) | 備考 |
|-------|----------------------|---------------|----|------|---------------|---------------------------------------|------------------------|--------|------------|------------|------------|-------------------|
| 1.11 | S.F.D 陶器上 | C 4 海文土型 | 南斜 | 中期後半 | 7.5W4/4E4側面 | 灰石、石英、砂質、褐色斑 子含む | 断面丸形 | 13.5 | | | | 吉賀文 R.L.横文 |
| 2.14 | S.B.1 黑色土 | フ 8 陶生土器 | 裏 | 中期後半 | 2.5W4/4に付い黃色 | 沙粒、小豆色粒子含む | 円筒形ひざかに 残存 | | | | | |
| 3.14 | S.B.2 黑色土 | A 8 陶生土器 | 蓋 | 小西後半 | 5W4/1底色 | 褐色斑子、沙微含む | 底面91/3 残存 | (5.4) | | | | |
| 4.14 | S.B.2 黑色土 | Z 7 陶生土器 | 蓋 | 牛頭後半 | 10W4/2K4青褐色 | 飛白粒子多數含む | 口部一側中段 1/2残存 | (13.7) | | | | くの字 小型 |
| 5.15 | S.B.3 黑色土 | C 8 陶生土器 | 蓋 | 中頭後半 | 10W4/3に付い黃褐色 | 黑色斑子、飛白、褐色斑 子含む | 底足はすかに 残存 | | | | | 跡跡再現文 四形 浮文 |
| 7.16 | S.B.4 黑色土 | C 8 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 2.5W7/2K4黄色 | 小頭、褐色斑子多數含む | 断面約1/2残存 | | | | | |
| 8.16 | S.B.4 黑色土 | C 8 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W5/4に付い黃褐色 | 呂形、褐色斑子多數含む | 1/2残存 | | | | | くの字 呂目 |
| 9.17 | S.B.5 黑色土 | C 7 陶生土器 | 底 | 鶴形 | 7.5W5/2K4青褐色 | 飛石、沙浪、褐色斑子含む | 内1/4残存 | (17.8) | | | | 羽状裏文 篠葉菊 文 |
| 10.17 | S.B.5 黑色土 | C 7 陶生土器 | 底 | 鶴形 | 10W5/2K4青褐色 | 沙粒、褐色斑子多數含む | 底足はすかに 残存 | | | | | |
| 11.17 | S.D.5 黑色土 | C 7 陶生土器 | 底 | 鶴形 | 10W7/4に付い黃褐色 | 法 1cm 以下 の砂粒 0.1mm 以下の褐色斑子多 数含む | 断面わずかに 残存 | | | | | 羽状裏文 円形浮 文跡? |
| 12.18 | S.B.6 黑色土 | C 6 陶生土器 | 底 | 後期 | 7.5W6/2K4青褐色 | 深 谷 1cm 以下の呂形・縦 條、褐色斑子多數含む | 口部部1/4残存 | (14.0) | | | | 円形浮文 |
| 13.18 | S.B.6 黑色土 | C 6 陶生土器 | 底 | 後期 | 7.5W7/2K4青褐色 | 法 1cm 以下の砂粒多 数含む | 断面わずかに 残存 | | | | | くの字 呂目 |
| 14.19 | S.B.7 黑色土 鶴色土 | C 6 陶生土器 | 底 | 板根 | 2.5W5/1K4青褐色 | 法 1cm 以下の砂粒多 数含む | 底下平凹模様 内1/4残存 | 8.1 | | | | 脚踏大底(16.7) 本底 |
| 15.19 | S.B.7 黑色土 鶴色土 | C 6 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W6/3に付い黃褐色 | 法 5mm 以下の砂粒多 数含む | 口部はすかに 残存 | | | | | 脚目 |
| 16.19 | S.B.7 黑色土 鶴色土 | C 6 陶生土器 | 底 | 後期 | 10W6/4に付い黃褐色 | 砂 粒 多 數 含 む | 法 5mm 以下の砂粒多 数含む | | | | | 脚踏大底(15.9) |
| 17.21 | S.B.8 鶴尾土 | C 6 上加腹 | 蓋 | | 7.5W6/2K4青褐色 | 褐色斑子含む | 断面わずかに 残存 | | | | | |
| 18.21 | S.B.9 黑色土 | C 5 陶生土器 | 底 | 後期 | 7.5W7/2K4青褐色 | 法 2cm 以下の呂形・縦 條、褐色斑子含む | 内1/2 残存 | (16.0) | | | | 円形浮文 海手 |
| 19.18 | S.B.9 黑色土 | C 5 陶生土器 | 底 | 鶴形 | 7.5W7/2K4青褐色 | 法 5mm 以下の呂形多 数含む | 口部へ脚踏跡 内1/2以下褐色斑子含む | (16.4) | | | | 脚手 |
| 20.18 | S.B.9 黑色土 | C 5 陶生土器 | 底 | 後期 | 7.3W6/2K4青褐色 | 法 1cm 以下の呂形多 数含む | 口部へ脚踏跡 内1/2以下褐色斑子含む | 15.3 | | | | 脚踏へ複数 2本有 り? |
| 21.23 | S.B.9 黑色土 | D 5 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W5/4に付い青褐色 | 法 1cm 以下の呂形・縦 條、褐色斑子含む | 体中央へ直通 約1/2 残存 | (5.5) | | | | 鉄格子 あげ窓 |
| 22.23 | S.B.10 黑色土 | D 5 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 7.5W5/4に付い青褐色 | 法 1cm 以下の呂形多 数含む | 口部はすかに 残存 | | | | | 炭化物付着 |
| 23.23 | S.B.10 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 牛頭後半 | 7.5W5/4に付い青褐色 | 法 1cm 以下の褐色斑子 2枚以上付の褐色斑子含む | 口部はすかに 残存 | | | | | 炭化物付着 |
| 24.23 | S.B.10 黑色土 | D 5 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 7.5W5/4K4青褐色 | 法 2cm 以下の砂粒多 数含む | 口部はすかに 残存 | | | | | 脚目 菓化物付着 |
| 25.23 | S.B.10 黑色土 | D 5 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W5/5に付い青褐色 | 法 1cm 以下の褐色斑子 2枚以上付の褐色斑子含む | 内1/2 残存 | | | | | 1.R.横文 |
| 26.23 | S.B.10 黑色土 | D 5 陶生土器 | 底 | 牛頭後半 | 7.5W5/6K4青褐色 | 法 1cm 以下の砂粒多 数含む | 口部はすかに 残存 | | | | | |
| 27.23 | S.B.10 黑色土 | D 5 陶文土器 | 不明 | 牛頭 | 10W5/3に付い青褐色 | 法 2cm の混合物 | 底部へ脚踏跡 内1/2以下褐色斑子含む | | | | | (15.3) |
| 28.25 | S.B.11 黑色土 | D 4 陶文土器 | 溝跡 | 後期 | 内2.5W5/4K4青褐色 | 石英、沙石含む | 口部部 | | | | | 筒と筒一全体 |
| 30.26 | S.B.11酒済 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 後期 | 10W5/4に付い青褐色 | 法 1cm 以下の褐色斑子 2枚以上付の褐色斑子含む | 口部部約1/3 残存 | (14.0) | | | | SL.R.横文 円形浮 文? |
| 31.27 | S.B.12 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 小頭後半 | 9W2/4K4青褐色 | 法 1cm 以下の石英 2枚以上付の褐色斑子・小豆 色斑子含む | 口部はすかに 残存 | | | | | 脚目 |
| 32.27 | S.B.12 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 7.5W4/6K4青褐色 | 法 1cm 以下の砂粒・褐 色斑子含む | 口部はすかに 残存 | | | | | |
| 33.27 | S.B.13 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 小頭後半 | 10W4/3に付い青褐色 | 法 1cm 以下の褐色斑子 2枚以上付の褐色斑子含 む | 口部はすかに 残存 | | | | | 脚目 |
| 34.27 | S.B.13 黑色土 | D 3 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 9W2/6K4青褐色 | 法 1cm 以下の砂粒・褐 色斑子含む | 口部はすかに 残存 | | | | | |
| 35.27 | S.B.13 黑色土 | D 4 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W5/5に付い青褐色 | 法 1cm 以下の褐色斑子 2枚以上付の褐色斑子含 む | 口部のみ完形 | 5.6 | | | | あげ窓 |
| 36.27 | S.D.05 黑色土 | E 4 5 陶文土器 | 溝跡 | 不明 | 2.5W5/6K4青褐色 | 石英、黄玉、黄白色 | 底部 | (0.7) | | | | |
| 38.29 | S.B.15 黑色土 鶴色土 | D 3 陶生土器 | 底 | 中頭後半 | 10W5/5に付い青褐色 | 法 2cm 以下の黄白色 | 底部1/2残存 | | | | | 脚帶 2 本り 開 脚文 |

第8表 出土遺物觀察表（土器・陶器2）

| 品目 | 品種等号 | 油土等級 | 灰度 | 偏光 | 照相 | 時間 | 色 相 | 附 上 | 現存事 | 口述 (ca) | 枚数 (ca) | 高さ (cm) | 備考 |
|----|------|-----------------------|--------------------|------|--------------|---------------------------------------|------------------------------------|--------------------------------------|--------|---------|---------|---------|---|
| 39 | 5 | S B15 黑色土 褐色土 | C 3 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/6淡黄褐色 | 青 藍色以下の高木多 さむ | 口標部わざかに 残台 | | | | | 指状跡文 |
| 40 | 29 | S B16 黑色土 褐色土 | D 3 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/6灰色 | 青 藍色以下の紺多岐 色 | 門柱わざかに 残台 | | | | | 長じて文 |
| 41 | 29 | S B15 黑色土 褐色土 | C 3 生土上鉢 | 灰 | 後照 | H014/4にない黒褐色 | 青 5cm以下の小節合む | 山下平一郎 高さ12cm存 | | 9.5 | | | 旗桜駄大経(22.6) |
| 42 | 29 | S B15 黑色土 褐色土 | D 3 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/6淡黄褐色 | 青 5cm以下の小節合む | 山下平一郎 高さ12cm存 | (15.8) | | | | 鶴巣駄大経(1.0) |
| 51 | 29 | S B15 黑色土 褐色土 | D 3 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/4にない銀色 | 青 5cm以下の小節合む | 山下平一郎 高さ12cm存 | | | | | 鶴巣駄大経(1.0) |
| 43 | 30 | S B16 黑色土上 褐色土上 | C 4 D 4 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/4にない銀色 | 青 5cm以下の紺多岐 色 | 口標部わざかに 残台 | | | | | 類似 外側面上半 と内側面下半部に 複数の植物跡が 確認飛鼠大経(17.1) |
| 45 | 30 | S B16 黑色土上 褐色土上 | C 4 D 4 生土上鉢 | 灰 | 後照 | 7.5987/6灰色 | 青 5cm以下の紺多岐 色 | 山下平一郎の 手形 | (15.5) | | | | 類似 外側面上半 と内側面下半部に 複数の植物跡が 確認飛鼠大経(17.1) |
| 59 | 42 | S P16 黒褐色土 褐色土上 | A 7 灰褐色土 | 灰 | 前照 | 10010/3にない黒褐色 | 青 3m人の大きさむ | 山下平一郎の 手形 | (14.6) | (6.8) | 5.0 | | 葉状跡印の重 複 |
| 60 | 42 | S P16 黒褐色土 | A 7 灰褐色土 | 灰 | 前照 | 1017/1灰白色 | 青 3m人の小節合む | 山下平一郎の 手形 | 8.7 | 6.4 | 13.4 | | 葉状跡印の重 複 |
| 61 | 43 | 晴褐色土 | D 4 山茶樹根 | 山茶樹根 | 5010/1灰色 | 黑色粒子含む 銀葉 | 口標部へト付 部/5cm存 | | | | | | 西原寺山系に分布 する山茶樹根は、スコ チ状片状、根状根 |
| 62 | 43 | S D 8 荷褐色土 | D 3 山茶樹根 | 山茶樹根 | 10010/1灰色 | 共存む 山茶樹根 | 各一部山茶樹 根部/2段階 存 高さ等 1/3残存 | | | | | | 西原寺山系に分布 する山茶樹根は、スコ チ状片状、根状根 |
| 63 | 43 | S D 8 荷褐色土 | D 3 山茶樹根 | 小苗 | 5016/26オリーブ色 | 黄百合む | 口標部1/2留 残葉 体部一 周葉緑葉 1/3残存 | | 7.05 | 3.9 | 1.7 | | 經年劣化初期現状 |
| 64 | 45 | 黑色土下層 | B 5 捷土上鉢 | 泥鉢 | 中照 | 5016/6赤褐色 | 苔母を多く含む | 口標部 帽地 存 | | | | | 風化している |
| 65 | 46 | 黑色土 | A 6 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 10017/3にない黒褐色 | 青石 藍藻含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 北張C式 |
| 66 | 46 | 黑色土上層 | B 2 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 1018/4山茶樹根 | 圓砂、青苔含む | 口標部一端残 存 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 67 | 45 | 褐褐色土 | B 3 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 7.5987/4にない銀色 | 青石 灰白含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 68 | 45 | 黑色土下層 | B 4 捷土上鉢 | 泥鉢 | 小照 | 7.5925/6暗褐色 | 青石、苔母、石英含む | 口標部一端残 存 | | | | | 風化する |
| 69 | 46 | 黑色土下層 | B 4 捷土上鉢 | 泥鉢 | 中照 | 内7.5914/6暗褐色 | 青石、鐵砂含む | 口標部一部残 存 | | | | | 風化する |
| 70 | 46 | 黑色土 | A 5 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 5016/5山茶樹根 | 青苔含む | 口標部 | | | | | 風化している |
| 71 | 45 | 褐褐色土 | B 3 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 7.5974/6暗褐色 | 青苔含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 72 | 45 | 黑色土 | B 5 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 5016/5山茶樹根 | 青苔、苔母、石英含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 73 | 45 | 7-7 | B 3 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 5016/5山茶樹根 | 青苔含む以下青苔含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 74 | 46 | 褐褐色土 | B 3 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 7.5925/6暗褐色 | 青石、黃葉、黃苔含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 75 | 46 | 黑色土 | B 4 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 7.5925/6暗褐色 | 青石、黃葉、黃苔含む | 口標部 | | | | | 五個ヶ台式斜井 |
| 76 | 45 | 黑色土 | A 5 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 10017/3にない銀色 | 青苔の細胞含む | 口標部 | | | | | 風化を抑制に施す 風化する。 |
| 77 | 45 | 黑色土下層 | B 4 捷土十四 | 泥鉢 | 中照 | 5016/6暗褐色 | 風化、細胞含む | 口標部 | | | | | 風化により変形不 規則 |
| 78 | 45 | 黑色土下層 | B 4 捷土十四 | 泥鉢 | 小照 | 5013/3暗褐色 | 青苔、細胞含む | 口標部一部残 存 | | | | | 細胞爪形を付けて いる |
| 79 | 45 | 黑色土 | A 4 捷土上鉢 | 泥鉢 | 中照 | 7.5915/6暗褐色 | 青苔、石英、重合含む | 口標部一部残 存 | | | | | 細胞と沈澱を行ひ る |
| 80 | 45 | 褐褐色土 | A 7 捷土上鉢 | 泥鉢 | 中照 | 内7.5914/6暗褐色 | 1.5mm大的粗粒、青苔含む | 口標部一部残 存 | | | | | 無酸で結晶を斜方 に誘導 |
| 81 | 45 | 褐褐色土向土 | C 5 捷土十四 | 泥鉢 | 後照 | 内7.5914/6暗褐色 | 青苔、另別2.0mm/1.5mm 青苔 | 網状多岐に青苔含む | | | | | 無酸で結晶を斜方 に誘導 |
| 82 | 45 | 褐褐色土 | C 7 捷土上鉒 | 泥鉢 | 後照 | 内7.5914/6暗褐色 | 青苔 | 口標部 | | | | | 沈澱(5mm)で区 別している |
| 83 | 45 | 森褐色土 | B 3 捷土上鉒 | 泥鉢 | 後照 | 2.0mm以下にない青 褐色 | 青苔、細胞含む | 口標部 | | | | | 大糞B C式斜井 |
| 84 | 45 | 褐色土 | C 6 捷土上鉒 | 泥鉢 | 後照 | 10017/4にない青 褐色 | 青苔、風化、鐵砂含む | 口標部一部残 存 | | | | | 大糞B C式斜井 |
| 85 | 45 | 黑色土 | B 6 D 7 捷土上鉒 | 泥 | | 2.5/6/1灰褐色 稲 5/4/6灰褐色/3/6 青褐色 | 黑底有り | 口標部1/3地 盤 余分部1/3 地盤 5mmは 風化 | (16.3) | | 1.9 | | |
| 86 | 45 | 黑色土 | B 7 捷土上鉒 | 泥 | | 外筒10017/4にない青 褐色 内筒10016/2灰 青褐色 | 青苔の粒子を少含む 青苔 | 口標部へ降 存 | (11.2) | | | | |
| 87 | 45 | 黑色土 | Z 6 十種土 | 灰 | | 7.5917/4にない銀色 | 青苔 | 1.5倍部一端残 存 | (17.0) | | | | 少部分に草亂して いる |
| 88 | 45 | 黑色土 | Z 8 土壤土 | 灰 | | 10017/4にない青 褐色 | 青苔の粒子を少含む 青苔 | 口標部へ降 存 | (13.0) | | | | 少部分に草亂して いる |

第9表 出土遺物観察表（土器・陶器3）

| 品目 | 番号 | 出土地點 | 区画 | 埋頭 | 断面 | 表面 | 胎土 | 保存状況 | 口径 (cm) | 底径 (cm) | 高さ (cm) | 備考 |
|----|----|------------|----------|------|--------------|-------------------------------|--------------------------|------------------------|------------|------------|------------|--|
| 15 | 45 | 褐色土 | B 5 | 須恵器 | 直筒腹 | 2.5D/2H4色 | 黑色粒子含む 痕跡 | 口部破一部上 部1/2焼付 底付 | (10.0) | | | |
| 16 | 46 | 褐色土 | C 7 | 灰陶陶盤 | 直筒腹 | 断面D57/2H4色 55%灰化 | 長石含む | 全体一部外側 高台1/4焼付 | (7.0) | | | 輪状邊付器 |
| 17 | 45 | 褐色土 褐色土 | B 7 | 須恵器 | 7320底 | 2.5D/3H4色 | 1mmの粗砂含む | 全体1/4焼付 | | | | 底高さ16.0cm |
| 18 | 45 | 褐色土 | B 6 | 須恵器 | 9015环 | 2.5D/1灰化 | 底2mmの凹部 灰化物付 | 全体一部外側 灰化物付 | | | | |
| 19 | 45 | 褐色土 | B 8 | 須恵器 | 縫 | 2.5D/1灰化 | 2mmの粗砂含む | 全体一部外側 | | | | |
| 20 | 45 | 褐色土 | A 7 | 須恵器 | 縫 | 3.5D/1灰化 | 灰石付 | 1端部1/10焼 付 底付 | (21.9) | | | |
| 21 | 45 | 褐色土 | C 6 | 須恵器 | 縫 | 55%1灰化 | 褐色、白色粒子含む 痕跡 | 全体1/2焼付 | | | | |
| 22 | 45 | 褐色土 褐色土 | B 7 | 須恵器 | 縫 | 外側D.174/1灰化 内側D.015/2灰化 | 黒色、白色粒子含む 痕跡 | 1端部一部外 部1/2焼付 | (90.3) | | | |
| 23 | 46 | T 1 | 須恵器 | 縫 | 2.57/2H4色 | 全体以上 扇形微波紋 | 底付 | 底付1/5焼付 | | | | (14.05) |
| 24 | 46 | 褐色土 | A 6 | 須恵器 | 縫 | 3.5D/1灰化 | 灰石付 | 口部一部外側 1/5焼付 | (7.0) | (4.5) | 1.6 | |
| 25 | 46 | 褐色土 | C 2 | 須恵器 | 縫 | 55%1灰化 | 褐色、白色粒子含む 痕跡 | 全体1/2焼付 | | | | |
| 26 | 45 | 褐色土 | B 7 | 須恵器 | 縫 | 外側D.174/1灰化 内側D.015/2灰化 | 黒色、白色粒子含む 痕跡 | 1端部一部外 部1/2焼付 | | | | |
| 27 | 46 | T 1 | 須恵器 | 縫 | 2.57/2H4色 | 全体以上 扇形微波紋 | 底付 | 底付1/5焼付 | | | | |
| 28 | 46 | 褐色土 | A 6 | 須恵器 | 縫 | 55%1灰化 | 褐色、白色粒子含む 痕跡 | 口部一部外側 1/5焼付 | | | | |
| 29 | 46 | 褐色土 | B 2 | 須恵器 | 縫 | 5.5D/4灰化 | 前 | 褐色粒子含む | (7.7) | (3.2) | 1.6 | |
| 30 | 46 | T 1 | 山茶輪削 | 小皿 | 2.6Y5/1灰化 | 前 | | 全体一部外側 1/4焼付 | | | | |
| 31 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 小皿 | 1010N/4灰化 | 前 | 褐色粒子 黄石少數含む | (6.4) | (0.1) | 2.0 | |
| 32 | 46 | 褐色土 | A 6 | 山茶輪削 | 小皿 | 5Y7/5H4色 | 褐色粒子 灰4mm穴の 跡含む | 1端部～底部約 3/4焼付 | | | | |
| 33 | 46 | T 1 | 山茶輪削 | 小皿 | 7.5W7/5H4色 | 全体1/2以下 灰石 | 褐色粒子 | 口部～底部 3/4焼付 | (7.0) | (5.1) | 1.5 | 素切り縁 |
| 34 | 46 | T 5-1 | 山茶輪削 | 小皿 | 7.5W7/4/5H4色 | 全体2mm以下 の素粒子 | 口部～茶褐色 無釉含む | 口部～茶褐色 1/3焼付 | (7.5) | (4.0) | 1.3 | 素切り縁未調査 |
| 35 | 46 | T 5-1 | 山茶輪削 | 小皿 | N6/灰化 | 全体1/2以下 の黒色粒子 含む 黒色の吹き出しあり | 口部～底部 1/3焼付 | | (6.3) | (4.3) | 2.1 | 素切り縁あり |
| 36 | 46 | T 1 | 山茶輪削 | 山茶輪 | N5/5灰化 | 前 | | 全体～脚部約 1/7焼付 | | | | (5.3) |
| 37 | 46 | T 7-2 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 2.5Y5/1灰化 | 前 | | 全体～脚部約 1/2焼付 | | | | (5.8) |
| 38 | 46 | T 8 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 7.5W5/3/5H4色 | 全体4mmの縫合含む | 全体～脚部 1/3焼付 | | | | | (7.2) |
| 39 | 46 | T 1 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 5Y6/1灰化 | 全体3mmの縫合含む | 全体～脚部約 1/3焼付 | | | | | (7.2) |
| 40 | 46 | T 8 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 1010N/2灰化 | 全体2mmの縫合含む | 全体～脚部 1/3焼付 | | | | | (7.2) |
| 41 | 46 | T 7-1 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 2.5Y6/1灰化 | 全体1mm以下 の良石 | 全体～脚部 1/3焼付 | | | | | (7.2) |
| 42 | 46 | 褐色土 | Z 2 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 2.5S6/1灰化 | 1mmの白色粒子、5mm の細粒含む 細粒 | 全体一部底付 底付3/4焼付 | | | | |
| 43 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 5Y6/1灰化オーライプ色 | 5mm、5mmの縫、黒色粒子 含む 細粒 | 口部～脚部 1/4焼付 | | | | 底部赤切り痕有 輪台端部スコoba 付根部が一部焼付 土塊付着 |
| 44 | 46 | 褐色土 | Z 5 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 3Y7/5H4色 | 褐色 粒石 褐色粒子 含む | 全体1/4焼付 | | | | |
| 45 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 5Y7/6H4色 | 褐色 | 口部～底部約 1/2焼付 | | | | |
| 46 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 外側D.76/1灰化 6Y5/2灰化 | 1mmの粗砂含む | 口部1/2焼付 1/2粗砂含む | (16.0) | (7.0) | 4.9 | |
| 47 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 1010N/4灰化 | 前 | 全体1/2縫合 | | | | |
| 48 | 46 | 褐色土 | C 1 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 2.5S6/2灰化 | 灰石 灰化物含む | 全体一部外側 高台1/2焼付 | | | | 底部赤切り痕有 内面黒い物有り |
| 49 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 外側D.75/5/5H4色 | 5mm、5mmの縫、黒色粒子 含む 細粒 | 口部～脚部 1/4焼付 | | | | |
| 50 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 1010N/4灰化 | 全体4mmの縫合含む | 全体～脚部 1/4焼付 | | | | |
| 51 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 2.5Y6/2灰化 | 5mm、5mmの縫、黒色粒子 含む 細粒 | 口部～脚部 1/4焼付 | | | | |
| 52 | 46 | 褐色土 | Z 7 | 山茶輪削 | 山茶輪 | 1010N/2灰化 | 全体4mmの縫合含む | 全体～脚部 1/4焼付 | | | | |
| 53 | 46 | 褐色土 | A 7 | かわらけ | 7.5H7/6H4色 | 褐色粒子少數含む | 全体1/4焼付 | | | | | 本ロクロ |
| 54 | 46 | 褐色土 | A 7 | かわらけ | SY6/4H4色 | 褐色粒子少數含む | 口部～底部約 1/12焼付 | | | | | |
| 55 | 46 | 褐色土 | B 4 | かわらけ | 10Y7/4灰化 | 灰石 灰化物少數含む | 口部～脚部約 1/4焼付 | | | | | |
| 56 | 46 | 褐色土 | A 5 | かわらけ | 7.3H7/6H4色 | 褐色粒子少數含む | 口部～脚部約 1/5焼付 | | | | | |

第10表 出土遺物観察表(石器・石製品1)

| 番号 | 種類 分類 | 名前 | 記標名 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 残存率 | 石材 | 特徴 |
|--------|----------|------------------|-------|------------|-----------|------------|-----------|----------|--------------------------|---------------------------------------|
| 5 14 | 乳頭状石斧 | S B 2 | Z 3 | 褐色土 | 12.76 | 4.50 | 3.62 | 32.00 | 表面欠け | 砂岩 脱色? |
| 28 23 | 凹平刃石斧 | S B 10 | D 5 | 黑色土 | 2.71 | 2.52 | 0.82 | 11.45 | 先端 | 黑色表面 壓痕 |
| 37 27 | 往狀刃石斧 | S B 12 (壁内) | D 3 | 褐色土 | 4.36 | 2.35 | 1.42 | 22.54 | 先端 | 褐色表面 破壊 |
| 46 32 | 磨石 - 政石 | S B 7 | C 6 | 褐色土 | 9.41 | 5.21 | 2.05 | 127.30 | 先端 | 砂岩 千枚岩に近似をもつ、端部に研削痕 |
| 47 32 | 磨石 | S B 12 | D 4 | 黑色土 | 8.37 | 4.05 | 1.43 | 81.35 | 表面欠け | 砂岩 表面研磨でわずかに開口する |
| 55 32 | 磨石 | S B 16 | D 2 | 黑色土 | 23.74 | 21.73 | 8.95 | 5438.00 | 先端欠け | 砂岩 土面に施錆 |
| 49 32 | 磨石 | S B 11 (P110) | C 4 | 黑色土 | 32.97 | 12.68 | 11.75 | 5400.00 | 断片 | 砂岩 端部による剥落跡、土面に研削痕 |
| 50 32 | 磨石 | S B 5 | C 7 | 黑色土 | 29.46 | 13.22 | 4.49 | 2502.00 | 先端 | 砂岩 主面に研磨 |
| 51 32 | 台石 | S B 15 | C 3 | 黑色土 | 29.49 | 32.25 | 8.90 | 8415.00 | 先端 | 砂岩 土面がわずかに施錆 |
| 52 33 | 磨石 | S B 11 | C 4 | 褐色土 | 23.82 | 9.77 | 9.44 | 2902.00 | 先端 | 砂岩 破損、表裏、両側面に研磨形成、正面の範囲が範囲、端部右側の風呂と推定 |
| 53 32 | 台石 | S B 4 | C 8 | 黑色土 | 17.48 | 11.75 | 7.35 | 1260.00 | 断片 | 砂岩 研磨 |
| 54 23 | 合石 | S B 15 | C 3 | 黑色土 | 36.89 | 42.20 | 16.96 | 14375.00 | 先端 | 砂岩 破滅跡有り、土面小穴付近に施錆あり |
| 55 33 | 台石 | S B 11 | C 4 | 黑色土 | 26.35 | 24.27 | 2.16 | 9085.00 | 先端 | 砂岩 土面が研磨あり |
| 56 33 | 台石 | S B 8 | C 5 | 黑色土 | 36.81 | 26.33 | 13.30 | 15032.00 | 先端 | 砂岩 土面に研磨あり |
| 57 33 | 断片 | S B 12 | D 4 | 黑色土 | 9.10 | 5.77 | 1.92 | 150.00 | 断片 | 砂岩 52の裏面と同じセメント、底石の蓄積的可逆性 |
| 58 33 | 用途不明 | S B 12 | D 4 | 黑色土 | 7.47 | 6.79 | 1.24 | 91.44 | 先端 | 真骨 領辺の位置部に無理軋壓痕 |
| 125 47 | 打削石器 | B 5 | 黑色土 | 2.20 | 2.29 | 0.38 | 1.09 | 先端欠け | 礫岩 | |
| 126 47 | 打削石器 | A 7 | 黑色土 | 2.61 | 1.66 | 0.35 | 0.84 | 先端 | 礫岩 | |
| 127 47 | 打削石器 | B 6 | 褐色黑色土 | 3.71 | 1.47 | 0.65 | 2.90 | 先端欠け | 礫岩 | |
| 128 47 | 打削石器 | B 4 | 褐色黑色土 | 2.15 | 1.67 | 0.39 | 1.35 | 先端 | 礫岩 | |
| 129 47 | 打削石器 | B 4 | 褐色黑色土 | 2.34 | 1.75 | 0.62 | 1.67 | 先端 | 礫岩 表面小穴部に鳥糞の痕がある | |
| 130 47 | 打削石器 | B 4 | 褐色黑色土 | 1.70 | 1.33 | 0.40 | 0.39 | 先端 | 礫岩 | |
| 131 47 | 打削石器 | S B 2 | Z 8 | 黑色土 | 2.00 | 1.70 | 0.30 | 0.99 | 先端 | 砂岩 破滅が進行 |
| 132 47 | 打削石器 | B 3 | 褐色黑色土 | 1.90 | 1.30 | 0.20 | 0.62 | 側と先端が欠損 | 無縫石 先端の状態から4段品か複数段 | |
| 133 47 | 打削石器 | S B 7 | C 6 | 黑色土 | (1.60) | 1.00 | 0.40 | 0.50 | 底部欠損 | 泥岩 厚端が進行 |
| 134 47 | 打削石器 | D 4 | 褐色黑色土 | 1.70 | 1.40 | 0.30 | 0.65 | 底部と先端部欠損 | チャート 表面品又は厚端品、石造の形態とも取れる | |
| 135 47 | 打削石器 | B 6 | 黑色土 | (2.50) | (1.95) | (0.30) | 0.78 | 底部と先端部欠損 | 泥岩 | |
| 136 47 | 柄帶石器 | B 3 | 黑色土 | 3.79 | 5.47 | 1.39 | 21.37 | 先端 | 泥岩 | |
| 137 47 | 石器 | S B 11 | C 4 | 黑色土 | 3.00 | 4.10 | 1.40 | 9.50 | 先端 | チャート |
| 138 47 | 柄帶石器 | B 5 | 褐色黑色土 | 5.63 | 6.05 | 1.18 | 27.23 | 先端欠け | 無縫岩 | |
| 139 47 | 柄帶石器 | B 3 | 褐色黑色土 | 3.01 | 4.22 | 0.68 | 6.25 | 先端 | 無縫岩 | |
| 140 47 | 打削石器 | B 4 | 褐色黑色土 | 4.90 | 6.04 | 1.44 | 38.02 | 上端欠け | 無縫岩 横材末端に微細斜面 | |
| 141 47 | 打削石器 | B 2 | 褐色黑色土 | 7.87 | 5.97 | 1.35 | 55.31 | 底部断片 | 無縫岩 断端部が激しい、鋸歯 | |
| 142 47 | 断片 | B 4 | 褐色黑色土 | 5.05 | 3.02 | 1.13 | 11.20 | 先端 | 無縫岩 | |
| 143 48 | 石器 | B 3 | 黑色土 | 4.22 | 2.94 | 1.04 | 8.52 | 弁闊 | 無縫岩 | |
| 144 48 | 石器 | B 3 | 黑色土 | 2.30 | 2.09 | 1.40 | 3.09 | 先端 | チャート | |
| 145 48 | スクレイパー | B 2 | 褐色黑色土 | 2.20 | 3.30 | 1.00 | 11.39 | 先端 | チャート 円形 | |
| 146 48 | スクレイパー | B 3 | 褐色黑色土 | 3.40 | 3.80 | 1.10 | 11.40 | 先端 | 泥岩 | |

第11表 出土遺物観察表(石器・石製品2)

| 番号 | 出因地 | 種類 | 遺物名 | 区画 | 層位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 保存状 | 石経 | 備考 |
|--------|-----|----------|-----------------|-----|-----|--------|--------|--------|--------|-----------|------|--------------------------------------|
| 147 48 | | スクリイバー | | B 3 | 褐色土 | 3.99 | 4.59 | 1.59 | 25.51 | 完形 | 瓦岩 | |
| 148 46 | | スクリイバー | S B 15 | C 3 | 褐色土 | 2.39 | 2.90 | 0.80 | 1.09 | 完形 | 瓦岩 | 凹刀 |
| 149 48 | | スクリイバー | | B 4 | 褐色土 | 4.80 | 3.40 | 1.10 | 16.89 | 完形 | 瓦岩 | |
| 150 48 | | スクリイバー | | C 1 | 褐色土 | 5.19 | 3.30 | 1.30 | 20.94 | 完形 | チャード | 石器のような鉄製物質 |
| 151 48 | | スクリイバー | | B 3 | 褐色土 | 3.00 | 3.49 | 1.29 | 16.82 | 複欠頭 | 瓦岩 | |
| 152 48 | | スクリイバー | | A 6 | 黑色土 | 7.30 | 4.50 | 2.00 | 52.86 | 完形 | 瓦岩 | |
| 153 45 | | スクリイバー | | B 3 | 褐色土 | 4.50 | 5.10 | 1.00 | 15.83 | 完形 | 瓦岩 | |
| 154 48 | | スクリイバー | | B 3 | 褐色土 | 2.70 | 5.60 | 1.39 | 15.07 | 完形 | 瓦岩 | |
| 155 48 | | 磁鐵石鑿 | | Z 7 | 褐色土 | 3.17 | 2.32 | 0.36 | 4.58 | 完形 | 磁鐵石 | 基部に穿孔跡中の孔がある |
| 156 48 | | 磁鐵石鑿 | | B 4 | 褐色土 | 3.00 | 1.90 | 0.30 | 3.85 | 試削れ | 瓦岩 | |
| 157 45 | | 磁鐵石鑿 | | B 2 | 褐色土 | 6.71 | 4.94 | 0.99 | 29.58 | 基部欠 | 瓦岩 | |
| 158 48 | | 打削石斧 | | B 3 | 褐色土 | 7.19 | 3.47 | 1.62 | 49.85 | 完形 | 瓦岩 | 正面刃削端鋸歯 |
| 159 48 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 7.66 | 3.77 | 1.76 | 69.41 | 刃部欠 | 瓦岩 | |
| 160 49 | | 打削石斧 | | B 4 | 黑色土 | 9.20 | 4.00 | 2.19 | 33.62 | 完形 | 瓦岩 | 刃部は未加工使用 |
| 161 49 | | 打削石斧 | | B 2 | 褐色土 | 6.75 | 4.76 | 1.79 | 63.70 | 基部断片 | 瓦岩 | |
| 162 48 | | 打削石斧 | | C 3 | 褐色土 | (7.00) | 4.00 | 2.10 | 64.08 | 破部 | 瓦岩 | 背面砂面 |
| 163 49 | | 打削石斧 | | B 6 | 褐色土 | 9.80 | 5.10 | 1.90 | 112.54 | 完形 | 瓦岩 | 側面砂面 |
| 164 49 | | 打削石斧 | | B 5 | 褐色土 | 8.50 | 4.30 | 1.50 | 61.98 | 頭部一部欠損 | 瓦岩 | 自然面に擦痕有 |
| 165 49 | | 打削石斧 | | B 5 | 褐色土 | (6.60) | 4.20 | 1.40 | 55.42 | 頭部欠損 | 瓦岩 | 門ノミ刃 頭部に若干の快りが入る |
| 166 49 | | 打削石斧 | | A 7 | 黑色土 | 9.00 | 3.70 | 1.40 | 57.24 | 中間～刃部一部欠損 | 瓦岩 | |
| 167 49 | | 打削石斧 | | B 5 | 黑色土 | (6.60) | 4.00 | 1.80 | 69.53 | 刃部 | 瓦岩 | |
| 168 50 | | 打削石斧 | | B 3 | 黑色土 | (6.30) | 3.90 | 1.30 | 37.52 | 刃部 | 瓦岩 | サイドに落用跡あり、頭部の穴には早く火候後も使用していたと思われる |
| 169 50 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 6.47 | 3.95 | 1.29 | 35.92 | 刃部欠 | 瓦岩 | |
| 170 50 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 6.31 | 4.21 | 1.31 | 51.02 | 刃部断片 | 瓦岩 | 刃部崩壊断面 |
| 171 50 | | 打削石斧 | S B 13 (瓦岩内) | D 4 | 黑色土 | 11.40 | 4.09 | 2.20 | 102.74 | 完形 | 瓦岩 | 刃部と紙部は門ノミ形となっている |
| 172 50 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 11.87 | 4.10 | 2.43 | 138.86 | 光形 | 瓦岩 | 紙部 |
| 173 50 | | 打削石斧 | | B 2 | 褐色土 | 5.00 | 4.60 | 2.30 | 82.27 | 完形 | 小粒砂岩 | |
| 174 50 | | 打削石斧 | | B 5 | 褐色土 | 11.80 | 3.90 | 2.30 | 178.14 | 完形 | 瓦岩 | 頭部の大隅は比較的早い |
| 175 50 | | 打削石斧 | | B 6 | 褐色土 | (5.10) | (5.40) | 1.70 | 61.04 | 紙部 | 瓦岩 | |
| 176 51 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 9.10 | 5.50 | 1.84 | 108.70 | 完形 | 瓦岩 | |
| 177 51 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 11.98 | 6.15 | 3.63 | 227.69 | 完形 | 瓦岩 | 紙部 |
| 178 51 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | 7.68 | 4.90 | 1.25 | 56.01 | 基部欠 | 瓦岩 | 刃部崩壊断面 |
| 179 51 | | 打削石斧 | | B 6 | 黑色土 | 6.80 | 4.50 | 1.40 | 53.07 | 刃部 | 瓦岩 | 全面に把用したような痕跡がある。頭部欠損は鐵石的な扱い方をしたと思われる |
| 180 51 | | 打削石斧 | S D 8 | D 4 | 褐色土 | 18.30 | 7.50 | 3.20 | 590.75 | 光形 | 瓦岩 | |
| 181 51 | | 打削石斧 | | B 6 | 黑色土 | 8.40 | 5.70 | 2.09 | 138.15 | 頭部一部欠損 | 瓦岩 | |
| 182 51 | | 打削石斧 | | B 4 | 褐色土 | (5.60) | (6.80) | 2.40 | 81.08 | 刃部 | 瓦岩 | 使用中に欠損した可能性有 |
| 183 52 | | 磨盤or打削石斧 | | B 3 | 褐色土 | 7.00 | 9.50 | 1.30 | 130.81 | 完形 | 小粒砂岩 | 頭部欠損が円形か半円か判断が困難 |

第12表 出土遺物観察表（石器・石製品3）

| 序 号 | 種類 分類 | 種類 分類 | 層位 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 保存状 態 | 石材 | 備考 |
|--------|----------|----------|-----|------------|-----------|------------|-----------|----------|----------|---|
| 184 52 | 打削石片 | | B 3 | 暗褐色土 | (8.16) | 3.93 | 1.10 | 50.06 | 完形 | 細粒砂岩 刃部と頭部は塑型剤でなく接着剤で上下を接着していいたり複合性有、底部分離したらよろしくは上下逆 |
| 185 52 | 打削石片 | | B 3 | 暗褐色土 | 9.00 | 7.00 | 2.10 | 69.53 | 完形 | 頁岩 |
| 186 52 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 6.39 | 5.54 | 2.31 | 75.39 | 刃部崩片 | 砂岩 |
| 187 52 | 打削石片 | S B 10 | D 5 | 褐色土と 褐土 | 10.60 | 4.90 | 1.50 | 83.81 | 完形 | 小粒砂岩 欠損の可能性有、小仙鶴を残すことにとては複数を意識的 に分けている |
| 188 52 | 打削石片 | S B 3 | B 7 | 褐色土 | 9.10 | 4.70 | 1.90 | 90.71 | 完形 | 頁岩 上下使用した軌跡有 |
| 189 52 | 打削石片 | S B 15 | C 3 | 褐色土 | 10.00 | 6.50 | 2.60 | 141.93 | 完形 | 細粒砂岩 側面削除の形態を説明させた複序となっている。精整としての形態の大きさにリニア のような形をとったためカイドも認知した誤解がある |
| 190 52 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 11.10 | 4.40 | 2.60 | 141.12 | 完形 | 細粒砂岩 |
| 191 53 | 打削石片 | | B 5 | 暗褐色土 | (8.40) | 4.60 | 2.30 | 86.09 | 頭部欠損 | 細粒砂岩 |
| 192 53 | 打削石片 | | B 6 | 暗褐色土 | (7.50) | (4.10) | 1.90 | 59.95 | 刃へ中間部 | 小粒砂岩 |
| 193 53 | 打削石片 | | A 7 | 焦褐色土 | 6.00 | 2.40 | 1.40 | 19.31 | 完形 | 頁岩 |
| 194 53 | 打削石片 | S B 2 | A 8 | 褐色土 | 11.40 | 6.00 | 2.80 | 206.97 | 完形 | 細粒砂岩 背面している。手で握ると 丁度握る手が良い |
| 195 53 | 打削石片 | | B 6 | 黑色土 | (10.70) | 4.20 | 2.30 | 127.05 | 刃部へ中間部 | 頁岩 |
| 196 53 | 打削石片 | | B 2 | 暗褐色土 | 8.02 | 6.87 | 2.05 | 110.06 | 刃部崩片 | 砂岩 |
| 197 53 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 9.52 | 6.43 | 1.41 | 90.75 | 基部欠 | 細粒、刃削れ抗浜帯 |
| 198 53 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 7.76 | 3.32 | 1.05 | 23.27 | 完形 | 砂岩 |
| 199 53 | 打削石片 | S B 11 | D 4 | 褐色土 | (10.70) | 6.20 | 3.60 | 201.73 | 中間から頭部欠損 | 細粒砂岩 |
| 200 54 | 打削石片 | | 3 2 | 黑色土 | (7.40) | (5.50) | 1.30 | 83.27 | 頭部 | 中粒砂岩 風化によるものか石質によ るものか頭部はゴフツ している。当初はひとつり ひとつを剥離面ととえたが 一回に剥離しなおす |
| 201 54 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 6.02 | 5.87 | 1.81 | 74.31 | 基部崩片 | 砂岩 |
| 202 54 | 打削石片 | | C 1 | 褐色土 | (6.30) | (5.10) | 3.40 | 124.08 | 頭部のみ | 細粒砂岩 打削石片の頭部なし |
| 203 54 | 打削石片or石核 | | B 2 | 黑色土 | 8.40 | 5.80 | 2.20 | 101.90 | 完形 | 砂岩 |
| 204 54 | 打削石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 8.14 | 5.80 | 1.20 | 55.04 | 刃部欠 | 砂岩 |
| 205 54 | 打削石片 | | B 5 | 褐色土 | 9.00 | 4.90 | 1.20 | 32.54 | 完形 | 頁岩 |
| 206 54 | 打削石片 | | A 8 | 褐色土 | 10.61 | 6.55 | 2.45 | 167.36 | 頭部欠 | 細粒砂岩 |
| 207 54 | 打削石片 | | B 2 | 褐色土 | (6.30) | (5.50) | 1.50 | 33.55 | 頭部のみ | 中粒砂岩 |
| 208 56 | 打尖石片 | | Z 9 | 黑色土 | 3.84 | 3.57 | 0.66 | 11.73 | 完形 | 砂岩 |
| 209 55 | 打尖石片 | | Z 6 | 黑色土 | 3.90 | 3.30 | 1.05 | 18.88 | 完形 | 砂岩 |
| 210 55 | 打尖石片 | | Z 6 | 黑色土 | 4.44 | 3.77 | 1.05 | 26.54 | 頭部 | 砂岩 |
| 211 55 | 打尖石片 | | A 5 | 褐色土 | 4.85 | 3.75 | 1.52 | 39.88 | 完形 | 砂岩 |
| 212 55 | 打尖石片 | | B 5 | 黑色土 | 5.00 | 3.97 | 1.25 | 31.25 | 完形 | 砂岩 |
| 213 55 | 打尖石片 | | B 6 | 黑色土 | 5.00 | 4.43 | 1.22 | 32.08 | 完形 | 砂岩 |
| 214 55 | 打尖石片 | | A 5 | 褐色土 | 4.19 | 3.70 | 1.17 | 22.85 | 右側欠 | 砂岩 |
| 215 55 | 打尖石片 | | B 5 | 褐色土 | 4.71 | 4.16 | 1.40 | 46.13 | 完形 | 砂岩 |
| 216 55 | 打尖石片 | | B 3 | 暗褐色土 | 3.86 | 3.25 | 1.00 | 18.79 | 完形 | 砂岩 |
| 217 55 | 打尖石片 | | B 2 | 黑色土 | 5.52 | 5.41 | 1.73 | 77.50 | 完形 | 砂岩 |
| 218 55 | 打尖石片 | | B 3 | 暗褐色土 | 5.06 | 4.37 | 1.65 | 47.31 | 完形 | 砂岩 |
| 219 56 | 打尖石片 | | B 4 | 暗褐色土 | 5.40 | 5.35 | 1.05 | 65.57 | 完形 | 砂岩 |

第13表 出土遺物観察表（石器・石製品4）

| 番号 | 発見場所 | 目次番号 | 器種 | 遺物名 | 正面 | 側面 | 大きさ (cm) | 軸 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (kg) | 破壊率 | 石材 | 備考 |
|--------|------|------|-----|------|-------|------|-------------|-----------|------------|------------|-----|-------------------|----|
| 220 50 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 3.98 | 4.03 | 1.43 | 50.59 | 完形 | | | | |
| 221 56 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.51 | 3.62 | 0.88 | 17.27 | 完形 | | | | |
| 222 58 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.51 | 3.81 | 1.33 | 22.96 | 完形 | | | | |
| 223 56 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.89 | 3.71 | 1.18 | 30.50 | 完形 | | | | |
| 224 56 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.61 | 3.76 | 1.25 | 26.43 | 完形 | | | | |
| 225 56 | 石斧石錐 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.47 | 4.07 | 1.36 | 29.84 | 完形 | | | | |
| 226 56 | 打火石頭 | | B.4 | 暗褐色土 | 5.30 | 3.72 | 0.94 | 26.08 | 完形 | | | | |
| 227 56 | 石斧石錐 | | B.4 | 暗褐色土 | 4.77 | 4.76 | 1.24 | 31.73 | 裏面欠 | | | | |
| 228 55 | 打火石頭 | | B.6 | 暗褐色土 | 5.24 | 4.49 | 1.40 | 41.79 | 完形 | | | | |
| 229 57 | 打火石頭 | | C.4 | 褐色土 | 5.07 | 4.02 | 1.99 | 88.71 | 完形 | | | | |
| 230 57 | 打火石頭 | | | 灰土 | 5.16 | 4.26 | 1.44 | 42.17 | 完形 | | | | |
| 231 51 | 鉗刀 | | B.4 | 暗褐色土 | 11.92 | 9.17 | 2.77 | 410.60 | 完形 | | 砂岩 | 主面部に敲打痕の集中、細部に亂打痕 | |
| 232 57 | 礫石 | | B.5 | 暗褐色土 | 7.08 | 6.70 | 5.81 | 354.00 | 完形 | | | 端部および周縁部に亂打痕 | |
| 233 58 | 鉗石 | | B.5 | 暗褐色土 | 7.66 | 6.72 | 2.52 | 163.25 | 完形 | | 砂岩 | 主面部に亂打痕の集中 | |
| 234 58 | 鉗石 | | B.5 | 暗褐色土 | 5.67 | 6.28 | 3.21 | 125.50 | 完形 | | 砂岩 | 主面部に亂打痕の集中 | |
| 235 58 | 鉗石 | | B.4 | 暗褐色土 | 6.72 | 4.87 | 4.64 | 190.60 | 完形 | | 砂岩 | 上下面に亂打痕 | |
| 236 58 | 鉗石斧村 | | B.4 | 暗褐色土 | 6.19 | 4.76 | 4.35 | 167.50 | 完形 | | 砂岩 | 投擲の可能性あり | |
| 237 58 | 鉗石斧村 | | B.4 | 暗褐色土 | 5.50 | 5.29 | 2.87 | 106.10 | 完形 | | 砂岩 | 投擲の可能性あり | |
| 238 56 | 鉗石斧村 | | B.4 | 暗褐色土 | 6.05 | 5.87 | 4.67 | 212.60 | 完形 | | 砂岩 | 投擲の可能性あり | |

第4節　まとめ

上ノ山遺跡は金谷地区としては、発掘調査によって内容が明らかになった数少ない遺跡の一つになった。第二東名の埋設に伴う発掘調査であったため、明らかになった部分は路線脇に限られるが、周辺にある局知の弥生時代の遺跡よりもさらに古い弥生時代中期後半の集落の状態を知ることができた。また、これまで周辺で把握されていない奈良時代の資料が得られたことは、急峻な丘陵と河川の氾濫原が大半を占めるこの流域における当時の集落立地の一端を示唆するものとして興味深い。

縄文時代の集落

遺跡の草創期にあたる縄文時代では、中期～晩期の資料が得られている。土器をみると、今回の出土点数のほぼすべてにあたる、実測し得た25点中17点が中期、1点が後期、3点が晩期、1点が後～晩期、時期が判然としないもの3点となり、中期の後は晩期がやや多いことが分かる。彼らの精神世界やその流儀を垣間見ることができる興味深い事例として、埴輪を伴うS F 9が堅穴住居跡よりもやや離れた位置に設けかれていることも、土器量と相関して遺跡の盛衰が中期にあることを示している。近接する駿河山遺跡からも中期の埴輪が複数基検出されているので、両者の比較によりこの事例をより深く理解することができるだろう。また、当該期の堅穴住居跡は2軒を想定したが、いずれも尾根部に近接して建てられたものなので、同時期には存在しない。屋根上の他の部分に住居が確てられていないことは、住居1軒の生活空間を暗示しているのであろうか。

さて、大井川流域の縄文時代遺跡は中期を主体とするものが多いが、上・中流域においては駿田原遺跡（静岡市）、下開土遺跡、大島遺跡、山王遺跡、上長尾遺跡（川根本町）、天王山遺跡、家山原遺跡（川根町）などに、下流域では風西遺跡（島田市）に後～晩期の資料がある。これら遺跡の分布から、後～晩期の遺跡は下流域に行くにしたがって減少する傾向が窺える。このような状況の中で、本遺跡から後～晩期の資料が得られた意義は大きい。近接する丘陵上に立地する駿河山遺跡では当該期の資料が得られていないので、中期段階の集落を営むことに適した台地上すべてが後期段階に継続するわけではない。より条件の良い土地が周囲にありながら、彼らがこの地を晩期にいたるまでの居住地とした理由は十分理解できないが、自然条件のほか集落を構成する集団の継続性や、彼らがもつ居住域への専有性が作用していたことも想定しなければならないだろう。また、遺物では土器の割に打製石斧が多量に出土していることが興味深い。このように打製石斧が土器量を凌駕する傾向は、半場遺跡（浜松市・旧佐久間町）、鶴峯遺跡（浜松市）、清水天王山遺跡（静岡市清水区）などにもみられる。

弥生時代の集落

弥生時代の集落は、調査区全域が耕作等によって削平されていることや、周囲の天端返しにより失われている住居跡があることを想定すれば、本来は今回検出された新設を上回るもので構成されていたと考えられる。今回検出された住居跡16軒中、6軒が中期後半（拡張を含む）、7軒が後期、時期不明が3軒となる。

中期後半の住居跡は、丘陵上部に3軒（S B 1・2・4）、尾根部に3軒（うち2軒は拡張）が分布する。S B 2・4・10はそれぞれが20m前後の隔たりを持つが、S B 10とS B 12・18は近接するので、集落の中でも近い関係であったとも考えられる。住居のプランはいずれも梢円形（拡張されているS B 2の当初形も梢円形と理解する）であり、入り口を南～南南東側に開いていたと想定できることにも、一定の規範が感じられる。このように、埋まりかかってくぼみとなつた埋没谷を取り巻く丘陵部に配置された集落であったと思われる。

後期の住居跡は尾根部に集中する傾向がある。したがって、中期後半の集落のように埋没谷を挟んで

西側にまでも派生するとは判断できない。住居のプランは梢円形状を呈するものと円形へ角の張る円形を呈するものに大別される。特に梢円形状を呈する住居は、10~20mおきに建てられている。間隔を置くことは中期後半の住居と同様であるが、相互の距離がまちまちであることは異なっている。これらはSB11からSB9、SB5へと直徑40m程度の円弧に沿って建てられているように見える。上ノ山遺跡の場合、住居の乗る尾根の東側には腰ノ沢による谷があるために東側に住居を配置することは不可能であり、東南東を向いた配置とならざるを得ない。しかし、このような配置傾向は、東から東南東に住居を配することが可能な駿河山遺跡にもみられるため(河合2002)、意図的な作用とも考えられる。東へ東南東は太陽が昇る方向であるので、その方向を空けて集落内に生気を取り込むというような自然崇拜に基づいた住居の配置が、当該期のひとつあたりであった可能性が高い。

彼らの生業を示す情報は少ない。しかし、丘陵を下れば大代川が形成した谷底平野に出ることができるという立地条件から、彼らが水田稲作を行っていたことを想像するのは難しいことではない。また、施孔途中の磨製石器や砾石の存在は、ここで石器の調作が行われていたことを示唆するものである。

古代の集落と墓域

古代の遺構は、中世の遺構とは分離が難しいが、おそらくより丘陵の上位にある掘立柱建物群が居住域であったものと推測される。遺物は少ないものの、奈良時代のものが比較的揃っている。特に須恵器の甕が複数個体存在することは、丘陵の下から随時水を汲み上げ溜めていたことを思わせる。また、須恵器の双耳杯は周辺でも出土例が極めて少ないのであり、集落内での特殊な目的に用いられた可能性を思わせる。

平安時代にいたると遺物が少なくなる。このなかで注目されるのが、火葬骨を入れて埋納した蔵骨器と捉えられる椀がかぶせられた灰釉陶器の壺である。当該期の灰釉陶器がこのほかはほとんど出土していないことから、平安時代、特に9世紀以降は集落域が廃絶し、11世紀にいたって墓域として利用されるようになったことを示している。

中世の集落と丘陵部における生活の放棄

この場所が再度集落化するのは中世前期である。近接する横岡窯の山茶碗類が搬入されていることからも明らかである。山茶碗類の中には、これまで「生焼け」として処理してきた、にぶい橙色を呈しやや軟質に焼きあがる一群がある。特に小皿の形態に多いことは、ほぼ同時期と思われる非クロコ系のかわらけの存在からも、これらがかわらけを指向して作られ、使用されたものと思われる。

古代～中世前期のこの地域が賃佃庄内に含まれることは先述したところである。上ノ山遺跡から見下ろす平野部には賃佃郷が存在したと考えられるため、すでに平野部の積極的な開発は古代以前に開始されていたと思われる。そして横岡付近を中心に営まれる農業も、茲匂経営の一端を担っていたことが想定される。古代以後の平野部の開発がどのように進行していくのかを、上ノ山遺跡の成果から推し量ることは困難である。しかし、大井川の影響を受けにくい大代川の谷底平野や、谷の出口付近と牛尾山の南麓付近に想定される大井川による後背湿地は耕作地としてある程度の安定的な生産力をもっていたことは確かであろう。しかし、台地上に集落が占地することを鑑みれば、中世前期までの神積塗は場所によって居住するにはいまだに不安定であったと考えざるを得ない。

中世後期の実落は、金谷地区ではいまだ把握されていない。おそらく耕地となる沖積地の安定化に伴って丘陵での暮らしに終止符を打ち、丘陵部の比較的安定した地域に移りて現集落の母体となつたのであろう。

このように今回の調査は、これまで発掘調査例の少なかった金谷地区においては、駿られた範囲の調査にもかかわらず新たな発見を多く含んだ、示唆に富む内容となった。特に縄文時代～弥生時代のあり方は、駿河山遺跡の内容と照らし合わせ熟考することによって、大井川流域の当時の生活を復元する糧

となるであろう。また、古代～中世前期の集落の立地が明らかになったことは、墓域と集落、あるいは窯などの生産域と集落といった、地域の景観を俯瞰するきっかけとなるだろう。

現地調査及び資料整理ならびに本論の作成にあたって、多くの方々のご協力をいただいた。また、次の方々からは、様々に御指導、御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。(敬称略、順不同)
飯塚勝夫、石田 索、瀧谷昌彦、松井一明、島田市教育委員会のみなさん

参考文献

- 今村啓嗣 1985「五畿」台式土器の誕生－その発生および東北地方との関係を中心に－』『東京大学考古学研究室研究紀要』第4号 東京大学考古学研究室
- 岩木 史 1995『雄川式土器における縄文上の問題』『10周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 金谷町教育委員会 1983『駿河山2号後発縄文空洞古墳』
- 金谷町史編さん委員会 2003『金谷町史』資料編四考古・歴史
- 金谷町史編さん委員会 2004『金谷町史』遺史編本編
- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の模式と縄文』東海誠 不二社
- 河合 修 2001「青灰色のうつわ～福原郡金谷町横岡字塩谷の灰釉系陶器について～』『研究紀要第8号』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 河合 修 2002『金谷町駿河山通路』『静岡県における弥生時代聚落の発達』静岡県考古学会
- 菊川町教育委員会 1985『三沢西原遺跡発掘調査報告書』
- 国土庁土地局・静岡県地図策画課 1994『土地保全図』(静岡県)
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『年報18』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003『すやす考古論説』
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編9近世1
- 静岡県 1995『静岡県史』資料編8中世4
- 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編 1998『縄文時代中期前半の東海系土器群について－北里型式土器の成立と展開－』静岡県考古学会シンポジウム'97
- 第8回東海陶器文化財研究会候補大会実行委員会編 1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』I、II 東海陶器文化財研究会
- 静岡県考古学会 1983『弥生後期の聚落関係』静岡県考古学会シンポジューム5
- 静岡県考古学会 1979『須恵器－古代陶質上器の誕生』静岡県考古学会シンポジューム2
- 道谷昌彦 1982『旗振古窯跡発掘の年代について』『静岡県考古学研究』13 静岡県考古学会
- 島田市教育委員会 1988『山正前沢跡発掘調査報告書』
- 島田市教育委員会 1985『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』
- 島田市教育委員会 1983『旗振古窯跡』
- 鈴木道之助 1991『須恵器 石器入門事典』編文 才常房
- 寺内勝夫 1987「五畿」台式土器から棚板式土器へ…形式変遷における一観点』『長野県埋蔵文化財センター紀要』1 財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 中嶋郁夫 1988『いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討』『瓶模』2号
- 中嶋郁夫 1993『東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模写」－「菊川型式」譲り－』『瓶模』4号
- 平野喜郎 1988『東海地方における弥生時代の石器について』『研究紀要』1 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

袋井市史編纂委員会 1983「袋井市史」避火鍋

澄井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会

・上鏡也 1986「中部・西関東地方における鎌文時代中期中須土器の変遷と後葉土器への移行」『長財県考古学年報』51号 長財県考古学会

図 版

図版 1



南からの遺跡遠景



東からの遺跡遠景

図版2



西からの遺跡遠景



南からの遺跡遠景



調査区全景（俯瞰）

図版 4



SB 1~3



SB 4・5

図版 5



S B 5~8・19



S B 10~13・18

図版 6



S B12・13・18・15～17、SH 8



S B11～18



S B14 (北より)

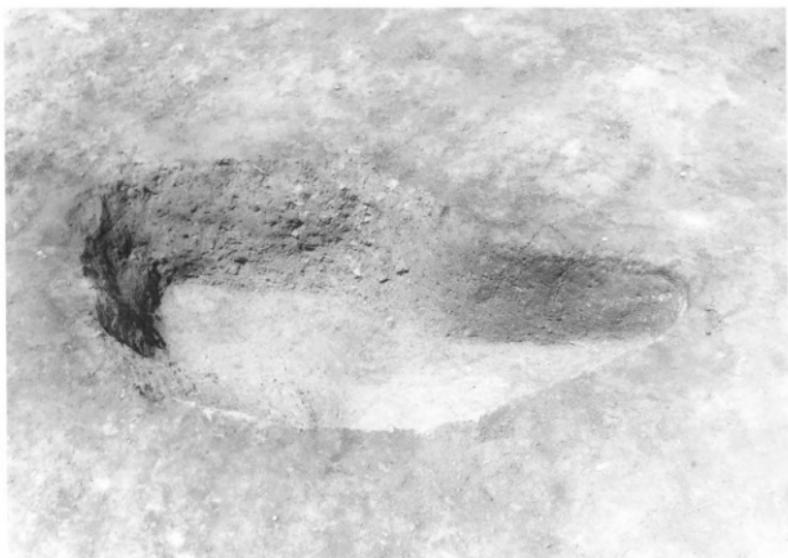


S F 9 遺物出土状況

図版 8



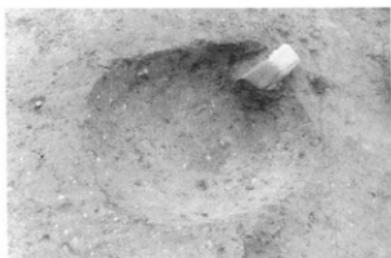
S F11半截状況（北より）



S F11（東より）



S B 1・2 (東より)



S B 2 西側炉跡



S B 2 東側炉跡



S B 2 遺物出土状況 (壺 南東より)



S B 2 遺物出土状況 (乳棒状石斧 北より)

図版10

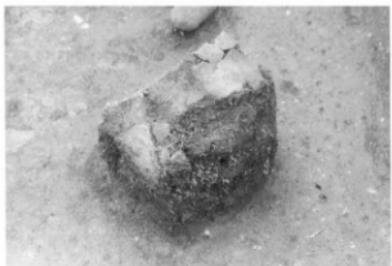


S B 3 (北より)



S B 4 (南より)

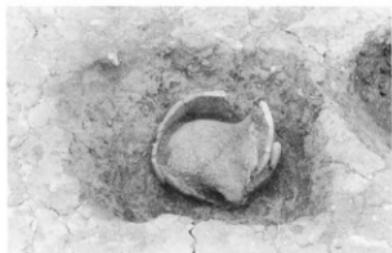
図版11



SB 4 遺物出土状況（土器）



SB 5 遺物出土状況（壺）



SB 7 内小穴 P 3 遺物出土状況



SB 5（南より）

図版12



S B 6 (南より)



S B 7 炭化物検出状況



S B 7 (北より)



S B 8 (南より)

図版14



SB 9 遺物出土状況



SB 9 (南より)



S B 9 遺物出土状況（壺）



S B 10 遺物出土状況（扁平片刃石斧）



S B 11 炉跡検出状況

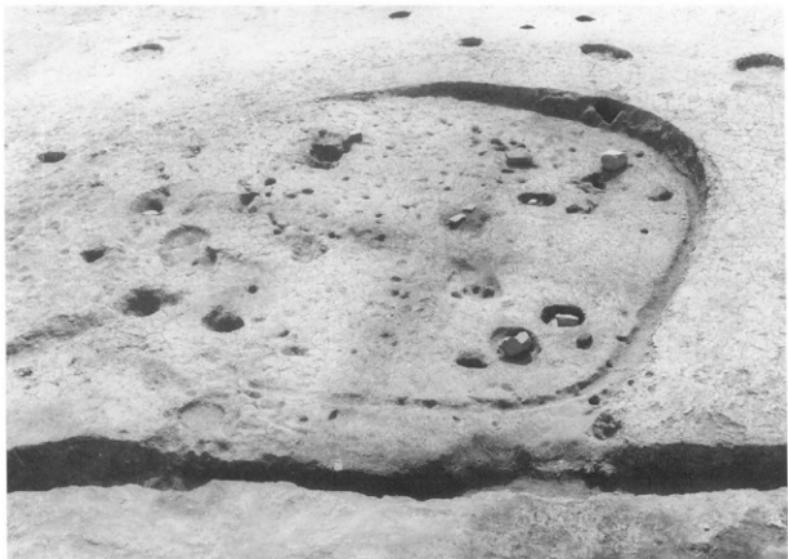


S B 11 遺物出土状況



S B 10（南より）

図版16



S B11 (南より)



S B12・13・18 (北より)

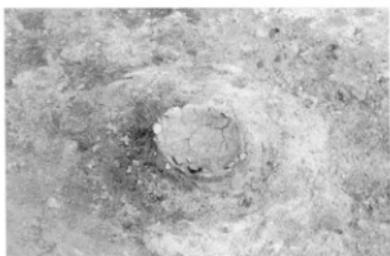
図版17



S B12遺物出土状況（柱状片刃石斧 東より）



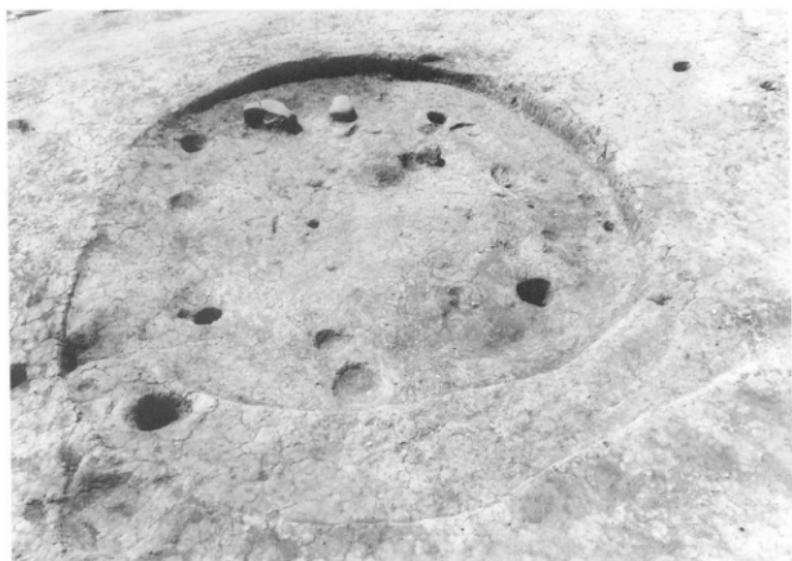
S B12遺物出土状況（用途不明石製品 東より）



S B12遺物出土状況



S B12・13遺物出土状況



S B15・17（東より）

図版18



S B15焼土検出状況（北より）



S B15遺物出土状況1（壺 西より）



S B15遺物出土状況2



S B15遺物出土状況3



S B16（北より）



SB16遺物出土状況



SB19(西より)

図版20



S F 10



S D 8 遺物出土状況（打製石斧）



遺物出土状況（磨製石鋸）

図版21



S P141遺物出土状況（南より）



S H1・2・3（西より）

図版22



S H 4 (南東より)



S H 6 (北東より)



S P181遺物出土状況 1



S P181遺物出土状況 2

図版24



溝 S D 8 (北側)



溝 S D 8 (南側)



埋没谷と調査状況

S F 9



1



1



1

S B 1

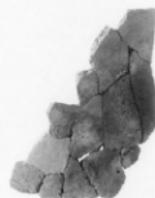


2

S B 2



3



4

S B 4



6



7



8

S F 9、S B 1・2・4出土土器

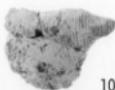
図版26

SB 5



9

SB 5



10

SB 7



14

SB 6



12

14



13

SB 7



14

SB 7



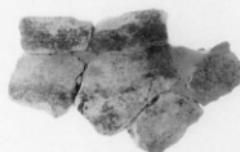
16

SB 7



15

SB 8



17

SB 5～8出土土器

図版27

S B 9



18

S B 9



19

S B 9



20

S B 10



21

S B 11



29



30

S B 10



23



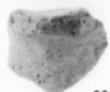
24



22



25



26



27

S B 9~11出土土器

図版28

S B12



32

S D 5



36

S B13



34

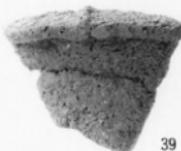


35

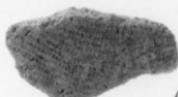


33

S B15



39



40



43

S B15



38

S B15



41

S B12・13・15、S D 5出土土器

図版29

S B15

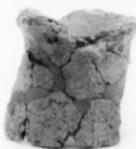


S B16



42

S B16



S B 7



45

44

S B12



47

S B 2 + 10 + 12



5



37



28

S B出土土器・石製品

図版30

S B16



S B11



48

49

S B 5



S B15



51

50

S B 4

S B11



53

52

S B11

S B15



55

S B出土石製品

54

図版31

S B 8



S B 12



57

58

56

S P 181



59

S P 181



60

59



S D 8



61



62



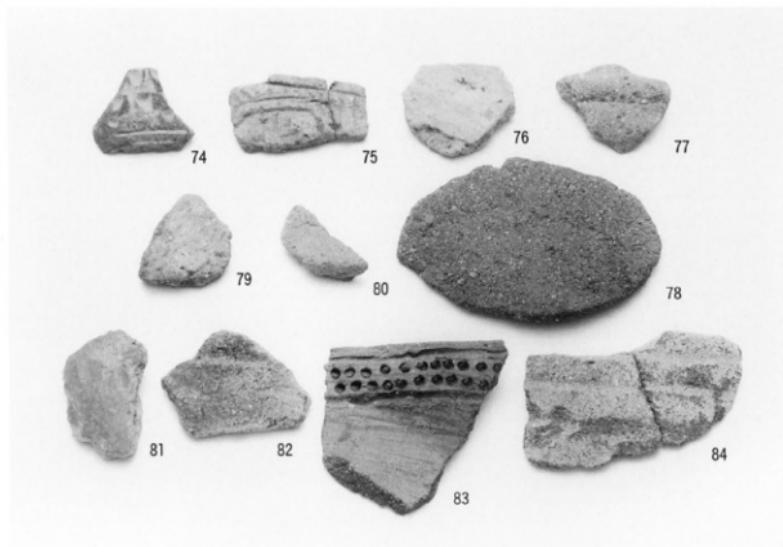
63

S B出土石製品、S P 181出土灰釉陶器、S D 8出土土器

図版32

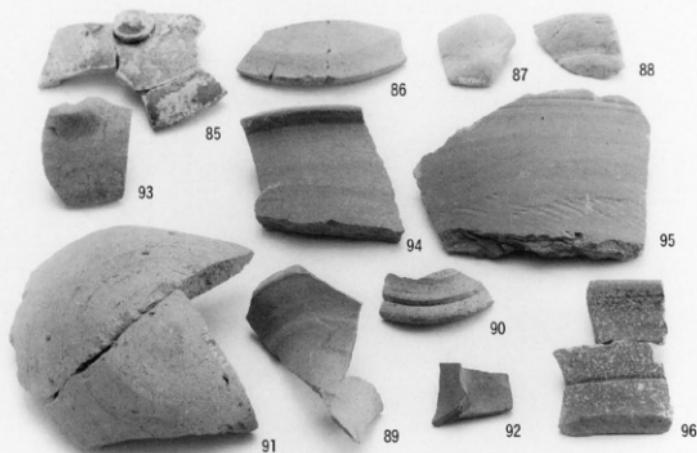


遺構外出土土器 1



遺構外出土土器 2

図版33



遺構外出土土器 3

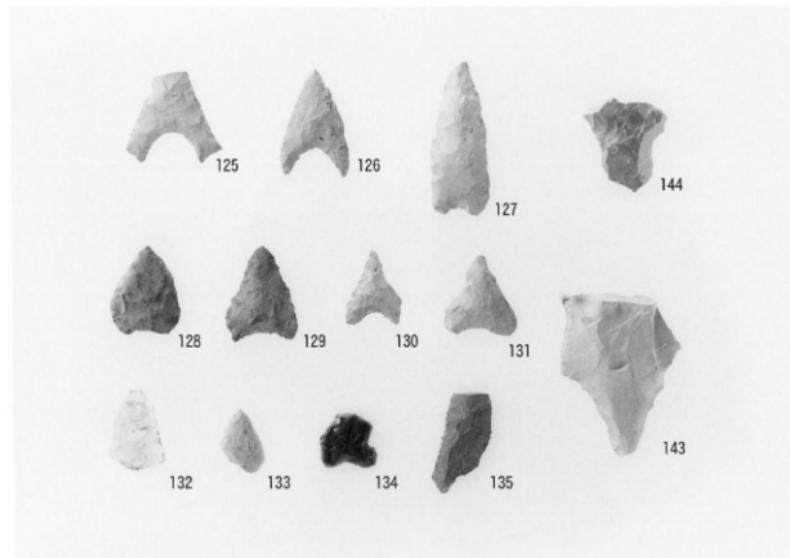


遺構外出土土器 4

図版34

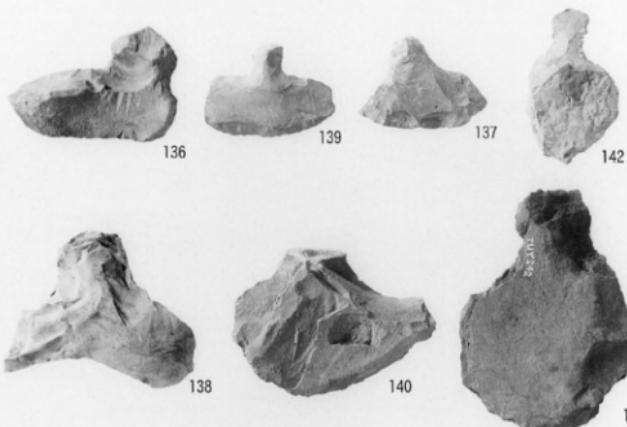


遺構外出土土器 5

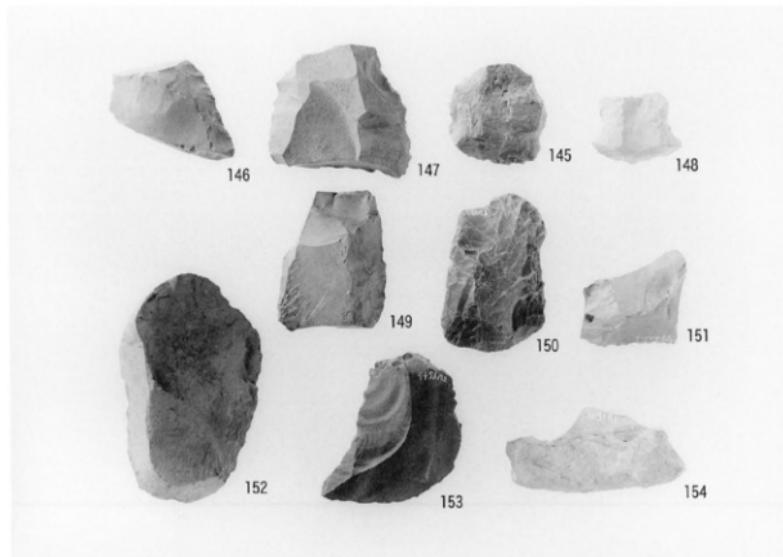


打製石鏟・石錐

図版35

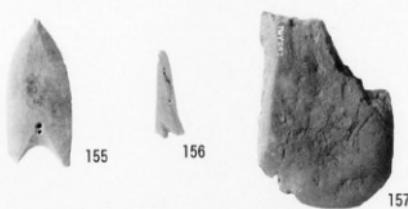


石匙

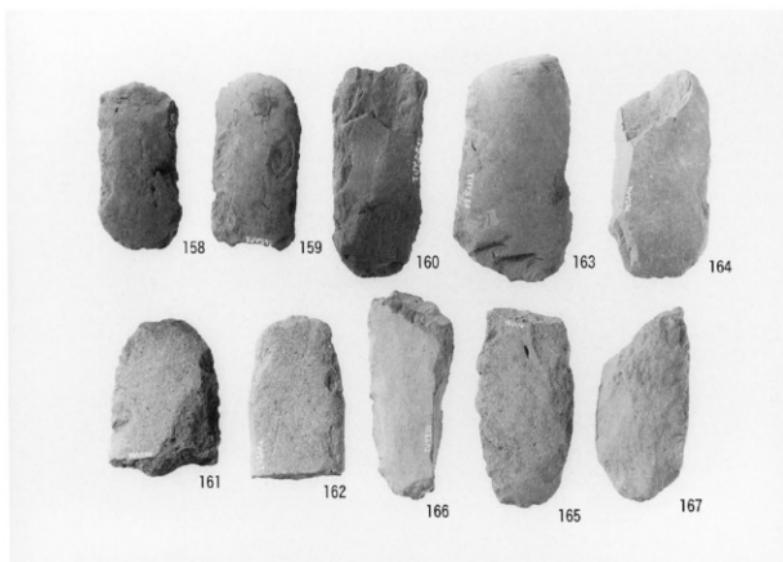


スクレイバー

図版36

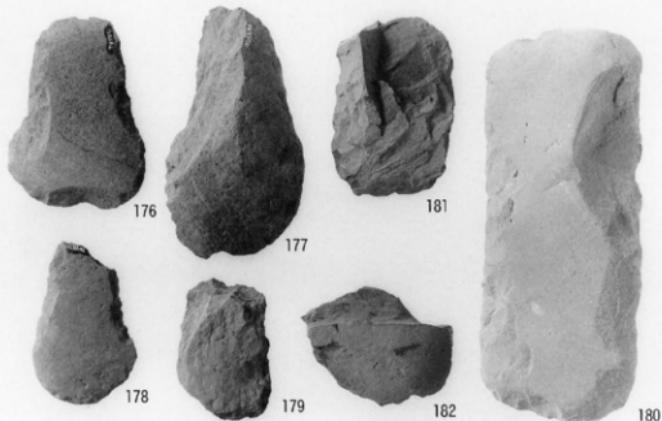
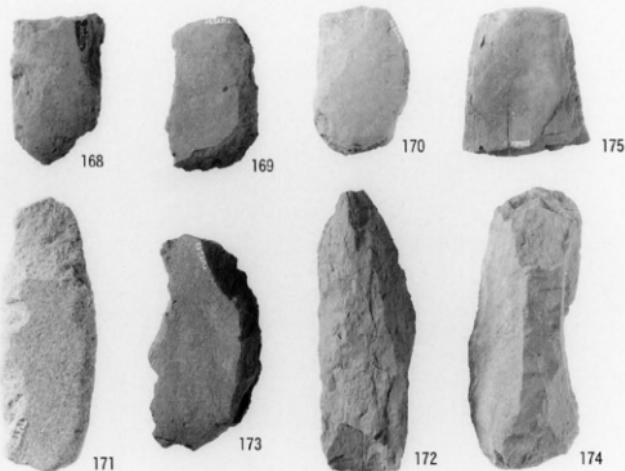


打製石錐・磨製石斧



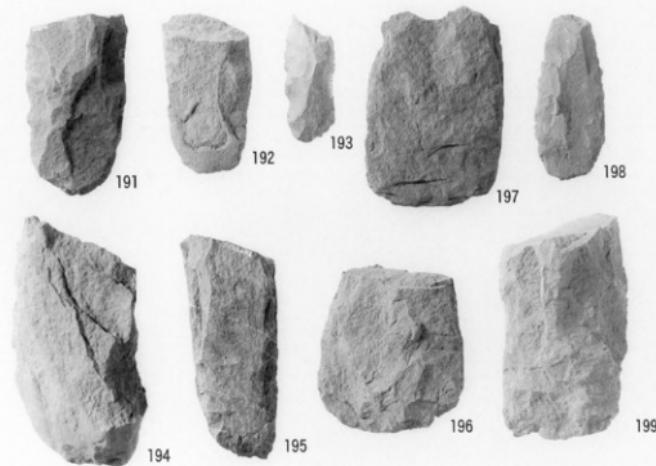
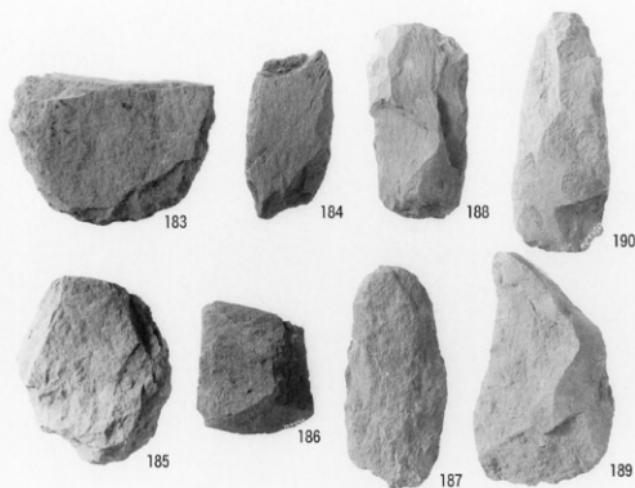
打製石斧 1

図版37



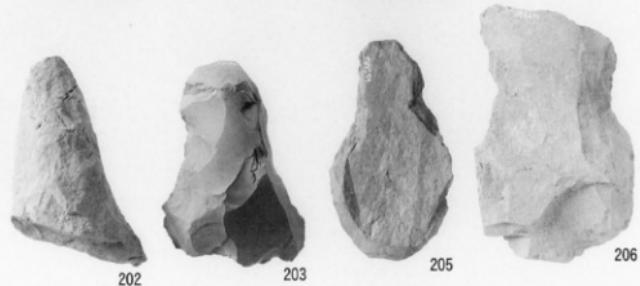
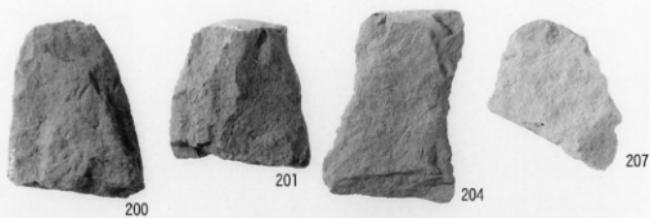
打製石斧 2

図版38



打製石斧 3

図版39



打製石斧4



打欠石錘1

図版40



打欠石錘2



敲石

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第168集

上ノ山遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市 - 1

平成18年3月24日

編集・発行 周囲法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-9002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

T E L (054)252-4281㈹

F A X (054)252-4266

印 刷 所 松本印刷株式会社
静岡県静岡市葵区南安倍1-1-13
T E L (054)255-4862㈹

